
東方戦国演義

+plerice

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方戦国演義

【Nコード】

N3208S

【作者名】

tplerice

【あらすじ】

願望機 巨大な力を内包したモノ。
それを、境目に潜む妖怪は手に入れた。
常人なら喜ぶ所だが、妖怪は頭を抱えた。
一ヶ月後、とある場所に人間たちは集められていた。
しかしその場所と人々は、異常の塊でしかなかった。

序章、箱庭と覇者（前書き）

この作品は、上海アリス幻樂団原作の『東方Project』

コーエー発売の『戦国無双』、『真・三國無双』

TYPE-MOON原作の『fate』

及び、wikiや多数のメディアの情報で出来上がっている二時創作物です。

人死や原作のネタバレも含まれています。苦手な方はお気をつけ下さい。

序章、箱庭と覇者

一月ほど前まで、此処にはまだ何も無かった……でも、今は違う。いたずらに溢れていた力は向かう方向を示され、先ず小さな部屋に成った。

そこは、窓どころか出入口すら無い、ただの箱でしかなかったが、彼女はそこに籠り、再生し続ける暴力の制御に勤^{いそ}しんだ。

あれから、やっと始められる所まで来たというのに、彼女は未だ眠ったままだ。

……なら、先に始めてみよう。

失敗は在り得ない。過ちが起こる可能性も……無いはず。

御機嫌よう。

皆様、目は覚めていますね。

私は境界を操る妖怪　八雲紫^{やくもゆかり}です。

今から皆様の置かれている状況をお伝えします。

これを聞き逃すと、目標にする事を知る事が出来ず、彷徨う事に成るでしょう。お気を付け下さい。

先ず、この世界に関する事です。

ここは紀元三世紀頃……現在では三国志として伝わっている時代の明^{みん}を参考に、私が創造した世界です。

隔絶されて逃げ場も無い、という意味で『箱庭』と仮称します。

『箱庭』の全貌は、横長の楕円に近い形の大地。大まかに記した地図を全員に配布してあるので、持ち物を良く調べて下さい。

次に、目標にして頂く事とは、五年以内に『箱庭』の覇者つまり天下統一を果たしてもらいます。

統一の基準は、九つ在る全ての州に領地を持ち、自勢力以外の領地を無くすこと。

もしくは、四年目以降に敵対者を無くし、全勢力の長から従属署名を貰うこと。

覇者と成られた方には、見返りを用意して在ります。

それは、どのような願いでも、一つだけを叶える権利を約束します。不老不死や他人の蘇生、世界征服など、世界の摂理に反する事も可能です。

何故、五年という期限が在るのかと言うと、それが『箱庭』の寿命だからです。

皆様は『箱庭』に居るので、寿命を迎えて壊れてしまえば、皆様も命を落としてしまいます。

次に……恐らく大多数の方々が抱いているであろう、疑問と違和感について。

勤の良い人なら気が付いて居るかもしれませんが、ここに居る者は全員故人です。

今生きていると感じているのは、仮初の命を与えられているから。しかし、このままでは世界の崩壊を逃れたとしても、再び死者に戻ってしまいます。

自身の意志と関係無く蘇生されたというのに、また強制的に死者に戻すのは余りに酷い。

ですので、覇者の傘下に入っていた方々と、覇者自身には、仮初

では無く『第二の生』を与えられます。その後は、崩壊までの間に脱出させます。

天下統一が果たされれば、戦いは終わりですので……その時点で他の方々にはご退場願います。

……もしも、署名という名の賛同を得て戦いが終わった場合は、残念ですが、第二の生を得る事が出来るのは、二勢力に限定するの
で注意してください。

最後に、ある意味最も注意が必要なことを

この世界では『噂』で性格や力が変化します。

強いという噂が広まれば、その方は強くなり、悪行を繰り返せば、
性格もねじ曲がります。

逆もまたあり得るので、生前の自分に悔いが在る方々は、努力し
だいで変われる事も可能です。

以上で話は終わりです。

何故このような事をするのか、疑問に思っているでしょうが……。
結果として戦いに勝利した者の願いを叶える事は、私達にも利益
が生まれます。

五年を過ぎて崩壊が始まり、全てお流れでは私も困ります。素晴
らしい戦いを期待していますよ。

それでは、勝者の方はまた会いましょう。

空から聞こえていた声は、途絶えた。

閑散とした荒野に、灰を被った様な白い髪の方が居る。

かつて私は、自分の思う正義を貫き通し、戦い続けた。

その果てに辿り着いた場所は 昔憧れた英雄の姿ではなく、
長の守護者として、永遠に剣を振るい続ける結末だった。

生前と同じく、矛盾した正義を遂行し続けている内に、私は永遠からの開放を望むように成った。そして思いは偶然を呼びこみ、私は最初で最後であるう、自分の願いを叶える機会を得た。

しかし、願いは私自身の介入により形を変えることに成る。

殺すつもりだった少年を認め、赤い少女に託し 彼女はそれを
受け入れた。

結果として、私は目的を失い、永久から開放される事も無くなっ
た……………

八雲紫は、我々を争わせようとしている。

私達のような死者を扇動する為、蘇生という餌を撒いた。

……確かに、魅力的な話だ。私は生き返りたい訳ではないが、大
多数の者が生き返りたいと思うだろう。

願いにしても、生前の私が、正義を一瞬でも忘れる。もしくは赤
い少女の未来に幸福でも与えられれば良い。これくらいしか無いが、
前者はもう叶える必要が無いし、後者も死者が介入すべきではない。
まあ私のような者では、覇者など到底無理だろうが。

それに、八雲紫とやらの話を、全て鵜呑みにしろという方が間違
っている。

願いを叶えられる保証は無いし、蘇生出来る明確な人数も示して

いない。

覇者一人の願いは叶える。しかし他人の願いが無理だとは言っていない。それにもし覇者の願いが、八雲紫の死で在った場合はどうするのだろうか……奴にも目的が在ったようだが、その内容によりそうだ。

第二の生を得られのは覇者の一勢力。もしくは指定なしの二勢力。単純に考えても二倍。例えるなら

飢えた人間が五十人居たとする。食料の蓄えは切り詰めて五百人分。外部からの入手は不可能。

十日間耐えれば配給が来て同じ量の食料が手に入る状態の場所に、もう五十人加わった場合……。

食料は五日で底を尽く。結果としては皆で分け合い全員死ぬか、半分を見殺しにするしか無いだろう。

……これは極論だが、これ程に差がある事柄だ。

幾ら何でも人数が違いすぎる。

こんなにも無茶な事や、曖昧な願いでも叶える事が出来るもの…

…心当たりは、『アレ』しか無い。

「見つけたぞ」

唐突に背後に気配が生まれ、私に向けられたと思われる言葉が聞こえた。

声は低い。これで女ならば泣いてもいいだろう。

「貴殿が弓の騎士だな……いや、衛宮士郎と呼ぶべきか？」

何故私の真名を……男の声に聞き覚えは無いし、私をと呼んだ後に真名を言った。

こいつはサーヴァントの存在と、私自身を知っているのか？

姿だけでサーヴァントの名前を当てるのは不可能に近い。サーヴァントとは英霊　つまり死んだ偉人や神話の怪物等が、聖杯によって召喚された姿だ。

その名前を知っているのは、同じ時代に生きていた者。余程特徴の在る有名な英雄。それとも、男自身が特殊な存在であり、元から知っていた……一目で英霊の真名を見抜くのは、初対面の相手の名前を当てるようなもの。

少なくとも奴は、一般人の域を出ていることは間違いない。

警戒しつつ、声の主の方へ振り向くと　禍々しさが滲み出ている男が居た。

一目で不吉と感じる黒い人。武器らしい武器は見えないが、魔術師なら徒手でおかしくない。

念のため、何時でも迎撃出来るように注意しておく。

「確かに私はアーチャーだが、貴様は何者だ？」

「己おれは………八雲紫の使いだ」

返答には僅かな迷いが見え、表情にも不満の色が伺える。

しかし嘘をついている様子は無い。敵意も感じられないし、話を聞いてもいいか。

だがいきなり現れて、黒幕らしき妖怪の使いだと言われても、信用は出来ない。

「衛宮士郎。我々主催者陣営から取引がある」

あえて陣営というのなら、あの妖怪も勢力の一角なのだろうか。しかし、取引か……もし偽物だったとしても、英霊を知っているなら、何か収穫が在るかもしれないな。

「貴様が妖怪の使いだという証拠は？」

「己は気配なく現れただろう。あれは紫の力だ」

確かに現れ方は異常だった。いくら思考に没頭していようと周囲への警戒を怠った覚えはない。

それに……この男の異様な不気味さは、たとえ熟睡していても目を覚ましてしまう。だが、

「それは証拠には成らない。お前自身の力だという可能性もある」

「……出来ない事も無いが、得手不得手というものも在る」

まあそうだが、否定はしなかった。

この男も突然現れたり出来る、と考えておいた方が良さそうだ。

男の雰囲気、明確に鋭くなった。それと同時に辺りの気温が下がったような錯覚を覚える。

「本題に入るぞ。貴殿の『投影魔術の紛い物』を、一部封印させて貰いたい」

ただの投影ではなく『紛い物』 あえてそう言った。

私の投影は普通のものとは少し違う。その事も知っているのか……

投影魔術とは、魔力を用いて術者のイメージを複製する特殊な魔術。

しかし人間の想像力は穴だらけな上、複製されたものは時間と共

に世界に幻想として修正される為、数分程度しか形を持たない。
その非効率な術に対して、私の投影は本物と区別がつかず、時間と共に消えることもない。

故に、私の戦法の大半を締めていると言っても過言ではない。強敵に対峙した場合、これ以外に勝機を見いだせない事も多い。それを封印されてしまえば、最悪固有結界も使えなくなる。

固有結界とは自身の心象世界 言わば使用者の心そのもの。それに手を加えられては私にも異常が出る危険もある。

何より他の戦闘技術は 剣術は所詮一流で、近距離では不利になる弓術だけで戦うのは辛い。

「そう嫌そうな顔をするな。まあ……断れば自決させるがな」

男は表情を変えず、私から目を逸らしながら言った。

もちろん私は死ぬと言われて「死にます」とは答えない。だがサーヴァントである限り、行動を強制させる方法がある。

「……令呪か」

「そうだ。我々は、サーヴァント英霊全員分の令呪を持っている」

男は右手を掲げた しかし男から令呪の気配は無い。

「己は持ってないぞ……これは合図だ。スキマから覗いてる奴等への」

男が静かに呟く 瞬間、体に違和感が走り頭の中に少女の音が響く。

サーヴァント・アーチャーは、亡護なきもりさんとの会話を外部へ伝

えては成らない。

その口調は、子どもが悪戯を誇らしそうに自白するに似ていた。

魂に制約が付けられたか……恐らく亡護とはこの男のことだろう。ただ一人との会話を外部へ漏らさない。

期限は無いが、対象は一人。力が分散しない為、令呪は強力に働く。

対魔力の低い私では、抗うことは出来ない。

「……強制の次は口封じか」

「返事を」

無駄話は不得意らしい。令呪の誓約も掛けて、目的まであと一歩と行ったところか？

それに不吉な気配に無愛想……男の人生を物語っている。

さぞ生き辛かっただろう。

僅かに親近感が湧いてきたが、危害を加えてくる敵に、情けを掛ける必要はない。

「一部とはどれほどだ？」

「金銭の偽造と『兵士』の複製を禁止する」

剣製を封じられ無かった事に安堵しながらも、後者に対し疑問を持った。

通貨を偽造をする気は無い……しかし兵士の複製だと？ 私は生物を創る事は出来ないのだが……。

奴等は、私の能力を把握しきれていないのだろうか。

それで無いとしたら

「兵士は造り物なのか？」

「それに限りなく近い。言葉で表すなら、人造人間よりも人と自然に近い『物』」

それなら元から投影出来ない。

やはり完全に能力を知っている訳では無いらしい。

それにしても……ホムンクルス人造人間よりも人らしい物……アインツベルンに連れて行ったら、連中は血の涙を流すだろう。

しかし若干の矛盾がある、人造でありながら自然に近い。これは真逆に位置しているものだ。

「自然に近いとは、どういう事だ？」

「天然素材十割だ」

……つまり、元は全て自然のもので、手を加えられた人工物。と
ういう感じか？

亡護がこれ以上口を開かない所を見ると、こいつも本当は解らないのかもしれない。ホムンクルス人造人間の制作は、専門家で無くては理解出来ない事が多い。

私も専門外ではあるが、機会があれば解析してみよう。

「……武器や資材は複製して構わない。それらを売り捌いたり、兵士に持たせるのもな」

そんな事をすれば、宝具で固めた軍団が作れてしまうぞ。
いいのだろうか……。

「返答は？」

「断れば消されるのだろうか？ ならば返事は決まっているじゃない

か

「取引成立。目を閉じて魔術回路を思い浮かべる」

何をする気か知らないが、従う他ない　私は目を閉じて、回路を浮かべる。

「直ぐ終わる。式は既に造って在るからな。後はこれを」

首がゆっくりと圧迫され始め、男から僅かな魔力が放たれる。感覚としては首輪を丁度外れない程度に締めて行く感じだ。

気分が良いものではない。

「終わりだ。もういいぞ」

本当に短かった。ものの十秒も掛かっていない。
案外簡単に壊せるかもしれんな。

「何をした？」

「貴殿の魔術回路に侵入して意識と直接つながぎ、禁則を破ろうとすると……首が千切れる様にした」

亡護は、淡々と述べた。

感覚ではなく、本当に首輪を付けられてしまった……それも命を奪うくらいの恐ろしい物を。

下手に壊そうとしたら、逆に危険かもしれない。

「これで今日の仕事は終わりだが……戻るまでに少し時間が在る、疑問があるなら答えてやるぞ」

男の鋭さが急激に消え去り、不吉な雰囲気だけが残る。

疑問か……絶好の機会とはこの事だ。

八雲紫の話を聞いてから、ずっと疑問に思っていたことがある。

この世界そのものに付いて気になっていたことが……

「何でもいいのだな？」

「己で答えられる範囲なら」

「ならば」

この世界は『聖杯そのもの』なのか？

噂が本物に成ると聞いたとき、この考えは現実味を増した。

思いは願いで……噂とはそれらが外へ漏れ出し、他人へ伝わったものだ。それは数多の意思を通り一人歩きを初め、形を変えて戻ってくる。もしも、この世界が願望機の中ならば、願いが実現するのは必然だ。

それに……願望機を使えば、数多くの死人を蘇らせて争わせることも可能。

自分は天下統一を成す、と真剣に思っていれば……覇者に成ることもあり得ない事では無いだろう。

まあ余程の馬鹿か、真つ直ぐ突き進んで揺らがない愚者でも無い限り、完全に信じ込むなんて難しい。

私の問いを聞いた男は、心底楽しそうに笑い始めた。

先程までとは、あまりに違うその姿に驚くが……笑っている方が合っている様に感じる。

むしろ、今までが装って居たようにも見える。相変わらず不吉だが。

「紫に聞け。己はそこまで聞いていないが……そうだと考えている」

どうやらこの男も全て知っている訳では無いようだ。

それなりの収穫もあったし、黒幕と接触出来る人物と繋がりを持たたのは大きい。

「……そういえば、既にこの世界には、異物が混じっているそうだが」

「異物？」

「ではな。己は帰るとする。あまり喋ると外に出して貰えなく成るからな」

亡護は不敵な笑み浮かべなら、足元に吸い込まれるように消えて行った。

異物……既に問題でも起きているのか？

妖怪は我々に、生きる為……そして願いを叶えるために争えと言った。

しかし願いの無い私はどうすればいい？ 再び自分を消す為に覇者を目指すか……いや、それだけは無いだろう。

あの時、私は変わった。

不変の守護者は過去との遭遇で変質した。今は昔の様に正義に狂信することも無い。もちろん思いは失った訳では無いが、確かに変

わった。

ひと先ずは……流れに身を任せよう。原点にでも戻って、人助けから初めてみるのも良いかもしれない。

戦いの火蓋は切ってつやった。

……争わせる為に喚び出した者達。

弱者は強者に身を寄せて再生を望み、強者は霸道……もしくは王道を布いてくだろう。

それぞれの願いを叶えるために。

わたしはそれを。

『聖杯』

それは『万能の釜』または『願望機』とも呼ばれる、手にする者の望みを実現させる力を持った存在。

その中身は純粹な力の塊であり、直接接触すれば如何様にも簡単に染まってしまふ無色のエネルギー。もちろん思いや意思をぶつけられれば、その願いがどんなものであるようと、叶える為に働く。

この『聖杯』とは、聖人が最後の晩餐の際に使ったとされる、聖遺物の杯とは完全に違う物で、異質なものだ。

序章、箱庭と覇者（後書き）

初めまして。

初めてじゃない方はこんにちは！

東方と銘打たれているのに、主人公はfateです。

東方戦国演義は、衛宮士郎がアーチャーとは違った正義の味方を
目指します。

今回はもう一人の主人公で、黒幕の話を。

ご拝読ありがとうございました。

裏話、奔放なる亡霊

私は八雲紫

昨日、この口上で戦いの火蓋は切られた。

しかし私は……八雲紫は今朝方に、約48時間ぶりの眠りから覚めた。

眠っている間にいろいろ在ったようだが、今は目前の問題を解消する事だけを考えないと。

産声を上げてしまった世界の時間を止めることは出来ない。

元々必要なかった協力者も入用に成ったし、5年分全ての計画を根本的な見直す必要があるそうね。

……まあ私が直接手を下せる事なんて、此処から『箱庭』を保つ為に力を使う事くらいだけど。

ここは世界の境界に浮かぶ、戦いの舞台である『箱庭』を管理し、監視する為に私が創りだした空間。

しかし一般的な空間とは違い、一種の世界と言っても過言ではない。何故なら、世界と世界の緩衝地帯のような場所に浮かんで居て、一度空間を出てしまえば、世界の外 在り得ない場所に出た事に成り、人や物、思念すら消えてしまう。

在り得ない場所は存在しない為、そこには概念そのものが無く『無』すら無い。

文字通り 世界の外は『在り得ない』場所。

そこに私は境界を操る能力で、世界の外側へ向けて境界を引き伸ばし、小さな概念の在る空間を創っている。

ここなら何時でも世界から切り離す事が出来るし、万一にも私の

他に此処に来ることは出来ない。

空間と世界の繋がり、髪一本よりずっと細い。それに此処を覆うように幾重にも結界を張ったから、誰か来ることも気づかれる事も無いはずだけど……。

私の見当は始まる前から外れていたようだ。

私が目を覚ましたとき、私しか居ない筈の小さな世界には2人の人物が勝手に加わっていた。

一人はよく考えれば普通に入れたもの。もう一人は完全な異物。居ては成らない者だ。

異物の方はかつて幻想郷を守っていた元人間で、現在は思念体という妙な存在に成り半端な復活した男。

彼は私の知る人間の中で、唯一私に並ぶ力を持っていた。しかし飽くまでもそれは昔の話だ。今は低級妖怪より少し強い程度でしかない。

そこまで弱体化してしまったのは、死んでなお現世に留まり続けて力の殆どを存在の維持に使っている所為だ。

その愚者の名前は亡護裁我。なきもりのさいが弱くなった癖に私に牙を向いたから、古い名前を奪い今の名を付けてやった。

惜しいのは、あと一步の所で苗字を先に名乗られた事だ。結果として今の名は半分しか制御できない。

全て奪えていたら式神みたいに出来たのに。

もう一人は……自称第八のクラス、サーヴァント・ファントム。

この娘は今回の戦いを引き起こした張本人であり、先日まで『ひびの入った箱』だった陽気な少女だ。

私が目を覚ましたときは、箱から出て人の姿を取っていたのから一瞬何者か分らなかつた。直ぐに気配で理解出来たけど。

この娘には名前が無かったから体を手に入れた記念も兼ねて『シユレー・ディングー』という名前を与えた。

本人も自分に合っていると喜んでいたし、名前は存在を示す重要なものだ。気に入ってくれたなら嬉しい。

でも……私を悩ませている問題を起こしたのも、この娘だったりする。

それらは現在発覚しているだけで 3つ。

先ずは勝手に人の真似をして戦いを初めたこと。

次に、この空間に人を招いたこと。

そして……私に承諾を取らず参加者を増やしたこと。

1つ目については1週間以内に始めるつもりだった為、準備も出ていた事からそこまで問題はない。

しかし私の真似をして勝手に始めたのは頂けなわね。

願望機そのものである彼女に掛かれば、声や喋り方を似せることは朝飯前だ。私が眠っている間に頭の中を覗いて私が話すつもりだった事を丸暗記したようだ。

私は開戦前に全参加者の位置を把握するつもりだったが、皆開始地点から動いてしまつて、寝起きの私では未だに半数の所在が掴めていない。

しかしただ出遅れただけで、此処まで把握し難い筈がない。元々『箱庭』は、私の力だけで全てを把握出来る大きさと人数で創ったのに、予期せぬ参加者たちの追加により……『箱庭』内部の存在の密度が大きくなり、外部から力を行使しても把握しきれない。

この事で私は、追加された参加者の正体だけでも聞こうと『ファ

ントム』を聞いただした　すると。

「貴方が呼んだのは、どのだれかしら？」

「えーっとね、英霊が七人と　」

……確か、未だに幻想が生きている平行世界にそんな連中も居たような。

しかし彼女は世間話のするように軽く言うが……英霊を呼び出して存在を維持するには、莫大な力がある。

仮にも世界と契約した偉人たちを呼び出すのだから、一度世界の根源と現世を繋ぐ必要がある。更に呼び出して彼等の体を造り、常人ならざる彼等が動けるだけの力を供給しなければならぬ。

それらを並行世界から『箱庭』へ送る力も必要に成るはずだし……。

この時点で当初の計画を練り直す必要がある。当初の予定をそのまま進めれば、数年でこの娘の力は底を尽きる。

此処までの私はそれを聞いて喜んで居たが……この後に続く言葉を聞いて頭が真っ白になった。

「紫の友達もたくさん喚んだよ！　何でも大勢の方が良いよね！」

「……………友達？」

「うん、紫が暮らしてた所に住んでた子たちだよ！」

フロントムは眩しいくらいの純真な笑顔を向けてくる。

箱から出たばかりの少女にしてみれば、5年間自分に付き合わせる事への代償のつもりだったのだろうか。

彼女を見つけたのは恐らく一ヶ月前。恐らくというのは、ずっと『箱庭』を創るために何も無い部屋で集中していたせいだ。時間感覚が相当狂っている。

まだ箱の姿で僅かな意思しか表せなかった彼女と出会いは、我が家で視た夢の中が最初だった。

しかし、それは一方的な通告でもあった。

自分は作られてから外に出たことがない。

しかし私が外にできれば、膨大な力の奔流も一緒に出てしまう。

これ以上は持たない。私を封じる器は現界を迎え、私も自身の願いを叶えてしまいそうだ。

そうなれば無差別な力は混沌をもたらすだろう。

悠久を生きる妖怪よ、私を助けて欲しい。自由に動ける体と、私の消滅を……

半ば脅迫だった。力はすで溢れており、箱から漏れ出していた。

このまま放っておけば、力は幻想郷の願いを叶え続ける。

そうなれば妖怪が幻想郷から抜けだして現に侵攻したり、人間の身勝手な願望が成就してしまう。

私は誰にも告げず行動に移った。

事態は一刻を争い、私は世界のスキマに潜った。

箱の力を解析していく内に、予想以上の代物だという事が判明する。

この箱は願望機であり……自身で力を生み出し続ける事が可能な

『願いを叶え続けられる願望機』だと。

内包する力の総量を測るため、漏れ出している力で世界の創造と破壊を繰り返していると……

幻想郷の全エネルギーを十年以上肩代わり出来る事が解った。

妖怪の桁外れの体力や神々の奇跡を十年。世界を分ける結界や空間を屈折させる力を十年。

何より私を驚愕したのは 消費し続けねば、直ぐに最大まで力が回復する事。

創造と破壊を繰り返しているとき……次を行うまでの僅かな間に回復していた。

私は溢れ出る力を消費しながらも考え続けた。

継続して力を使うにはどうすればいいだろうか？

大量の資源エネルギーや力を使うことは何だろうか？

そこで思いついたのは………

『消費しかない世界』を『箱の中』に直接創る。

木々の成長や傷の治癒が、治るのではなく新たに創られ続ける世界。

箱の中に直接創る事で消費への間隔を無くす。

更にその世界を安定させず、戦争を起こして傷を増やし資源を使わせる。

そうすれば、より早く力は枯渇するだろう。

人が争えば、道具を使い自然を壊しそれを材料に破壊を繰り返す。炎は空気を汚し、水は全てを押し流し、泥は水を濁らせ、風は大地を砂状にし、鉄は自然を切り払い、血を流す。

自然の循環を無くして、浄化や成長を箱の力で代行する。

これが繰り返されれば膨大な力を自然に使うことが出来るだろう。それを最も多く、そして長く出来ること 戦だ。

かつて火薬が日本に伝わり、妖怪や動物の住処が汚され破壊されたように、戦いを起こせばいい。

そして実行した。

願望機を使い、日本に近い歴史から、戦と関わりの深い者を複製した。

流星に生きた人間を無意味に争わせるのは、摂理に反する。死人を蘇らせ再び殺すのも十分反しているが、それでも今の幻想郷を巻き込むよりはずっといい。

私は生きた幻想を終わらせるよりも、死人を殺す方を選んだ。

果てに私に下される裁きが、どんな物であろうとも止める気はな

い。

複製した彼等は開戦と同時に各地にばら撒き、蘇生と願いをちらつかせて戦いに誘引するつもりだった。

実際に叶えるかどうかは問題ではない。重要なのは早く乱世を生み出し、毎日のように戦ってもらうこと。

そして……早くこの世界に崩壊して欲しかった。

力が底を尽き、なお願いを叶え続ける願望機は崩壊する。

外部からの願いなら外部へ向けて。内部の願いなら内部へ向かって。

私は厄介な力の消滅を、願望機は私の願いを叶えるために自身の消滅を。

元より我々は 滅びを望んでいた。

しかし……開戦の時、私が愚かにも眠っていたとき、居てはならない者達がそこには居た。

幻想の住人を巻き込まないようにする事こそ私の目的だった。

彼等に危害が及ばない為に『箱庭』を創り、早く終わらせるために争いの多い時代から人間を呼んだというのに。

よもや唯一だった協力者の思いやりで、方針転換を余儀なくされるとは……。

私が黙りこみ顔をしかめていると、ファントムは気まずそうに口を開く。

「もしかして……駄目だった？」

「ええ、少し」

本当は少しどころではない。壊すつもりで創ったものを、負荷が増えた状態で維持しなければならぬ。

しかし起きてしまった事を問いただしても、問題が無くなる訳でもない。

私は溢れ出そうに成る怒りを抑えこみ、出来るだけ普通に問う。

「それより何故、裁我をここへ連れてきたの？」

ここはそこまで広くない。

生活よりも壊れないこと。展開し続けることを重視して創ったからだ。それに協力者を増やすことは情報の流出や裏切り等の危険を含んでいる。

「紫の記憶を見てたときにね？ 役に立ちそうだったから喚んだの。ちゃんと確認したよ。絶対役に立ってくれる」

ファントムの言葉には根拠がある。

彼女は幼い喋り方をしているが、どんな知識でも得ることが出来る。

だが、決して賢いわけではない。彼女は思考することで、世界から知識を引き出すことが可能だ。逆に欲さなければ、見た目通りの知識しかない。

たとえば……彼女を利用しようと誰かが声を掛けても、彼女は相手の目的を考えることで、その思考を知ることが可能だ。更に先を考えれば結果も解る。

裁我を喚んだのも「役に立ってくれる」と強調して言ったのも、事実なのだろう。何の役に立つのかは、考えていないのか、あえて黙っているのか……。

「ありがとう。でも、あまり力を使わないようにね」

「うん！ 紫が起きるまでずっと働いてたから休むね。おやすみ」

どちらにしても、彼女疲労させる訳には行かない。

ファントムは箱庭そのものだ。彼女が疲れを見せれば、世界は崩壊の危機に品している事になる。

今は少しでも温存させて、一秒でも長く時間を作って貰わないと。

少女の姿が消える。

休息のために箱庭と同化したのだろう。いわば分けていた体を一つに戻したようなものだ。

「紫」

部屋の隅で、彫像のように黙り込んでいた裁我が口を開く。

「説明してくれ」

「いつものよ」

いつものとは、私の気まぐれの事だ。古い付き合いの彼ならば理解できる。

ファントムの勝手に生まれた誤差は、何とかして埋める。他人を無闇に巻き込むべきではない。

「嘘を付くな」

「嘘じゃないわよ」

彼は私が引き下がらないのを知っている。

それでも聞き返してきたのは、向こうも退かないという意味表示だ。

戦闘面は弱体化しても、精神までは変わらない。

そっちがやる気を見せているのなら、此方も使い潰させてもらおう。

「なら、働いてもらおうよ」

「報酬は在るか？」

「損な役回りをタダ働きよ。正義の味方でも目指しなさい」

報酬を用意する余裕は無いし、それを分かっている筈の彼も、適当な事を言ったただけだろう。

「それなら……先刻会ったぞ」

「は？」

思わぬ切り返しに間抜けな声がもれる。

まさか……英霊？

奴等の中にはそんなのも居たのか。

まあ、所詮擬いものだろう。本物の正義の味方なんているはずない。

居られる筈がない。

「疑ってるな？　だが本物だと思う。ファントムは同類に声を掛けて集めたと自慢していたぞ」

厄介なものを。

いや、本物なら大いに働いてくれるか。

……ファントムの同類って、願望機と同類？

「異世界から喚んだらしい。令呪も彼女が持つてる」

異世界から……これは全体を見直さないと。

世界自体に干渉するようなものを持つていたら厄介だ。

『箱庭』は所詮急造の小さな概念。世界を侵食したり、上書きするような術があれば、簡単に変質してしまう。

「特殊な魔法みたいなものも、使えるようだ」

異世界人の次は『外の魔法』だ、ここまで来ると思考するのを止めたくなくなってくる。

「サイヴァント使い魔にしてみれば、こっちが異世界人。それに対話は出来た」

「クラスどの器？」

「アーチャー昨日、弓の騎士にな」

アーチャー弓の騎士が『正義の味方』か……。

英霊たちは邪魔でしかない。生きていれば抵抗されるし、死んでも行き場がない。ここには、彼等を還すための扉はない。早めに倒して世界の養分にでも成ってもらおうか……。

「苦勞を掛けたわね」

「他の連中も頼ってやれ。うっ現の巫女も来てるぞ」

あの娘も来てるのね……彼の言う現の巫女とは、現世の博麗神社を守っている者だ。

現代まで無人の神社が壊されなかったのも、彼女が尽力してくれた結果。万が一でも死なせるわけにはいかない。

「……そう」
「藍殿や、橙の手も借りた方がいい」

藍は絶対に怒っている。声を掛けず突然姿を消したから。橙も心配しただろう。会ったら謝らなくては。でも……。

「巻き込む訳には
「それが一番駄目だ」

「こちらが話している途中に割り込まれる。
そんなことは分かっている。一大事に除け者にした方が、余程怒るだろう。」

それでも

「やっぱり駄目よ」
「せめて連絡くらいは取るように」
「ええ」

それくらいはする。

流石に激怒しているだろうし、少し恐いが当然の報いだろう。

「ならいい。それで……己は何をすればいい？」
「まずは情報収集。参加者の位置を全員分把握するわ……手を貸して」
「承知」

見失った連中と、新たに加わった者たち。
北から順番に調べて行けば、数日で終わるだろう。

……三年の乱世で底を尽く力を、英霊や妖怪達が無双の力を振る
えば、二年どころか一年で消えてしまっらう。

先ずは、異物を洗^{イレギュラー}いだして、元の計画との誤差を割り出す。

そして……新たな計画を作ろう。幻想の者たちを『箱庭』の崩壊
に巻き込まないために。

裏話、奔放なる亡霊（後書き）

今回は序章の裏側。黒幕達の話です。

八雲紫は幻想の味方です！

オリキャラ……三人も一度に出したけど大丈夫だろうか……

いまの所この他にオリは出ない予定です。飽くまで予定ですが。

それから、私は決して自然破壊を推進したりしてませんので、作

中の一文は表現で、一応五行表したつもりです。（念の為に）

☐火 金 木（風） 土 水 火……☐

第一話、普通の違和感

岬の岸壁に大波がぶつかり、一際激しい破裂音が響く。

今日で開戦から三日目が経つ。

ここは『箱庭』の最東端に位置する
に東端に位置する岬だ。

ようしゅうかいけいぐん
揚州会稽郡。その更

私は野盗すら現れそうにない、こんな辺鄙な場所にただ遊びに来ているのではない。

時は遡り 初日に目的が見つけれなかった私は、初心に帰り人助けでもしようと思ひ、村や町を探していた。
そして一人の少女と出会う。

少女は近くの村に住む村長の娘だという。

しかし私が見つけたとき、彼女は一人で街道を歩いていた。

不審に思い、話を聞いてみると 東の村に手紙を届けるために、森を通って近道をしようとしたら、霧が出てきて道から外れてしまったそうだ。

迷子の少女は私に助けを求めた。もちろん断る理由は無かったのだが……

目的地の村に送り届け、私に礼を言って別れた次の日。

もう一つ頼みがあると言ひ、私はそれに応じた。しかし今考えれば浅はかだった。

少女の頼みと軽く考え、安請け合いましたことを物凄く後悔している。その願いは……

「地図を作りたい」

自分が迷ったのはいつも通っている道しか知らず、正確な地図があれば自分も迷うこともなかった。それに一度作ればこれから同じ事態に陥る人も少なくなるから。

そこで、私に護衛して欲しいということだ。

私は反対して自分の家に帰るように言ったが、着いて来ないなら一人でもやる。

そう言って、走り去ってしまった。

この世界の住人はこんなにも活動的なのだろうか。

人の良心に付け込み迷惑をかけるようでは、天下統一どころかそのうち反乱でも起きて、我々は全滅する可能性もあるだろう。

妖怪からの使者が言っていた「ホムンクルスより人と自然に近い物」というのも怪しく思えてくる。

しかし彼女だけが行動的であって、他の住民はそこまで活発には見えない。

もしかしたら……この娘が世界の『異物』なのか？

そう考えると多少は説明が付く。この少女が世界の異常なら他と違うのも納得出来る。

ならば、目を離すよりは視界の隅にでも置いておいた方が安全だろう。

私は監視も兼ねて、地図作りの護衛を請け負うことに決めた。

少女は手始めに東の果てに向かい、そこから作り始めるそうだ。

そうと決まれば付いて行こう。少女が危険なら排除すればいいし、問題無ければ地図作りを手伝えればいい。

そして、私達はこの世界の東端に来た。

ここへ来る前、村に居たときに現在位置を聞いておいた。ここは
会稽かいけいの中でも東の端で、少し歩けば海が見える。しかし最東端を
指すならば、北の森を抜けた岬に向かわなければいけない。森は迷
いやすいから注意するようにとも。

村人からは、献身的に従順という印象を受けた。

やはり、少女は他から浮いている気がする。

夕日の沈む岬に、女性と二人きりというのも中々乙な物だが……。

相手が女性というよりは少女という言葉が似合いそうな者では、
私が危険人物にしか見えない。

それに来た目的が地図作りでは雰囲気もへったくれもあるまい。

当の少女は

「きれいですねー」

実にいい気なものだ。

「九咲くしゅう。あまりはしゃぐと疲れるぞ」

「このくらい大丈夫ですよ。農民は体力だけはありませんか

」

彼女の名前は九咲くしゅう。

あまり中華風の名前は知らないが、九姓は聞いたことがない。情報が少ないためはつきりとは解らないが、偽名だという可能性もある。

だが、そうならば理由は何だ……嘘を付いても私から物を奪うことも出来ないだろう。仲間がどこかにいて、そこへ誘いこもうとしているのか？

もちろん私は意味無く疑っている訳ではない。

少女と会った瞬間から、妙な違和感を感じている。

戦場で狙撃主に狙われているような、緊張感に似た感覚だ。

しかし、その違和感も薄れつつある。何故なら少女からは異能の力は感じ取れず、その黒い瞳は一点の曇りも無い。

自身の目的しかみておらず、あまりにも周りに対して無防備だ。

「しかし、気づかないうちに疲れは溜まるものだ」

「心配性ですね」

彼女は周囲の光景を楽しみながらも、手元の紙に素早く何かを書き込んでいる。恐らく地形の情報を記しているのだろう。

先程覗き込んだら……直ぐに隠されてしまった。本人は字が汚いから見られたくないそうだが、隠さなくてもいいと思う。

九咲は一枚書き終えたようで、袋の中から紙束を取り出して、また一枚抜き取り書き始めた。紙はここでは貴重なものだ。

それなのに、よく束になるほど

「どうかしました？」

九咲は、こちらを不思議そうにみている。

彼女をずっと見ていたから不審に思われたのだろう。

「暇なのだよ。静かすぎてね」

彼女は地図を書いているときは、真剣そのものだ。
邪魔をしたら喰われるのではないか、というほどの雰囲気醸し
出している。

「何かあれば呼びますので、今は眠っていては？」

「私も周囲を見てこようか？」

「いえ。自分で作ることに意味があるのです」

すでにその視線は、紙と風景に戻っている。

彼女の言葉遣いは丁寧だ。これも村人と違うところだ。

しかし違和感も感じられず、彼女には合っている気がする。
手助けは拒否されたが、自分が調べておいても損はない。

「九咲。私は辺りを見てくるよ」

「駄目です」

「……何故だ？」

「貴方が居ないうちに私が襲われたらどうしますか？」

ずっとくっついて居ると？

「人が近づけば私が気付く」

「貴方が来る前に、私は殺されるかもしれません」

彼女は薄情者を見るような目を向けている。

そこまでいうかね……

「戻ってきて君の死体を見るのも忍びない。ここに居よう」

「お願いします」

単に怒り出しそうだったから話を切っただけだ。
彼女は返答に満足したのか、手を動かし紙を字で埋めていく。

……日も落ちてきた。

この周囲は、北へ向けて飛び出した岬。その背後には細い木々の森林が広がっている。森には獣道が多く、辿って行くと北か南の街道付近に出る。そのため西へ向かうには道を外れて勘と方角を頼りに進まなければいけない。高低差もそれなりにあつて、気づくと獣道に出てしまうことも多かった。この岬を見つけたのも私が跳躍を繰り返し、九咲の注文通りくしゅうに東端を必死に探した成果だ。

岬自体は大人が五人程並べるくらいの幅がある。下も覗いたが岸壁にひびはなく頑丈そうだ。

狙われるとしたら、森の中から弓矢か鉄砲での狙撃くらいだろう。岸壁を上るのは難しい上に、途中で発見可能だろう。

空からなら、私の弓で撃ち落とす自身がある。
心配は要らないのだが……信用が足りないか、単に不安なのか、どちらにしても、行かないと言えば行かないのだ。

しかし、日が落ちると凄く寒い。

突き出た地形のせいで海風が直接当たる。夜は森に戻るべきだろう。

岬から見える地形と、ここまで来る途中はそんな所だ。

彼女の言う東の村は、森を南に抜けて数時間程の街道沿いにある。

「くしゅん」

もちろん私のくしゅんではない。

「ほら、今日はここまでにしておけ。続きは明日の朝にしろ」

「いえ、あと少しですので」

「少しなら尚更だ」

「終わりです」

九咲が手記を仕舞っていると、一枚が風に飛ばされた。

こちらに飛んできたので手に取ると……

「返しなさい！」

物凄い剣幕で私を睨みつけ、奪うように紙を取られた。

今一瞬……

「字は綺麗じゃないか……それより海の距離は目算で測らない方が

「放っておいてください」

付き合えと言ったのは君だろう。

彼女はこちらを見つめている。その目付きは勝手に手記を見たことへの怒りと不安のような物が映っている。

………む？ 今、何か感じた気がしたが、何だっただろうか？

「何か気になることはないか？」

「寒いです。悪寒ではないでしょうか」

先程の鬼気迫る表情は何処へやら、彼女は平静に戻っている。

「早く森に入りましょう。明日からは西の果てを目指します」

ここで一つ、私は思いついた。
どうせ通じ無いだろが、少しからかってみよう。

「インドまで行くのは勘弁してほしい」

「天竺ではありません。箱庭の果てを目指します」

……………私は冗談のつもりだったが、少女はただの農民ではない
決定的なぼろを出した。

彼女は『天竺』ではなく『インド』という言葉に反応して、西遊
記を連想した。

インドは日本の呼び方で、中国の民が『インド』というカタカナ
で表される言葉を掛けられれば、聞き返すか素っ頓狂な返答をする
はずだ。

それなのに彼女は聞き返すどころか、言葉を変えて言い直した。
つまり……………この娘はただの農民ではなく、確かな『異物』か参加
者の一人だ。

そう感じた瞬間に疑問が溢れてきた。

どう考えても、普通の農民が一般に普及していない紙を、大量に
所持している訳がない。そんな物を大金をかけて買う余裕があれば、
食費の足しにでもしているだろう。

それに言葉遣いも農民にしては綺麗過ぎる。村にいた者たちとは
全く違った。

何よりも彼女と最初に会ったとき……………瞳の色は

「アーチャー
弓の騎士」

サーヴァントとしての名を呼ばれた瞬間には、既に危険だと感じていた。

愛剣の干将莫耶かんしょうぼくやを投影し、距離を取ろうとするが 気付いたときには接近されていて、顔を万力のような力で掴まれていた。

「
」

彼女が何事か唱えた瞬間、体が硬直して私の意識は落ちていった。気を失う寸前、視界を覆った黒い瞳が脳裏に焼き付いた。

数日前……ある村に一人の少女が現れた。
少女は村長の親戚で自分の村が飢饉に襲われたため、この村を頼って来たという。

その時は、村人たちはそのことを信じていた。
しかしふと気付けば、少女の姿はなかった。

そして数日後……村人たちは驚愕することになる。
村長の親類は孫が一人。息子とその嫁は孫を残して直ぐに逝った。他の親族も不幸が重なり次々と亡くなっている。村長自身も病に冒され、もうすぐ家族の元へ逝く。

何よりも……村人たちの知る者に瞳が金色の人間は居かった。

第一話、普通の違和感（後書き）

どうもです！

アーチャーがさっそく倒れてしまいました。気が失っただけです。この程度でやられはしません。

九咲は何でしょうね。今のところかわいい少女？です。

次も今週中の投稿を目指します。

第二話、疾走する猛者

私と九咲が地図作りを初めて約二ヶ月が経った。

現在位置は『箱庭』中央南部。荆州零陵郡。私が開戦時に居た場所は、東部の揚州会稽郡で、あそこは世界の最東端に位置していた。

零陵は、古くから中国の中央と南部を繋ぐ交通の要所。南西部に住む異民族や、少数民族に対する軍事拠点として重視された場所だ。

彼女の目標は、最東端から最西端までの距離を測ること。測量機も使わず自身の足で調べたいようだが……それでは正確には測れないだろう。

九咲曰く、ここ零陵までが半分だとすれば、東西の最大距離は約三千?にも及ぶらしい。つまり、会稽から零陵までは約千五百キロメートル。行程は徒歩で二ヶ月程。十分早いと思う。

ここから解るのは、箱庭は実際の中国より小さいようだ。と言っても、極端に小さいわけでもなく、『箱庭』という小さな概念ならば、広すぎるくらいだが。

まあ未だ目的のない私には、いい暇潰しに成っている。

定期的に襲ってくる野盗たち、こいつらは問題ない。気の毒だが……彼等の持ち物は、路銀の足しに成ってくれて助かっている。

極力投影で複製した物は、売らないようにしている。

名剣の複製品は高く売れるが、相手に「安く出来の良い物がありがとう」と、笑顔でそのような事を言われれば、流石に気が引ける。こちらの元手は、数分で回復する程度の魔力でしか無い。

それに対して払われる金銭は、血と汗を流して稼いだ努力の結晶だ。

だから複製品は、富豪や影のある商人にしか売らない。

道中私と同じ……参加者？ という言い方でいいのだろうか。仮に参加者と呼ぶ事にしよう。

私と同じ参加者にも会ったが、誰に仕えているか名乗る者も居た。既に集団が出来始めているらしい。勧誘されることもあったが、何処の誰とも知らない奴に使われる気はない。

西を目指す九咲くしゅうの足に、迷いはない。

山だろつと森だろつと真つ直ぐ進む。途中で谷や河があれば私に抱き上げると言い、突き進んでいく。

まるで目指す場所が分かっているようだ。

最初は人里にも寄っていたが……今では在れば寄る、無ければ進むという感じだ。食料が足りなくなれば私が確保している。

それに人と会うことが少ないため、新たな情報が入ってこない。

おかげで世情がまったく解らなくなってしまった。

かくいう今も、登山の真つ最中。

山というよりは 木々の少ない丘のようなものだが……空は私

の心のように曇っていて、今にも大粒の涙でも流しそうだ。山の天気は変わりやすい。早く下山したいが。

「なあ九咲。今日は山には登らないほうがいいと思うが？」
「今日は降りません」

彼女の勘はよく当たる。

本当は確証でもあるのではないかと思えるほど、言葉には自信が宿っている。

だが……今日こそはきつと外れる。
何故なら風は山に向かい吹き上げており、僅か一里先では、既に降り始めている。

「早く引き返さないと、降られるぞ」
「今日は登山日和です」

……こう言い始めたら聞かない。

私がこの二ヶ月で学んだことは、九咲は物凄く頑固くしやうだということ、ここでは疲労の回復が遅いことだ。

前者は対処のしようが無い。彼女の性格だからな。

後者は投影の負担が多いことから気付いた。

自身の魔力と体力に気を配っていれば、こちらも問題ない

だが最近、突然意識がなくなる事がある。視界が黒一色になり、突然倒れてしまう。

やはり子連れで旅をしているから気疲れするのだろうか？

しかしその線は薄い。何故なら私よりもずっと小さな九咲は倒れていない。

それどころか九咲は常に早足だ。眠っているとき以外、休むところも見たことがない。

ただの人間なのに良く頑張る。

「もうちょっと登ったら、少し休みましょう」

彼女の言う『休む』とは、手記を作るから止まるぞ。ということだ。

本当に忙しい娘だ。

「分かった。なら休むのに良さそうな場所を」

「どうかしました？」

彼女は気づいていないようだが、山の頂上から視線を向けられている。

敵意はない、しかし友好的とも取れない何とも不可解な視線だ。

「見られている」

「……知り合いですか？」

「分らない」

どちらにしても、我々が進み続ければ直ぐに解る。

攻撃されたときに備え、迎撃の準備だけはしておこう。

「行く」

「はい」

私たちは周囲にも注意を払いながら、山頂を目指した

頂上に近づくに連れて視線は確かな気配に変わり、意図的に発しているものと分かった。

「近いぞ」

「荒事に成ったら頼みます」

「ああ」

山の頂きが見え始めた頃、雲間に見える太陽を背負った影が現れた。

あれが気配の主だろう。視界に捉えずともはつきり解る存在感。陽を背負うその姿は、物語の中の王そのものだ。

私は英雄王や騎士王を見たことあるから問題ないが、九咲は影の持つ風格に呆気を取られている。

「娘の方は王に対する礼儀を弁えておるのう……それに比べて赤い方の貴様。驚くことも、跪くこともないとはどういう事だ」

待っていたのは、凄くでかい男だった。

大きなというよりはでかいという言葉が似合いそうな、一目で常人では無いことが解る偉丈夫。

恐らく……私と同じサーヴァントだろう。

「貴様はサーヴァントだな」

「うむ！ サーヴァント・ライダー。余の名はイスカダールだ」

……馬鹿かこいつは。仮にもサーヴァントが自分から名を明かすか。

いや、今は正体が分かったことを喜ぶべきだろう。

イスカンダル。

またの名を、アレクサンドロス大王。

古代マケドニア王国の王であると同時に、スパルタを除く全ギリシアの都市国家の代表者を集めて結んだ、コリント同盟の盟主であり、エジプトのファラオを兼任した人物だ。

戦の際には、王でありながら騎兵の先頭に立ち、軍を指揮しながらも敵將を投げ槍で討ち取る等、胆力と武勇を兼ね備えた将でもあった。

また、巫女から『決して負けない人』という神託を告げさせたことや、ペルシア領の一州都、ゴルディオンを占領した際に、町の中にいるゼウス神殿に祀られた一台の古い戦車に纏わる

『この結び目を解いたものがアジアの支配者になる』

という伝承を聞いたアレクサンドロスは、結び目を自身の剣で切り落とし、兵士たちに宣言した

「運命とは伝説によってもたらされるものではなく、自らの剣によって切り拓くものである」

それを聞いた兵士達は、さらに王への畏敬の念を深めたという。他にも多くの逸話が残り、歴史上で『自身』が率いた軍で広げた領地ならば、彼がおそらく最大であろう。

このように豪快な人物でありながら、砂漠で兵士の飲む水が無くなったときは自身の水を捨てたりと、兵士と気持ちをかち合う心

も持っている。

並外れたカリスマに、政治的能力も備えた非の打ち所がない人物。それが『征服王イスカンドル』だ。

「何を黙っておる。貴様も名乗らぬか」

「そうですね……イスカンドルさん、私は九咲くしゅうと申します」

「娘、大儀である！ さあ娘も名乗ったぞ。それとも貴様には名乗る名すら無いのか？」

彼女は本当に味方なのか、時々疑いたく成ることがある。

隠れていると言っても勝手に出てきて、野盗に見つかったことや、敵の接近に気付いても教えてはくれない。

そして今回は、征服王を『さん』呼ばわりだ。

知らなければ風格の凄い偉丈夫にしか思わないが、それでもあれに対してさん付けで呼ぶのは感服したい。

「サーヴァント・アーチャー……衛宮士郎だ」

「ふむ………知らんなあ」

だろうな。

俺が守護者になるのは未来の話だ。

「ライダー」

「イスカンドルか、王様と呼べ」

「……征服王、貴様はどれだけ知っている」

「ひねくれた奴だのう。それと、どれだけとは？」

「喚び出された経歴と、ここで得た情報だ」

サーヴァントが喚び出された場所や、時代が聞き出せれば、大体の知識量が解る。召喚時に聖杯から、聖杯戦争の知識や時代にあった常識を得ることが出来る。

騎乗兵ライダーで例えるなら、飛行機やバイクの操縦法を知ることもある。弓の騎士である私は、操縦法は得られない。その代わりに、マスターが居なくても数日間消滅しないという、他のサーヴァントに対抗出来る能力スキルを得る。

「先に貴様が言え。反論は即戦闘と思え」

厄介な男だ。こちらは子供連れだぞ？

……征服王には関係ないか。

「私の記憶に在るのは 日本に在った冬木の大聖杯を巡った戦いと、月の海の霊子虚構世『S.E.R.A.P.H』で起きた聖杯戦争だ」

本当は守護者として現れたことも覚えているが、今話しているのはサーヴァントとしての話で、それ以外は関係ない。

「何度目の物だ」

『何度目』という聞き方は、冬木の大聖杯を知っているのかもしれない。

冬木の聖杯戦争は全部で五回あった。

「……貴様も同じ聖杯を求めていたのか？」

「第四次聖杯戦争に参加している。図書館の壁に穴を空けたのは余だ」

図書館は関係ないだろ。

……爺さんと同じ戦場に立っていたのか。
だとしたら、『セイバー』とも

「私は次の、第五次に参加している」

「ふむ……余はこの世界で七クラス全てのサーヴァントと会ったが、
ずっと考えていた事の確証が、今持てたぞ」

全てのサーヴァントと接触しているのか。

ならばもう少し聞き出せそうだな。

「余の聞いた話が嘘で無ければ 箱庭に居る英霊は、三ヶ所から
集められておる」

三ヶ所？

ずいぶん少ないな……私の知る者も居るのだろうか。

「冬木の第五次と第四次。もうひとつは貴様らの言う、月の海の聖
杯戦争からだ」

……知り合いだらけだな。

「誰が居たのか教えてもらえれば助かる」

「愚か者！ 勞せずことを知ろうとは……対価をよこさぬか」

やはり駄目か。

しかし、対価と言われても持ち合わせが無い。まさか九咲を渡す
わけにも行かないし……『宝具』でも複製しようか。

「余の臣下に成れ」

「「は？」」

今何と言った？ 私だけではなく九咲も驚きの声を上げる。そういえば初めて聞いたかもしれない。彼女は常に気を張っていた。しかしそれくらい唐突な言葉だった。

「だからな、余に仕えれば情報でも何でもくれてやる」
「断る」
「お断りです」

征服王に付いていけば失敗はないだろう。
しかし、彼の征服は私の正義と反りが合わない。途中で反発し合
って共倒れだけは御免だ。

「少しは考えよ」
「拒否する」
「私もです」

九咲は目的があるからな、そもそも地図作りを邪魔されて不満そ
うだ。

「娘も心変わりはないか？」

「はい」

「……良く仕えよ」

「……はい」

こいつは何を言っているんだ。九咲が誰に仕えている？
彼女はただの農民のはずだが。

「何の事だ？」

「神には縋れるが、助けてはくれぬぞ」

「あの方は神ではありません」

「そうだったか！ いや、余計なことを言ってしまったか？」
「ええ」

ついに無視されてしまった……あの方？

む、頭が

「余はまだ動かぬ。乱世が始まるまでは、つかの間の平穩を楽しむ
としよう」

征服王は近くに繫いで在った、黒馬に乗って去っていった。
……疑問を多く残して。

「さあ、早く始めます。しっかり見張りは頼みますよ」
「……任せておけ」

頭に霞が掛かった様な気分だ。
引っかかるものはあるのに、それが何かは分らない。

考えようとすると 思考が黒に塗りつぶされ、気にならなくな
っていく……。

いかん！ これは忘れてはいけない。
あと少しだ、あと一押し何かあれば

「衛宮さん？」

九咲くしきがその瞳に疑問を浮かべている。

ああそつだ。頭を押さえて唸っていても可笑的いか。

「何でもない……始めないのか？」

珍しい。

彼女が準備を中断して、私を心配することなど無かった。
少しずつだが、私に慣れてきたのかな？

いつの間にか頭がすつきりしている。
先程まで何を疑っていたのだろう。
忘れるようなことだ。きっと何でも無いことだろう……。

そういえば、雨は降らなかったな。

九咲くしきは占術でも使えたりしてな、そんな訳無いか。

「衛宮士郎……愚かな男よ、化かされているとも気づかぬとは。まあ悪いものではなさそうだ。しかし、娘の目は狂信者のようだったのう」

征服王は気付いていた。本人さえ気にかけない些細な事にも。

第二話、疾走する猛者（後書き）

どうもです！

ライダーの所は力入れました。

長くしすぎない程度に纏めたつもりなので、上手く伝わってれば幸いです。彼の話は本の一部でしか無いので、気になる方は調べてみてください。

面白い話ばかりですよ。

その内アーチャーとライダーを組ませて、宝具で固めたサーヴァントの軍団でもやってみたいけど、勝てる相手が居ない……

次回は来週に成るかと思えます。

第三話、歴史食いは不死と共に

豪快な猛者と遭遇してから、ひと月程経った。

我々は着々と西端に近付いている。

ここは『箱庭』南西に位置する、益州建寧郡。えきしゅうけんねいぐん

かつて蜀軍に対し、幾度と無く刃向かった南方に住む異民族の長、孟獲もっかくの出身地と言われている場所だ。

ここまで来れば、あと二週間程で最西端を見つけられるだろう。

その後はどうしよう……このまま手伝い続けても良いが、他のサ
ーヴァントや世情くしやうも気になる。

それに、九咲は私が居なくても上手くやるだろう。

なんだかんだで一度も怪我らしい怪我もしてないし、妙に勘が冴
えている。

特に天気に関しては、商売に出来るほど百発百中だ。方法を聞いても勘としか言わない。何か秘訣でもあるのか、本当に勘なのか、私には検討も付かない。農民恐るべしだな。

「こつちですよ、衛宮さん」

九咲の声は背後から聴こえる。

先程までは前に居たが、いつの間にか追い越してしまったようだ。それで今度は谷か？ それとも河か？

「森です。少し寄り道したいので」

森？

……方角が全く違う。我々が目指しているのは、西であって、ここから見える森林は南だ。私の目算でも4？くらいあるだろう。少し寄るには遠いと思うが。

「距離の計算とか、狂ったりしないのか？」

「問題ありません」

本当だろうか。

まあ調べている方法を私は知らないが、本人が良いならいいのだろう。

元から合っているのか分らない数字だ。好きにさせておこう。

最東端からここ益州建寧郡えきしゅうけんねいぐんまでは、約二千六百？らしい……どう考えても歩いて計算するのは無理だ。

しかし彼女は、聞きたびに自信を持って答える。

むしろ何故そんな事を聞くんのだ？ という目を返される始末だ。

逆に私は何故解るのだ？ と聞きたくなる。

「早く行きますよ」

「すぐ行く」

私たちは南に向かい歩き出した。早くても、森に着くのは昼を過ぎるだろう

暖かい季節を過ぎて夏に近づき始めたこの頃は、太陽が真上に来ると暑さが絡みついてくる。

森に足を踏み入れた途端、三ヶ月程前に感じた違和感を覚えた。しかし、直ぐに消え失せて気にならなく成る。

「どうかしました？」

「いや、なんでもない」

「……そうですか」

なんだろう、最近定期的に頭痛がする。

前のように倒れることは無くなったが、その度に違和感が生まれ、気付けば無くなっている。

しかし今回の頭痛は、いつもより強力だ。脳全体が揺れているような感覚で、足が軽くふらついた。

「大丈夫ですか！」
やりすぎたか？

やりすぎた？

いや……今は大丈夫か？ と言ったんだ。

サーヴァントとして、おかしな現界を続けているから弊害でも出ているのだろうか……

「止まれ！」

森の奥から静止の音が掛かる……気が散っていたせいで接近に気が付けなかった。

「いいか、そこから動くなよ」

声の主が近づいてくる　だが気配は二つだ。
声だけで解ることは、高いことから恐らく女である事と、こちらを警戒していること。

しかし害意はないと思う。もし在ったのなら、こちらが気づく前に先手を打っていたはずだ。話せば和解できるだろう。

「ゆっくり振り向け。妙な素振りを見せれば、燃やすぞ」

燃やす？　火の魔術でも扱うのだろうか。

だとしたら不味いな……今は戦えそうにない。戦闘は避けねば成らない。

言われたとおりに声の主の方へ向くと

白い長髪に大きなリボンを付けた、赤い瞳の少女が居た。

その隣には腰くらいまでの銀髪の、落ち着いた雰囲気的女性が居る。

交渉するなら後者だな。前者は気が短そつで直ぐに手を出してきそつだ。

「お前、名前は？」

「サーヴァント・アーチャー」

「衛宮士郎さんです。衛宮さん、名前を聞かれたらきちんと答えないと」

……やはり、九咲は味方ではない。

それをそこで言っつては締まらないだろう。

相對している二人が苦笑している……冗談ではない。

「こちらが名乗ったのだ、そちらも名乗れ」

「紹介したのは横のお嬢さんだけだね。私は藤原妹紅ふじわらのもこう」

「上白沢慧音です」

どうにかして、静かな方と話を進めたい。

話し合いは落ち着いてするべきだ。

「うーん？ 危険は少なそうだな……なら、後は頼むよ」

「任せてくれ」

「変わるのか？」

何やら白髪と銀髪が交代するようだ。

私にはその方が好都合だな。

「生憎細かいことは苦手だね、話し合いなら慧音に任せた」

「分かったけど……どうやら、私達の考えは間違っていたみたいね」

最初の敵意は消え失せ、二人は気まずさを漂わせている。

何か考えがあって近づいたが、それが間違っていたらしい。

「すみません……私と妹紅は、貴方を誘拐犯か変質者だと思って、

懲らしめようとしていました」

……言葉が出ない。幾ら何でも酷いだろう。

「少女と共にふらふらと森に入ってくる男性は、怪しくありませんか？」

怪しい。

傍からみると、私はふらふらしてるように見えるのか？
でも、少女と二人で人気のない森に入る男……。

「確かにな。だが！ オレはこの娘の手伝いをしているだけだ」
「申し遅れました。私は九咲と申します」

九咲……もういい、気にしないことにしよう。こいつはこういう輩だ。

「礼儀正しいなあ……焼き鳥いるか？」

「妹紅」

「ごめんごめん。もう茶々は入れないよ」

何で焼き鳥なんて持っているのか……自分で作ったのか？
しかし今聞くべきなのはその様な事ではない。

「君たちは、こんな所で何をしている？」

二人は森の奥からやって来た。

それに手ぶらで現れたことから、野草取りや狩りでも無い。

目的も無ければ、こんな世界の端にある森の奥には来ないだろう。
覇者を目指すなら、近場に大きな郡もあるからそちらに向かうはずだ。

「知り合いと会う約束をしているね。今日の昼か、明日の夜に来るから待ってるってさ」

「それで、貴方たちは何をしに？」

こんな所では呼び出すなんて、非常識な奴だ。

まあ、密会や密談には持って来いの場所だが。

「この娘が、「気まぐれです」」

九咲の強引な横槍に、銀髪は訝しむように首をかしげ、白髪は静かにほくそ笑んでいる。

私は自身の言葉に被せられたことで、僅かに沈み、当の少女は何時もと変わらず、微笑みを浮かべている。

本当にいい気なものだ。しかし、これが素だから困る。

「……まあいいです。それぞれ事情があるのでしょう」

「ありがとう。久しぶりにまともな人に会った気がする」

私がここに来てから会った者たちは 禍々しい黒幕の協力者や 征服王に、おかしいのに違和感のない農民。

他にも多少いたが、いずれも一癖あった。ここでは常識人は貴重なのだろう。

「……ところで、ここで会ったのも何かの縁です。情報交換しませんか？」

願ったり叶ったりだ。

「ぜひ頼むー！」

「は、はあ……切り出したのは此方ですから、お先にどうぞ」

少し引かれた。

でも、世情が全く分らない私にはとても助かる。

此方の情報は、サーヴァントに関することしか無いが、ある程度は聞けるだろう。

「そうだな……現在の最大勢力を知っているか？」
「すみません、勢力情報は益州のものしかありません。私達は行動範囲が狭いので」

成程。この二人も私と同じか。
恐らく私たちを旅人と見込み、珍しい情報を聞きたかったのだろう。

しかし旅をしても、人里を通らない我々は『箱庭』の見識は狭い。

「益州だけでも良いですか？」
「ああ、教えてくれ」

我々にはそれすらない。
銀髪と話していると 話に参加せず黙っていた九咲が、外套の端を引つ張っていた。

「衛宮さん。焼き鳥食べてきて良いですか？」
「……好きにしてくれ」

彼女は頷き、白髪の方へ走っていった。
……無事焼き鳥をもらえたようで、嬉しそうに食べている。良かったな。

「すまない、初めてくれ」
「構わない 三世紀以外は省かせてもらっぞ」

三世紀？

向こうで、白髪が「あーあ、やっちゃったよ」と、呟いた。
確かに嫌な予感はあるが、冷静そうな銀髪が外れたことを言うよ

うには見えない。

「先ず紀元三世紀頃の三国時代には後の三強の一角である劉備玄德が益州全体を占拠して『蜀漢』を建国したことでも有名だ。

益州は険しい山々に囲まれた天然の要害で土壌は豊かで多くの産物があり古来から独立勢力を生みやすい土地柄として歴史を刻んできた。

そしてこの箱庭にも多数の郡が確認されています。

それらの名は 武都、^{ぶと}？山、梓潼、^{しつづ}巴西、^{はせい}巴東、^{はとう}宕渠、^{とうきよ}漢嘉、^{かんか}蜀、^{しよく}？為、^{けい}東広漢、^{とうくわん}巴、^は？陵、^{りやう}江陽、^{かうやう}南公、^{なんこう}朱提、^{しゅてい}越、^{えつ}？、^{えつ}建寧、^{けんねい}永昌、^{えいかう}雲南、^{うんなん}？、^{しやうか}興古、^{こうこ}。

以上二十一郡が領地分けで決まっています

……………どうやら私は、聞き方を間違えたらしい。

はつきり「勢力の事が聞きたい」と言えば良かった。

早く止めないと延々と続きそうだな。

「漢王朝の」

「慧音！一端止める」

「……………でも、まだ始めたばかりですし」

「長話はやめろよ、夜は寒い」

既に真上に在った太陽は傾き初めている。

こちらにも夜になる前に休む場所を見つけておきたい。早めに切り上げないと。

「短く頼む、こちらにも目的があるのでね」

「でも、歴史は大事で……」

「聞かれたことだけ答えな。でないと、いつもみたいに聞く側が疲れる」

「……分かった」

いつもなのか。

白髪の方も、止めることにも慣れたという感じだ。

白髪に感謝しよう。人を見た目で判断してはいけないな。

「それで、勢力はどんな感じだ？」

「また割り込むよ。こちら情報は明かした。そっちのも教えてくれないと内容は言わないぞ」

思ったより頭が切れる。最悪聞き逃げも考えてたが、その案は使えないか。

「こちらは、サーヴァントについての情報だ……他には無い」

「それだけ？ なら、勢力関係は教えられないな」

「でも、使い魔サーヴァント自身からは、聞いたことはありませんよ」

二人ともサーヴァントの事は知っているようだ。

これでは、あまり多くは聞き出せそうにない。

「衛宮さんは、私達の世界を知っていますか？」

私たちの世界？

……ここにいる者たちは、多数の世界から連れてこられたとでも言うのだろうか。

第二魔法だろうか。

「知らないようですね。使い魔^{サーヴァント}について詳しく教えて頂ければ、箱庭に連れてこられた者たちについて、教えましょう」

……これが対等な交渉かは分らない。しかし、重要なことのようにだ。

「頼む」

「今度は、先にあなたの事だ。難しく言っても理解できいぞ」「善処しよう」

仕方がない。こちらには圧倒的に『常識』がないのだから。

「先ず、私達サーヴァントは聖杯戦争という戦いの為に召喚される。英雄や怪物等が、死後英霊の座という場所に行き、そこから七人が複製され、喚び出されて戦う事になる。聖杯戦争とは願望機を手に入れる為、魔術師どうしが争う事と考えてくれ」

「 というのが、召喚時に得る知識だ。」

最後に宝具について教えよう。宝具とは人間の幻想を基板として作る武装で、主に英霊が持ち、生前に築き上げた伝説の象徴。伝説を形にした『物質化した奇跡』のことだ。

多くの宝具は、真名を唱える『真名開放』によりその能力を発揮し、伝説における力を再現する。中には真名開放抜きでも力を発揮する常時発動型の宝具も在る」

「で？ 結局何なんだ？」

「……要するに必殺技だ」

「うん。途中までは分らなかつたけど。最後ので理解した」

まあいい、細かいことは関係ないからな。

私の宝具に当たるものは、少し珍しい。文字どおり必殺技のようなものだ。

「次は、そちらの世界とやらの事を頼む」

「説明ありがとう。どうやら思っていた以上に、貴方達使サーヴァントい魔は凄
い者だと分かりました」

神代の怪物や無双の武人等も当てはまるからな。

私は世紀の大殺人者、助けた者たちの一部では、信仰にも似た扱
いだが。

「衛宮さんは、妖怪や神の存在を信じますか？」

変な宗教に勧誘されているようだ。

「吸血鬼や不死者なら討滅したことがある」

「ほう……不老不死は殺せるか？」

宝具の話が終わった時点で、興味を無くしたと思っていた白髪が
聞いてきた。

「殺せる。完全に死なない生き物は、生物ではない」

「ふーん」

返事を聞いた白髪は、もう興味はないという風に顔を背けた。

何だ？ 不死に興味でもあるのだろうか。

「なら、妖怪はいると思いますか？」

現代には余程強力なもので無い限り、生きていない。

「人外で多いのは西洋の怪物だ。東洋の妖怪たちは近代化でほぼ居なくなった筈だ。僅かに逃れた連中も、急速に進化した兵器によって殲滅された」

少なくとも二一世紀の日本には、数えるほどしかいないだろう。

「故に、妖怪は居ないものと考えていい」

「私はワー白沢で、妹紅は不老不死です」

……………人間だろう？ そもそもワー白沢とは何だ。

それより不老不死……………この白髪が？ 確かに見た目以上に年を取っている様な素振りだが、本物だろうか。

「人間にしか見えないが」

「順を追って簡潔に纏めますと 先ず、私たちが暮らしている所は『幻想郷』という現^{うつろ}から隔離された場所です」

現とは普通の世界だな。そこから隔離されたなら、どう仕様もない事情でもあったのだろう。

「幻想郷は、外の世界で架空の生き物とされている、妖怪や妖精、神そのものである神霊等と、それらと共に住む人間が暮らしています」

つまり妖怪は数が減ったのではなく、自分たちの世界を創って生

きていたということか。

「衛宮さんの世界と違うことは、魔法の区別と、幻想の度合いです」

私の知る魔法は、魔術とは異なり本当の意味で『奇跡』と呼べる現象を引き起こす神秘。

当代の文明力では、実現不可能な結果をもたらすもの。

二一世紀の時点で、第一魔法から第五魔法の五つ。

魔術を得意とする英霊の私でも、知っているのは第二魔法と第三魔法の二つだけだ。

それも『平行世界の運営』と『魂の物質化』という、いかれたものだ。

「幻想の度合いとはどういう意味だ？」

「衛宮さんの世界は、未だに吸血鬼が最強に限りなく近いと聞いています。」

しかし私たちの世界では、吸血鬼に限らず天狗や河童等の有名な妖怪すら現では長生きできません」

要するに恐れていたものを、架空の存在にして弱体化させてしまったということか。

「魔法については、火を起こすだけでも魔法と呼びます。逆に魔術という言い方のほうが少ないですね」

真逆だな。私の世界は一步神秘に踏み込むだけで、人外や異能者が多くいる。

火を起こして魔法ということも、魔術を知る者なら絶対に言わない。

……私は昔、言っていたが。

「成程。常識の違いから、異世界であることは納得しよう」

異世界に渡る方法は幾つかある　やりたいとは思わないが。

「しかし、それが人の姿を取る理由に成るのか？」

「人型のほうが生活では便利ですし、人外は人間と共存せざるを得ないので。幻想郷は隔離された小さな世界。妖怪が無差別に人を襲えば、人間は直ぐに居なくなります。妖怪は畏れを、神々は信仰を糧として力を得ていますから、人間が居なくなれば人外も滅びます。特に神々は、人に直接会って手を貸すことも多いのですよ。異形で現れては、相手に恐怖を与えるだけです。それくらいなら人の姿で友好的に接したほうが効果的でしょう？　それに皆、これに慣れてしまつて、何時の間にか人の姿が普通に成っていましたから」

「慧音……長い」

ああ、長かった。

白髪と九咲の方を見ると、地面に焼き鳥の串が、無数に突き刺さっている。何処に隠し持っていたのだろう？　それを食べた二人も二人だが。

銀髪は話し始めると止まらない性格らしい。

しかし、それに見合った情報も得た。

『幻想郷』に隠れ住む妖怪や神々。そして、それらも箱庭に來ていること。

不死者に吸血鬼。間違いなく彼等と上手い関係を持った者が天下を取る。

しかし、ワー白沢を私は知らない。恐らく人狼ワーウルフと同じような意味

だと思っが……

「ワ・白沢とは何だ」

口を滑らせた。気になった事をそのまま言ってしまうとは……最近思考力も鈍っている気がする。

「白沢という中国の神獣と、人間の半獣半人です」

白沢……こういう時に聖杯の恩恵が解るな、私には白沢が何か分らない。

「白沢は為政者の前に姿を現し、遭遇した者の家は子々孫々まで繁栄すると言われています。また森羅万象にも通じていますが……私は半分ですから、満月の夜に白沢化した時にだけ、幻想郷の全てを知る程度です」

十分じゃないか？

神々や妖怪のことまで知るのであれば、それは物凄いことだろう。

「ありがとう、うっかり零した一言にも答えてもらって」

「いえ、こちらサーヴァントも使い魔の事が深く解りましたから」

「焼き鳥代は？」

進めておいて取るのか？

「……妹紅」

「冗談だって！ なあ、お嬢さん」

「美味しかったです」

たくさん食べたな……一つくらい貰えば良かった。

「もう無いよ」

「別に欲しくはない」

白髪が含む様に笑っている。絶対こいつとは、反りが合わない。

「私たちは、そろそろ行きますね。縁があれば、また会いましょう」

「九咲、私たちも行くぞ」

「はい。遅れを取り戻します」

結局、今日一日殆ど西に進まなかった。

明日は強行軍か……

「なあ、あんたらそんなに急いで何処へ行くんだ？」

「地図を作るから距離を測っている」

「何処から何処までの？」

「最東端から最西端」

「無理だろ」

私もそう思う。それでも付き合っているのは自身の目的が無い所
為だ。

「今はどんな感じだ？ 半分過ぎてんなら、全長の検討くらい付い
てるんだろ？」

「東西は三千？程らしい」

「何!？」

「ん？ 何と言った？ よく聴こえなかったが」

急に小声で喋るから聞き取れなかった、耳までおかしく成ってたか……

だが理由は何だ？ 何時からこうなった

「何でも無い……慧音、行く」

「え？ ああ……」

そのまま、白髪は銀髪を引っ張って行った。

いきなり急ぎ始めたが……もしかして東西の距離も知っていたのか？

まさかな。幾ら何でも足だけで測れるわけが

「衛宮さん。私たちも」

九咲が森の出口へ向かう。

……私も行かねば。

気付けば陽は落ち、月が登り始めている。

その形は、真円とほぼ変わらない 明日は満月だろう。

第三話、歴史食いは不死と共に（後書き）

どうもです！

妹紅は『はくはつ』で『しらが』ではありません！

fate世界の妖怪の解釈は独自設定です。でもきつと生きています。すねこすりとか、河童はキツイかな？ 水とか大分制限されるし……

東方の吸血鬼の解釈も私見です。原作の紅魔館は文花帖か求聞史紀で異世界から来た説も出てた気もしますし（読み返すべきか）でも、どちらにしても、東方の世界観的に、恐らく吸血鬼も相当弱体化しているはずです。

人型の話も同じです。

それから、物凄い発見をしました。グーグル日本語入力で、『どうしようもない』と入れたら……「どうしようもないクズのアーチャー」というのが出たのですが、そのまま検索したら、普通にヒットしました。何かは秘密です。

今回は原作の説明ばかりでしたが、次回は序章の終盤です。

第四話、信奉者は主のために

箱庭で目覚めて四ヶ月。

おかしな娘と地図を作り始めて四ヶ月。

ついに私達は、世界の最西端に到達した。

そこに在ったものは……見渡す限りの海と、私が抱いていた違和感の正体だった。

ここは益州永昌郡。えきしゅうえいしやうくわん箱庭の最西端に位置する我々が目指していた場所。

永昌は、蜀皇帝劉備玄德りゅうびげんとくが死亡した後に、最初に叛乱が起きた土地。

この決起の一角で、孟獲もうかくら南方の異民族も蜀に対して楯突いた。

……可能性の一つには考えていた。

三世紀頃の中国最西端は、今でいう東南アジアに続いている筈だ。しかし目の前には大海が広がっている。

最初に配布されていた地図には、大雑把な九つの州が書かれているだけでそれ以外は空白。

世界の東端と西端には海が在り、箱庭という名前から考えても南北だけ陸続きとは考えづらい。そうになると、この世界は海に囲まれた大陸なのだろうか。

目前の海上には何も見えない。水平線までの距離は4・5km程

ある筈だが、この海が錯覚や偽物で無い限り、それだけは世界が続いている事になる。

箱庭の果てには何があるのだろうか………

一定まで進むと元いた場所に戻される無限回廊。不可視の壁が黒い壁があり、それ以上進めないのか。それとも果てなど無いのか………
考えた所で答えはでない。

この真実を確かめる可能性があるのは………征服王のような夢を見続ける事の出来る者だけだろう。

何故なら答えを見つけても報酬はなく、むしろ危険の方が多い。

余程の物好きでなければ、そんな無益なことはいらない。

私も眺めるだけで十分だ。

しかし偶にはそんな事を考えてみるのも楽しいものだ。

私が暇つぶしになんて事もない思考に耽っているのは、珍しく気分が良いからだ。

今朝方ここに着いてから、太陽が真上を通り過ぎるくらいの時間が経った。その間少女は一心不乱に手記を量産している。

何でも、道中で書いた物を纏めているそうだ。

その量は軽く見て数十キロ………今更ながら、彼女はどうかやってこれを運んでいたのか。

最西端を目指している間も多くの人々に出会った。しかし巨大な背負い袋に付いて問う者は、一人として居なかった。

私も気付かず、征服王も気に止めた様子はない。サーヴァント二人に気づかれない事など、あり得るのか？

私は、彼女が袋から紙束を取り出すことで気付けた。

それにただの農民は、紙が束になるほど持っている訳がない。

そんなに金銭に余裕があれば、食費の足しや農具の補修にでも回

しているだろう。

……私はこの考えを、彼女と旅を始めたばかりの頃に持っていた筈だ。

何故忘れていたのか……違和感も感じていた筈なのに。

深く考えようとする度に、頭が揺れて視界に黒が交じる。

しかし今回は、何時もの感覚とは違う。

頭痛は酷くはなく、交じる黒には金色がちらついている。

今なら抜け出せるかも知れない。むしろ、今しかないと経験が告げている。

奴の意識が此方に向いていない今なら……

「衛宮さん」

九咲くしゅうに名を呼ばれる。

しかしその視線は手元から外れず、私の思惑に気付いた様子もない。

「少し周りを見て来て下さい」

唐突だな……だが好都合だ。

だが急にどうしたのだろう。昨日までは目を離そうともしなかったのに。

「少しとは？」

「半刻ほど」

一時間か　少しと言うには長い。

その間に何か有るのだろう。しかし今は私に掛かっていると思われる、未知の力を解くほうが重要だ。この話には乗らせてもらおう。

「分かった。その辺りを彷徨っているから、何かあれば呼んでくれ」
「はい」

……よし。

九咲の様子に変化は無い。私の考えは気付かれなかったようだ。
実に四力月ぶりの単独行動。する事は多い

九咲の元を離れた私は、河口から川沿いに北上している。
遠くに行き過ぎると怪しまれる恐れもある、そのため海岸から一
?程で止まっておいた。

移動しながら、周囲の風景も観察する。

ここは海へ続く川が北東から真っ直ぐ流れていて、川を挟み北側
には低木林が、南側には高木林が在る。

隠れるなら南　戦うなら北に行こう。

川は数キロ続いていて先には湖が在る。相手がどんな戦い方をす
るか分らない内は、行かないほうが良い。

手始めに九咲の能力を分析しよう。

恐らく彼女の力は、記憶を思い出し難くするか、思考力を奪うこと。

後は……注意力を散漫にする等、『意識』や『脳』に干渉する力だろう。

それは、目を合わせることで発現する。

しかし目とは関係なく効果を発揮させる事も考えておかなければ、目を合わせるのは効力が強化するだけの可能性もある。

少ない情報で思いつく対抗策は 彼女の目を決して見ないこと。

これ以上は、常に全てに対し注意を払う、勝負が着くまで気を抜かない等、基本的でいつもやっている事しかない。

他の能力は一切分らないが、征服王の『仕える』という言葉、九咲自身が言った『神ではない』という二つの言葉……

それは彼女が『神ではない何か』仕え、その『何か』は征服王が神に近いものと考えるほどの力を持っている事になる。

飽くまで可能性の域を出ないが、彼女が神の如き何かの眷属ならば、九咲自身も相当な実力者だということも予想される。

全くもって万全とは言えないが、異常から開放される為にも立ち向かうしかない。退けば今までの繰り返し、もしくは命を落とす。

私に退路はない……

自身の結論に苦笑が漏れる。

結局は、何時もと変わらない。

正義を謳う者は決して負けず、絶対に退いては成らない。

退避は自身のための行動であり、己を省みぬ者がすることではない。

唯一何時もと違うのは、救われる者が居ないことだけだ。

今回は障害を打破する為の戦い。四ヶ月も付き合わされた礼をさ

せてもらおう。

打開策を考え初めて、そろそろ半刻経つ。

具体的な違和感の払拭方法は、見つからなかった。

今日に成って突然効力が弱まり、思考能力が戻った理由は解らない。

だが、一切思い当たる節が無いこともない……

強いて言うなら、疲労の蓄積による一時的な弱体化。この線は薄い。彼女は何時でもやる気と元気に満ち溢れている。

妖怪であれば新月による妖力の低下。こちらに至っては根拠すら無い。

……私は妖力や霊力について詳しくない。

私の世界では妖怪が殆ど居ない事と、陰陽師や裏の世界に関わる神使が、魔術師に比べて圧倒的に少ないため、殆どの力の源が魔力で統一されている。

月の海の平行世界に居た狐も、妖力ではなく魔力と言っていた。

妖怪自身も魔力と言う世界だ。他の呼び名に疎くなるのも無理はない。

………待てよ？

逆に考えれば、私の中では妖力も霊力も、魔力に一括りに成っている。

なら、魔力で構成されたものを壊す剣なら

「見つけました」

不味い。

ようやく良い案が浮かんだというのに、ここで邪魔をされては苦
労が水の泡だ。

「探しましたよ」

目を見るな。

いつも、黒い瞳を見て忘れる　いや、気にしなく成るとい
う感
じか。

どちらにしても、物事を認識し辛く成る。

『宝具』の投影は精密な工程が必須。

唯でさえ今は集中しにくい状態だ。途中で横槍が入れば、見た目
だけの擬い物以下しか出来ない。

「半刻過ぎましたよ……何か在りましたか？」

まだ気づかれていない？

九咲は何時もより、嬉しそうに微笑を浮かべて近づいてくる。
目に付く限りは、先程別れたときと変りない。

しかし、何かが違う。

内面に変化が有ったような、雰囲気が変わったといか……

瞳が黒ではなく『金色』だ。

「地図はいい具合に纏めましたよ」

細かく言えば、黄金色とでも言うべきか。
妙に惹きつけられ、気付けばその目を追っていた。

「これも偏ひじえに衛宮さんのおかげです」

頭の回転が鈍っていく。

最初は注意して目を逸らしていたのに、対抗策の効果は殆ど無かった。

「時に衛宮さん？」

体に力が入らない。

彼女はゆっくりと近づいてくる。

「東西は解りましたけど、南北は測ってないですよね？」

私の目の前で止まり。

「でもそちらは、手伝わなくていいですよ」

腕を深く引き……

「既に、別の方が調べましたから」

私は危険を感じ、咄嗟に全身を強化する。

「お手伝い 御苦労さまでした」

少女のか細い腕は突き出された

魔力で体を強化していたというのに　破城槌の如き衝撃が私を襲った。

その行動と結果は食材を切るための包丁を、人に刺すように異常な事態だが、それは異様なほど自然な動作で行われた。

そして私は、起きた事態を何故か受け入れている。

力を込めて手を突き出したのなら、人くらい飛ぶだろう。そして苦しいのも当たり前。

自分でもおかしい事くらい分かっている。その上で、この状況に違和感を覚えない。

この矛盾は何だ……

「仕留めそこないましたか……」

私は水平に吹き飛び、川の対岸　その距離、約三メートル強を飛ばされた。

九咲の拳は鳩尾を狙い、私は紙一重の距離で僅かに左に避けた。しかし飽くまで命中箇所をずらせただけで、鳩尾の右側に直撃した。

鳩尾の右には肝臓があり、肝臓は血流が多く太い血管とも接しているため、損傷の程度によっては、出血性のショック症状を引き起こし易い。

だが症状の重さに対して、外部からの診断や怪我の具合は解りに

くい。

例えば、右側胸部から側腹部にかけての打撲痕や、上腹部の圧痛等があれば、即座に検査すべきだが、今回は殴られて付いた傷だ。目で確認しても、内蔵の損傷なのか外部の怪我なのか、判別しにくい。

「次は動かないでくださいね。長引けば苦しむのは貴方です」

それでも、足掻かずにはいられない。

黙って殺されて堪えるものか。

それに勝ち目は在る。

九咲は今の一撃で仕留めることが出来なかった。

戦いに慣れている者ならば、動かない相手を仕留めること等容易いはずだ。

決死の一撃を注意し、首を締めたりしなかったにしても頭を狙うべきだった。

頭部ならば、一撃は無理でも人を吹き飛ばす程の威力ならば、脳震盪や首を折ったり、頭蓋骨を割ることも可能だろう。

それでも体を狙うのは、能力が解ける心配でもあったか避けられずも当てやすい方を選んだらう。

「さあ、今度こそです」

彼女は川を飛び越えようと、身を屈めている。

私の体は吐き気や腹部の痛み、目眩があるが 動く。

むしる激痛は無くなっていた思考力を回復させ、失っていた違和感を溢れさせた。

私は身を翻し、北に在る低木林を目指す。九咲はまだ対岸だ。追いつかれる前に『ルトルブレイカー破戒すべき全ての符』を投影して、私に掛かっている異常を破壊する

足を緩めず林へ駆け込んだ。

腹部からの激痛は、鈍痛に変わり一步踏み出すたびに死の危険を訴える。

長期戦になればこちらは終わりだ。

私は敵の視界から外れ、出来るだけ距離を取ろうとする。背後に九咲の気配は無い。
今こそ好機

「トレース 投影、オン 開始」

右手の中に一本の短剣を生み出す。
使える物が解析して、納得の行く物だと分かる。このまま

「逃がしません！」

九咲に追いつかれそうになる。
彼女は木々を物ともせず、なぎ倒しながら接近してくる。
私が避けながら走るのに対して、向こうは真っ直ぐ追跡してくる。
いくら低木と言っても、幹の太さはそれなりのものだ。

何より高速で衝突しているのに、減速せずに傷の一つもない。恐らく障壁のようなものを張っているのか、将はたまた又これも能力の一つか……どちらにしても、速度は此方より上だ。

追いつかれるのも時間の問題……なれば先に試すまで。

「ルトルブレイカー破戒すべき全ての符」

走りながら短剣を腕に突き立て、真名を解放する。

「何を!？」

傍から見れば可笑しな姿だ、叫びながら自分の腕に短剣を刺している。

気でも狂ったか、勝負を捨てて自棄でも起こしたように取るだろう。

しかしこれで良い。

この短剣は、ギリシャ神話に登場する裏切りの魔女メデアの宝具だ。

裏切りの魔女という自身の象徴を具現化した、あらゆる魔術による生成物を初期化する短剣である。

箱庭の概念的に、私はあらゆる力の源を魔力で括っている、ならば術全般を魔術で纏める事も可能はずだ。

上手く行けば、このおかしな力も消し去ってくれるだろう

「なっ!?!? ……………術式の破棄?」

短剣を突き刺して数秒。九咲の驚愕の声が聴こえた。

だが私の頭には未だ霞がかつてる。
消しされたのか、まだ残って居るのか解らないが、彼女の反応を
見る限り思惑通りに進んだようだ。

「そんな所だ」

実際は少し違う。しかし、教えてやる義理はない。
力は出来るだけ万能に見せて、強力だと信じ込ませるべきだ。

「どうした？ 誤魔化しはもう聞かないぞ」
「……………」

私は足を止めると同時に振り返る、すると九咲もこちらに合わせ
る様に止まった。

彼女からは、明確に勢いを失われている。
いくら私に掛けていた術を解かれたようとも、まだ腹部の負傷が
在る。

その傷は浅くない。
事実、少しずつだが私の身体能力は落ちてきている。外出血は無
いが、内出血を起こしている可能性が高い。
未だ有利なのは彼女の筈だ。

「仕掛けて来ないなら、此方から行くぞ」

九咲は動かない。

私は手元の『破戒すべき全ての符』を投擲し、同時に黒と白の夫
婦剣『干将莫邪』を投影する。

それを手に取り、瞬く間に駆け寄った。

短剣は軽く避けられる。

しかしその一瞬で間合いは詰めた。

彼女はそれでも動かない。

構えを取るわけでもなく、詠唱する様子もない。

「はっ！」

あまりの無防備に疑問を感じつつも、右手の干将で斬りつける

しかし刃は届かない。直前で平面的なものに阻まれた。

左の莫邪も振り抜くが、硬質な壁を斬りつけたような感覚で、瞬時に弾き返される。

私は自信で詰めた距離を戻ることになった。

「……それが君の力か？」

「はい。厳密に言えば、固有な能力とは別ですが」

このまま何もしなければ状況は悪くなる一方。

魔力を出し惜しみしては、あの障壁を突破できないだろう。

時間が掛かれば掛かるほど、私の体は弱っていく。

私が焦り初めていると、不意に狐鈴は破顔した。

「話しをませんか？ 改めて自己紹介もしたいですし」

向こうは余裕だ。

勢いを無くしたのは、恐らく戦法を変えた為。

攻める必要が無くなったから。

「時間を稼げば、そちらが有利に成る」

「私の能力も教えますよ」

それを頭から信じると？

この話の間も彼女の勝利は、より磐石なものに成っていく。待っているだけで勝ちが転がり込むなら、自分の能力を明かしても時間を稼ぎたいのであろう。

かりにも私は英霊だ。真正面から戦っても勝率は低いとも思っているのか。

……先程の斬撃を受け止めた障壁は、並の硬度では無かった。

それに、解析不能の概念らしきものも在る。

生半可な攻撃では、無駄に魔力を消費するだけだ。

ならば、今出せる全力で撃破する！

魔術回路を魔力で満たし、投影する剣を思い浮かべていく。

「何をやる気が知りませんが、どれだけ火力を高めようと無意味です」

「君は全て受け止めるのか？」

「構いませんよ」

狐鈴は迷いなく答える。

ならば……私はその自信に付け込もう。

戦いの中で余裕を見せるのは、もっと経験を積んだ後にすべきだ。

「トレース
投影、開始」

九咲は自信に満ち溢れており、『真つ向から受け止める』という宣言は本当だろう。

「ロールアウト 工程完了、バレット 全投影、クリア 待機」

久しく使う事の無かった確認のような詠唱をし、より投影の精度と数を増やす。

「凄いですね……強力な力がこんなに沢山」

空中に、数多の宝具や名剣を複製して浮かべる。それらは例外なく彼女を囲み、全方位から膨大な魔力をを発して威圧する。

「受け止めてみる！
フリーズアウト 停止解凍、ソードバレルフルオープン 全投影連続層写！」

静止していた複製品の群れは姿を明確にし、悠然と佇む九咲を狙う。

「我が骨子 I a m t h e b o n e o f m y s w o r d は捻れ 狂う」

飛来する武器群の、最高尾に在る宝具の一部を爆発させた。

その内に秘められし膨大な魔力を全て目標に叩きつけ、前方の剣群に加速と破壊をもたらす。

破壊された剣は破片を撒き散らし、加速した宝具と剣はその威力を遺憾なく発揮する。

時間にして僅か数秒。

静寂に包まれていた林には、大軍同士の衝突の如き騒音と、大地を揺らすような轟音が響き渡る。

その中心は、風圧によってまき上げられた粉塵が覆っていた。

……倒せたかは解らない。

これで勝てなければ打つ手が無くなる。私は『固有結果』無しで放てる全力を出した。

それに費やしたのは 六割近くの魔力。

より火力を増すために剣以外の宝具も投影したせいだ。

私の全身には脱力感と、腹部の損傷が原因であろう倦怠感が溢れていた。

風が吹いて、煙が晴れ始める。

そこに彼女の姿はない。在るのは跡形もなく吹き飛び、クレーター状に抉れた地面だけだ。

しかし……………倒せなかったか。

「何のつもりだ？」

「あら？ 気づかれませんでしたか……………せめて勝利の喜びを胸に、終わらせようとしたのですが」

彼女は私の真後ろにいる。

帰ってきた声は平然としており、苦しみや痛みは籠っていない。

「避けたのか？」

「そんな事しませんよ」

私自身も、無数の剣が直撃したことは確認している。

しかし疑いたくも成る。

先程の攻撃は、蘇生持ちであろうと殺しきるくらいの威力は有っただろう。

それを小細工無しで防がれては、此方の氣勢も無くなるというものだ。

「時間は今出来た。自己紹介を頼む」

「ふふふ……はい」

嫌々ながらも話に乗る。

しかし、これで時間も出来た。もう一度対策を練り直さねば。

先ず、力押しで此奴に傷を付けることは『不可能』と考えよう。

「改めまして、初めまして衛宮さん」

背後の彼女が目の前に来る。

その姿を見て、私は始めたばかりの思考を中断してまった。

何故なら、彼女は先程までと明らかに変わっており、現れたのは黒い瞳の少女ではなく、金色の瞳の若い女だった。

何より、私を驚かせた理由は……彼女は『八本』の大きな尾を従えている事だ。

彼女は姿勢を正し、私を金色の瞳で見つめた。

「白面金毛九尾の狐、八雲やくもらん藍様に仕え、現にて幻想の守護を任せられていきます……

八尾の狐憑ながそいこすずき、永添狐鈴と申します」

彼女は完璧という言葉が似合いそうな礼をした。

……主は九尾の狐か、ならば征服王の事も領ける。

最強に位置する妖怪に仕えているのなら、妖怪に疎い西洋の王が神と間違えても仕方ないだろう。

しかし目の前に居る女も『八尾』だ。

九尾には及ばずとも、あと一步で最強に名を連ねる存在。

予想以上の正体ではあるが、ここに来て一つの打開策を閃いた。

「貴方を可笑しくしていたのは、私の『違和感を無くす程度の能力』です。注意力や対象への興味を、無理やり無くしていたからですよ」

そうか……違和感を無くす。

単純だが恐ろしい力だな。違和感とは、物事に対する注意力を生み、危険を減らすために必要だ。

汎用性は解らないが、もしも万物に対して行使できるのなら……

精神が弱い人にペンを渡し「それで自分の首を刺してみて」と言えば、注意や違和感が無ければ刺してしまう。

水泳が好きな人でも水中で息を出来ないのは当たり前だ。しかし、そのまま水面上上がらないことの違和感を無くし、苦しく成ろうとも水中に居ることに違和感を覚えさせなければ、その人間は窒息死する。

要するに違和感を無くす事は、行動を操る事に近い。

「貴方の攻撃を防いだのは、純粹に強力な結界術ですよ」

……なら、『ルールブレイカー破戒すべき全ての符』で壊せる。

よく思い出せば、先程短剣を投げた時も受けずに避けていた。

私の全力を真正面から受けたというのに、短剣一本を避けるのは、何か理由が在るはずだ。

「何故能力や術のことを教えるのかと言いますと」

もう此れ以外に方法はない。

一本一本は見た目通りの威力しか無いが、何本も刺されれば致命傷に成るだろう。

それに敵は『ルールブレイカー破戒すべき全ての符』の効果を確認には知らない……

……

「箱庭では噂が現実には干渉しますので、強力な力の存在を広めれば、更にその力は増強します」

今の魔力で何本投影できるだろうか。

出来るだけ多い方がいい、逃亡後に生存出来る量の魔力を残したとして……二十から三十は行けそうだ。

「噂は口伝だけでなく、風に乗って人々に伝わります」

九咲……狐鈴は満足そうに話をしている。

詰めが甘いところも、彼女が実戦慣れしていないことを露呈している。

結界術に絶対の自信があるのか、彼女は滑らかにまくし立てている。

「同時に弱点も広まりますが、強ければ強い程、強化される力も大きくなりますから……私には実績も有りますし」

……実績とは私のことだろう。

七人の英霊のひとりで在る私を、四ヶ月間翻弄した能力。既に十分強力だ。

「まあその実績は、亡護様の手助けが在ったからですけど……」

狐鈴が苦笑しながら言った。亡護？ 何処かで聞いた気が……

「……その顔は忘れていますね？ 開戦の日に男の人と会ったですよっ？」

何のことだ？

「矢張り、やり過ぎたのでしょうか……禍々しさを備えた不幸そうな人です」

思い出した。初日に変な術式を掛けて行った奴か。

あれ以来、すっかりと忘れていた。……間違っても金銭の投影をしなくて良かった。

うっかり複製でもしていたら、文字通り首が飛んでいた。

「亡護様は投影制限のついでに、私の術が掛かり易く成る式も混ぜてくれたのです」

つまり、あの男は真顔で嘘を吐いたのか。

首輪の他にも掛けられていたなんて……だが、私はそれに気付かなかった。

それだけの物を作る腕は有るのだろう。

「それで、何故私を今になって狙うのかね？」

「やっと喋ってくれましたね！ でも、その答えは秘密です」

「……………考えられるのは、何かしらの計画があり私を監視していたが、現場が何かに動きがあった為、私が邪魔に成った。まあ想像でしか無いが。」

「そろそろいいですね……………遺言はありますか？」

笑顔で言う事ではない。

既に考えは纏まった。宝具の力が変異すれば、私は勝てる。

いや……………勝つ。弱気に成るな。勝つと信じ込め。

「ああ、遺言なら有る」

「誰に伝えれば？」

「赤い少女と、愚かな少年に頼む」

「出来れば名前で……………」

「それくらい探せ」

「……………はい」

恐らくあの二人は、箱庭に居ないだろう。

世界の意思は、分岐した物語を手放すはずもない。

しかし何者にも万が一は存在するがな。私のような

「では言うぞ？ 一度しか言わないからな」

「はい、然と聞き届けます」

イビツな魂を持ち、自分を消しに行くような輩も居るのだから。

「
トレース
投影、開始！」
「
ツ！？」

私は至近距離に居た彼女に向けて、投影したばかりの短剣を突き出した。

それはあっさり避けられるが、明らかにこの宝具を恐れている。ただの短剣ならば、結界を張らずとも止めるだろう。しかし狐鈴は避けた。

数多の宝具を前にしても、平然としていた女の顔が驚愕に染まる。

「卑怯です！」

「相手を洗脳して殺す君はどうなのだ？」

「それはそれ！ これはこれです」

中々良い性格をしている。

私は右手を掲げ、空中に『破戒すべき全ての符』の群れを出す。先程とは違い全て隠蔽していた。

それらは等間隔に並び、狐鈴の周囲に壁を造る。

「この宝具の能力を教えよう」

噂は力になる。

なら、嘘を流したらどうなるのだろう。

この世界は宝具の性質すらも変えてしまつのだろうか。

「名を『ルブレイカー破戒すべき全ての符』と言って、真名開放と同時に切っ先に触れている、あらゆる異能や異形を消滅させる」

効果は単純で強力な方がいい。

その方が頭に染み付きやすからだ。

「嘘です！ 貴方も使い魔サーヴァントですから、自分に刺せば貴方も消えるはず！」

「対象の選択は可能だ。例えば君の結界を通りぬけ……憑いている狐だけを殺すとか」

「……」

迷いなく返答することで、信憑性は増す。

結果は予想以上。

彼女は傍から見て解るほど怯えている。

狐鈴が短剣だけを避けていたのは、万が一にでも狐が消えることを恐れたから。と私は考えていたが、どうやら正解のようだ。彼女は九尾の狐に仕える、八尾という事に誇りでも持っているだろう。

誇り それは私がかつて失つたものだ。

そんなものでは人は救われない。救われるのは一部の力ある者だけだ。

しかし、誇りを失うことは人道を外れることでもある。

誇りとは夢であり、目標であり、希望であり、願いであり、思いだ。

それを見失つた私は何なのだろう……

投影した短剣全てに魔力を通す。

これは意思表示。直ぐに射出しないのは彼女に考える時間を与えるためだ。

逃げるものを追うつもりはない。だが、私はそこまで甘い者ではない。

それでも、この戦いで救われる者は誰ひとり居ない。

ならば……目の前で怯える者を救うしかあるまい。

「……情けの、つもりですか」

問いかかけの声には怯えが残っている。しかし覚悟は決めたようだ。

狐鈴は膝を曲げ、何時でも跳躍可能な体制を取る。

此方の攻撃と同時に突撃し、被弾数を減らすためだろう。

止まってしまうよりは、前進して真正面と背後にだけ集中した方が効率が良い。

「良いのだな？」

「元より藍様の為、この身は永久に消尽する覚悟です」

……虚しい。

主を信じて疑わないその瞳。自分の行動を正当化する理由。覚えのある意思。

その果てには何も無い。

「人間が怪物と生き抜く事など不可能だ」

「我が全霊は」

「破壊すべき全ての符！」
ルールブレイカー
「主の為に！」

真名開放と同時に狐鈴は踏み出した。

彼女を狙う短剣の数は『三十』。

しかし一斉には放たず 最初に背後の五本。真つ直ぐ並んだそれらは左腕の一閃で弾かれる。

次に左右からの八本。右腕の一振で半数を、二本の尾で残りを薙ぎ払われる。

更に正面と頭上から十本。弓形に並ぶ正面の四本は、地を這うような動きで躲され、頭上の六本は三本の尾で跳ね除けた。僅かに減速した。

残る七本はそれぞれ別の方向に在る。それらは六角形に配置されている。予め一本ずつ各方向に残しておいた物だ。

後ろの三方向は、各一本ずつ尾で対処される。これで八尾全てを封じた。

残るは前方の三本、並びに頭上の一本。

前方へは力任せに衝撃波を放たれた。三本の短剣が勢いを無くして地に落ちた。進む方向へ力を売った為m人が走る程度まで減速。最後の一本は首を狙い落ちてくる。狐鈴はそれを、無理やり身を捻り回避した。

狐鈴の体勢は完全に崩れ

背中から倒れこむ。

「よく避けたな」

狐憑きの心臓めがけ、歪な刃を突き出した
それと同時に
限界が訪れる。

決死の攻防に勝利したというのに……私には底知れぬ虚しさが広がっていった。

第四話、信奉者は主のために（後書き）

肝臓については、少し調べただけですので、間違っているかもしれません。

おかしい所を見つけたら、ご指摘お願いします。

今回は実質序章の最終話なので、切るに切れず他に比べて長くなりました。

次回はエピソードの様な話。序章を締めて問題に成らない程度にくするぞ！（飽くまで予定）

第五話、そして男は歩き出す

眩しい

強い光が私の目を射ぬく。

私は眩しさに対抗するため、目を手で覆いながら体を起こした。それと同時に、近くで何かが動く気配がする。

「起きたかアーチャー！ 気分はどうだ？ どこか痛む所は無いか？ あれば直ぐに医者を呼ぼう」

耳元で大声を出さないで欲しい。
重い瞼を開けて、聞き覚えのある歌うような声の主を睨む。

「騒がしいぞ、セイバー」

「うむ！ 何時ものアーチャーだな。第一声で弱音を吐いていたら……本当に大事であった」

彼女の声には不安と安心が垣間見える。

自尊心の塊で、マスターと『お気に入り』以外に気配りをしない彼女が、私を気にするとは……何かあったのだろうか。

「どうかしたのか？」

「……そなたは覚えていないのか？」

彼女はゆっくりと首を傾げながら、私の胸ぐらを掴み激しく揺する。その腕力は相当なもので、脱力仕切っていた私の首に軽い痛みが走る。

……覚えていても何も、私がどうしたというのか。

彼女は苛立ちを隠そうともせず、私を睨みつける。

「そなたは森で傷つき倒れていたのだ。通り掛かった善良な者に助けられ、一命を取り留めたというのに……」

森で？ …… そうか、私は狐憑きの女と戦っていて

「他には、私の他に誰か居ただろう!」

「離せ馬鹿者!」

頭に血が上り彼女の手を掴むと、振り払うように投げ飛ばされた。私は寝台から少し離れた床に着地する。すると膝に力が入らず、結局倒れてしまった。

「あ……… すまない」

彼女の表情に謝罪の意思は一切なく、何事も無かったかのように倒れた私を担ぎ寝台に戻した。

セイバーは私よりずっと小柄だ。それなのに軽々と私を運ぶのは、彼女がサーヴァントであり、筋力が常人のそれを遥かに凌駕する為だ。

「それで、他には誰が居た?」

「最初に言ったぞ。そなたの命の恩人が居たと」

あんな辺鄙な場所に?

少なくとも最西端に着く前の三日間は、誰とも会わなかった。真っ直ぐ目指していたのもあるが、それでも人を助けるような者が来る所ではない。居るとしたら、物取りや他の参加者の妨害を目論んでる様な連中だけだろう。

それに……私は狐憑きの娘と戦っていたのだ。発見されるなら、私と狐憑きと恩人の三人ではないのか？

しかし実際に居たのは二人、狐鈴はどこへ行った。

最後に在る記憶は……短剣を突き刺した感触。間違いなく私は命中させた。肉を裂き骨で止まる感覚も覚えている。

私は勝つたのだろうか。『ルルフレイカー破戒すべき全ての符』が通常以上に効力を発揮しなければ、私は反撃を受けて死んでいる筈。だが、現にこうして生きている。

恐らく 勝利はしたが、第三者の介入で戦いが終わった。

もしくは 敗北したが狐鈴の立場や状況が変わり、見逃された。私が思考に耽っていると、ふと僅かな魔力を感じた。力はセイバーの方から放たれている。

「こら！ 考え事なら余も混ぜよ！」

セイバーに頭を叩かれる。それは中々の一撃で、先程痛めた首に追い打ちを掛ける形になった。

こちらは病み上がりなのに容赦はない。

そうだな……私の考えと事実の誤差について聞いてみるか。

「もう一人、金の瞳を持つ八尾の女が居なかったか？」

「そのような者は居なかった。余を疑うのか？」

「いや……私はそいつと戦っていたのだ」

そういえば……狐憑きに殴られ、激痛を生んでいた腹部に違和感がない。

鳩尾の右側に恐る恐る触れてみる。通常時と変わらない感覚だ。先程投げられた時も、力が抜けただけで他に気になる事はなかった。

不可解に思い、簡単に自分の体を解析する。
結果は魔力が二割程度に減少していること事を除けば、私は快調
そのものだった。

「内蔵のことか？ それなら善良な人が治してくれたぞ」

セイバーが可笑しそうに言う。

しかし簡単に言ってもらっては困る。

内蔵を直すのは、魔術的にも外傷とは比べものにならない程難しい。直視できず繊細で、肝自体に大量の魔力が詰まっている。

下手をすればむしろ悪化させる可能性もあり、治療の難度は外傷とは比べものにならない。

更にあの時は、負傷後に全力で走り、大量の魔力を消費した。箱庭のサーヴァントは生身を得ている。それでも体を動かしているのは魔力だ。それがなくなれば、治癒力や生命維持能力も低下する。狐憑きに止めを刺そうとしたとき、既に私は限界だった。相討ち覚悟の一刀は奴に届いたが、そこから先は……

「またそなたは考え込む。悪い癖だぞ？ 直せ」

内蔵を短時間で癒すような人物。

彼女はその者と会っているのなら

「私を直した者はどんな姿を？」

「うむ、無意味に禍々しい男だ。黒を基調とした地味な和装でな、縦長の袋を持っていたぞ」

セイバーは楽しそうに話す。どうやら私の恩人は彼女に気に入られてしまったらしい。何故ならかのジャは初対面の相手に対しては、基本的に舐めて掛かる。善良な人。私の恩人。これら良い部分を強

調しているのも気に入った為だろう。

それに『禍々しい』という言葉には、一人だけ心あたりがある。もちろん確証はないが、その『恩人』は奴である可能性は高い。一目見て禍々しいと言われる者はそうそう居ない。

「そいつは何か言っていたか？」

「そなたの治療をした後に、そなたを頼むと言って消えたぞ。文字道理な」

ならその時点で狐憑きは居なかったのか。

確か男の名は……亡護とか呼ばれてたか。奴も八雲紫の協力者なら、狐憑きを助けに来たのだろう。しかし私を治療したのは何故だ。死なれては困る理由でもあるのだろうか……そうになると、狐憑きの行動はおかしい。

彼女は紛れもなく私を仕留める気だった。余裕を見せず攻め続ければ、ものの数分で私は死んでいただろう。

もし八雲紫の思惑と関係なく私を襲ったなら、彼女は独断専行したことに成る。しかし理由が解らない……この四ヶ月間、私は特に目立つ行動はしてないと思う。能力を危険視されたとしても、既に制限は付けられている。

矢張り狐憑き独断なのだろうか……

「治療はどんな方法だった？」

「患部に手を当てて目を閉じたら、高速で治癒したぞ。魔力では無い何かを感じたが、恐らく霊力か妖力と呼ばれるものだろう」

またか。

魔力以外は範疇外で、何をされたのかも解らない。

奴の固有能力の可能性もある。『違和感を無くす』の次は『人体修復』だろうか。

そもそも能力は幾つまで持てるのだろうか……不確定要素が多すぎる。亡護も人間に見えたが、二週間前に会った二人の前例もある。もしかしたら天狗や河童かもしれない。

ここまで普通に話していたが、私はおかしな事に気付いた……セイバーはどうやって私の元に来たのだろうか。口ぶりからして、私の居場所を知っていたようだが。

「君はどこで私の居場所を知った？」

「この城に来たとき怪しい女を見つけ、問い正すついでにそなたの事を聞いたのだ。そうしたら知っていると申して、言う通りの日時と場所に向かったら、本当に居たのだよ」

私の事を知っている女……藤原妹紅か上白沢慧音の二人。

確かに最西端を指しているとは言ったが、日時までは解らないはずだ。一体誰が我々の事を知っていたのだろうか。

「それから今朝方、な

」

セイバーは近くの机に置いてある封筒を取り、私に見せた。

「二股の尾を持つ娘が、そなたに手紙だと言って余に渡して行ったのだ」

今度は二尾か……もう尾裂おひきで纏めてしまおう。

しかし、二尾の尾裂なんて私は知らないぞ？

「そなたも隅に置けぬのう」

セイバーは腹の立つ笑みを浮かべている。

大方、恋文か何かと推測しているのだろう。

「私はそんな娘は知らない」

私が箱庭で接触した人物は 禍々しい亡護。八尾の狐憑き永添
狐鈴。征服王アレクサンドロス、不老不死の藤原妹紅。ワ・白沢の
上白沢慧音。

そしてセイバーこと、暴君ネロ・クラウディウス。人外みたいな
知り合いはこの六人だけだ。

実に濃い面子だな。

……やはり二尾の娘との面識はない。また違和感を消されてい
れば、真実は解らないがな。

「兎も角読んでみよ。童女の好意を無下にする事は……余が許さな
い」

無闇やたらと威嚇と威圧を発し、手紙を早く読むように催促する。
しかしまだ、好意かどうかは解らない。飾り気のない封筒を手渡
され、怪しみながらも封を切った。

中には手紙が数枚入っている。

行数の短いものが一枚。紙に隙間が無いほど書いてあるものが一
枚。

何やら赤い文字が見える物が一枚……

「余は廊下に居る。終わったら呼ぶが良い」

封筒を開くの確認し、彼女は退出した。

これは彼女なりの配慮だろう。封筒を届けた娘も気に入られたよ
うだ。そうでなければ、この封筒は私に届く前に紙くずに成り、ご
み箱で眠りに付いていた可能性がある。

彼女は自分を愛するものを愛し、嫌うものは徹底的に嫌う。もち

るん気に食わないものも嫌う対象だ。
そして可愛らしいものや美しいものを溺愛する。美的感覚も奇抜だ。

その真名は 生前暴君として名を馳せた、ローマ皇帝ネロ・クラウディウス。

ローマの大火の犯人として、キリスト教徒を迫害したり、宴会で自分の悪口を言った議員を多数処刑する等、歴史上でも稀に見る横暴な人物だ。

しかし英雄として聖杯戦争に召喚された彼女は、大分ましな性格に成っている。

私は十分身勝手だと思うが。

最初に、一番文字数の多い手紙を手にとった……いざ読み始めようとしたら、一行目に

『短い手紙、長い手紙、赤い文字の手紙順番で読むように』

と書いてある。

仕方なく短いものを読み始めると、一行目は同じ文句で始まった。二行目からは

初めまして。

私は八雲藍さまの式で、橙ちえんと言います。

手紙を届けたのは私だけど、要があるのは裁我さいがだよ。

狐鈴をいじめたのは不味かったね。藍さまも仇討に行くとか言い出すし、大変だったよ。

あいつも凄く怒ってる……手紙読むとき気をつけてね。

字数の少ない手紙は、封筒を届けた娘からの様だ。

こいつも八雲藍なる九尾の狐の眷属か……『八雲』の姓。

境界を操る妖怪も同じ苗字だった。

八雲紫も狐なのか？ それに『藍』と『紫』。この二人のどちらが上位に位置する存在かで主催者陣営への見方が変わってくる。

紫も藍の眷属ならば、黒幕は『九尾』に成る。しかし紫を最も上位にした場合、境界を操る妖怪に高速治癒を使える人間らしき者。九尾の狐が仕え、更に二尾と、八尾の狐憑きが居ることに成る。

判明しているだけで五人。分かっているだけで、まだ協力者は居るかも知れない。

しかも私は、この内の三人と敵対している。

九尾には仇と言われ、恩人を怒らせ、後一人とは殺し合いの末に不意打ちだ。

私はとても先行きを不安に思う。

それに……『気を付ける』とは、呪いでも掛けてあるのか？
—
応注意しながら読もう。

次に文字の多い手紙を読み始める。

久しぶりだな、衛宮士郎。

この度は我々の同胞が多大な迷惑を掛けたようだ。

結果どうであれ、狐鈴が先に手を出したのは事実。本当に済まない。俺びとして腹部の怪我を治療しておいた。症状は肝臓に傷がつき、内出血を起こしていた。その体で良く闘ったものだ。感服する。消費した魔力については自然回復を待つてくれ。こちらも治療に相当力を使ったのでな、本拠地に帰着した後には人の姿が取れなくなってしまう。不満だと思うが我慢して貰いたい。

被害者であり、病み上がりの貴殿に言う事ではないが、あの『破戒すべき全ての符』という短剣の使用は控えて欲しい。あれは貴殿が概念をねじ曲げた事により、異質なものに成った。元は魔術を破壊するものだったが、今はあらゆる神秘や幻想を破壊できる。もちろん効果対象の力も関係してくるが、それでも下手をすれば、世界そのものを変えかねない。狐鈴の狐憑きは先天性のもの故、消される事は無かったが、彼女は自信と活力を無くし、死人の様な表情しかしなくまっってしまった。

ここまでは丁寧な毛筆だったが、突然筆跡が乱れ始めた。

私は加害者側で文句を言える立場で無いことは解る。

我々は争いを起こしたからこそ、自身で決めた法を守るべきだ。だが私は、もしも次にこの様な事が起きれば、たとえ世界に罰せられようと貴様を殺す。私達にとって永添狐鈴とは良心であり常識だ。特に私は彼女の師であり僅か数日間だったが、親代わりをしたこともある。故に彼女が如何に努力家で人間好きか知っている。

ただ一つ覚えておけ、貴様は四百年かけて積み上げた狐鈴の時間をぶち壊した。

これ以上は書かない。最後の手紙を読め。

二枚目の手紙には止めようのない怒りが綴られていた。

……意外だった。

あの男は情に浅い人物だと考えていた。

しかし文面を通して伝わってくる怒り。上部の謝罪は建前だ。

内心は怒りと怨みに満ちている。下部は字が歪みすぎて読みづらく、

奴の憤慨が滲み出ていた。

残るは最後の一枚。内容は一行。幾重にも折りたたまれ、開けるのに手間がかかる。

最後の一折を開くと……赤い文字でただ一言

救われた者などいない

字を理解した瞬間

脳が焼きつくような感覚に陥った。

「ぐうあああああああああああ

」

絶叫する。

焼けるような感覚は脳でなく眼球。

目玉の表面から高熱が伝わり脳の入り口までを焼き尽くす。

「何事だ！」

セイバーの声が聞こえたがそんなモノはどうでもいい。

ただ目が熱く喉が乾き、叫びはぐもった呻きに変わる。

「何があつたのだ！」

返事をする余裕はない。

灼熱は消えることも無く、徐々に脳を焼き始めた。

「何事です！」

「映姫！ 余も解らないのだ。アーチャーが突然叫びだして」

「直前に何をしていましたか？」

「手紙を」

「貸しなさい！」

手元に在った手紙を奪われる。

しかし熱は消えず 頭が……脳が溶けそうな程あつい。

「水を！」

「わ、分かった」

あまりの苦痛に息が詰まり初めて気が遠くなってゆく

「去りなさい！」

水が叩きつけられる音が明瞭に聴こえ、雫が弾ける音と共に少しずつ熱が散っていく。

「足りません、同じ量を後三杯」

「直ぐに用意する。待っておれ！」

引いたと思つた熱は直ぐに戻つて来た……

先程までの苦痛を再びなぞるような感覚に、脳が限界を訴え始めた。

「持ってきたぞ」

「こちらに……離れて」

眼球の映像を伝える器官が……熱を直接脳へ伝達している。
異常な反応を神経が起こし始めて体が痙攣する。

「貴方たちはこんな所に居てはいけません。主の元へ還りなさい」

鈴のような音が聞こえたと思ったら、水中に居るような感覚に見舞われた。熱は水に溶け初め

「アーチャー？ ！」

「 ！？」

苦しみが薄まるにつれて……気も遠くなっていった

倒れた狐憑きの心臓めがけ、歪な刃を突き出した。

短剣は狐鈴の胸に突き刺さる。しかし歪んでいた視界のせい、狙いを僅かに外してしまった。

肋骨の隙間に差し込み、止めを刺そうとした瞬間 私は物凄い力で弾き飛ばされた。

空中に放り出された私は、宙に浮いたまま吊り下げられた様な姿で止まる。

「衛宮士郎……貴様！」

咳き込みながらも突然現れた人物を睨むと、前以上に禍々しさを背負った男がいる。

その表情は怒りに溢れているが、直ぐにこちらに背を向けた。

「今は時間がない……狐鈴」

「……」

「狐鈴！」

奴は狐憑きに駆け寄り、なんども呼びかける。

その瞬間気分が悪くなる程の禍々しさは消え去った。先程までが嘘の様に清廉な雰囲気すら漂わせている。

「……はい」

「十分だ。初陣にしては良くやった……もう戻れ」

「でも」

「藍殿から話があるそうだ」

「……解りました」

狐憑きの姿が消える。

男が現れた方法と同じだろう。確か……八雲紫の能力だったか。

「衛宮士郎」

奴が私に恨みがましい視線を向け、ゆっくりと近づいてきた。

私は不可視の呪縛から逃れようと腕に力を入れるが、腕どころか指一本動かない。

疲労のためか呪縛の力かは解らない。

「貴様の行為は万死に値する」

呪縛への抵抗を諦め、男に視線を戻す　すると奴の手には先程までは無かった筈の『長大な何か』が在った。しかし視界は捻れてはつきりと見ることは出来ない。

「しかし……貴様らを完全に殺すには……まだ力が足りない」

長大なものは一度煌き、透明な軌跡を残した。

斬られたのか？ ……解らない。当の昔に痛覚は失われた。

「ここで話したことを貴様は覚えていない。纏めて捨ててやった」

捨てた？

どちらにしても、私はもう助からない。弾かれたときに腹部に衝撃が走り、それ以降感覚がない。ただでさえ限界だったのだ、数分もしない内に私は息絶えるだろう。

「……令呪を」

遙か遠くで、令呪の行使を感じる。

「……トレス、
投影、オン開始」

衰弱しきった私は、抗うこともなく剣を投影する。

何を複製したかも解らない。しかし宝具級のものだ。

限界を超えて行使され、魔術回路は悲鳴を上げた。

男は地に突き立つ赤い剣を引き抜き、布らしきもので包んで横に置いた。

「治してやる。そして乱世で苦しみ、正義の味方」

奴が私の前で膝を折り、右手を出して腹部に翳した。

その表情は苦渋に満ちている。息の根を止めたくて仕方が無いのだらう。

「もうすぐ貴様の知人が来る……己はお前を許さない」

理不尽だ。

私は命を狙われたのに、四ヶ月も騙され続けたのに。先に不意打ちしたのも狐憑きだ。お前が治している傷も狐憑きが付けた。

それでも、そんな目を向けるのか……お前も異常だらう。オレだけおかしい筈がない。お前もこっち側だらう？ そんな普通の反応はやめる。お前はいかれている。初めて会ったときに理解した。『同類』だと。

それなのに

「アーチャー！ 何処だ、何処に居る」

セイバー？ 何故彼女が……来てはいけない、まだ早い。

「少し早いな……問題ないか」

駄目だ、今ここに来てはいけない。

「アーチャー！？ 貴様……アーチャーから離れよ！」

「黙れ小娘……忘れて沈め」

近くで軽いものが倒れる音がした。

ほら、お前も異常だ。内蔵を治しながら英霊の意識を奪っなんて『ぶつっ』じゃない。

「衛宮士郎。お前に願いはない……貴様に同類などいない」

……言っな。

「貴様は取り残された。自身の介入により『世界』から『過去の自分』から『未来』から……お前に真の意味の居場所はない」

いっな。

「思い出せ、貴様の奥底にある『孤独と孤立』……そして忘れよ」

やめろ……わたしは

「目覚めよアーチャー！」

頭の側面に強烈な痛みが走る。

「そこまで！ それ以上殴っては、今度はそれが原因になります」

体が宙に浮くに感覚があり、次の瞬間には水浸しの床が私を迎える。

やけに重い体を起こすため手をつく。頭の中で暴れる鈍痛に、顔を歪めながら人の気配のする方を向いた。

「すまないアーチャー。余が付いていながら、呪い一つ防げぬとは……」

あの熱は呪いか……文字は恐らく血で書いてあった。書いた奴も予想がつく。九尾の狐か亡護だ。あの二人は私を恨んでいる。今のでそれは確実に成った。

二人にその事を伝えようと、目を空けたとき……

「どうした？ まさか……まだ何か在るのか！」

「そんな筈は……」

私の目に映ったのは 赤い筈のセイバーの服が、漆黒に染まり。彼女の金髪は白髪に成っている。

自分の手に視線を移すと、浅黒かった肌は濃い黒に成っている。セイバーの横で、心配そうな表情を浮かべている少女も黒い服装だ。葬式でもないだろうに……皆黒ばかり。壁に掛けてある自分の外套が視界の隅に写る。これも黒一色。

他の色を探そうと、黒い床に差し込む何本もの白を辿ると、窓らしき黒い枠がある。

その向こうには白い雲と、一面の黒い空が広がっており、黒い陰に沈んでいく真白の半円が見える。

風が吹いたのか、半円を飲み込む黒い陰は波打ち、数多の虫が蠢動蠢動しているように見えて、気持ちが悪くなる。

……黒と白しか無い。どんな色でもいい。とにかく他の色を見たかった。

黒い部屋に視線を戻し色を捜すが見つからない。

先程の文字を思い出して手紙を探すと、黒い机の上に白い長方形を見つけた。

私は正面に居たセイバーを押しつけ、手紙に手を伸ばす。

「映姫……呪術は解けたのではなかったのか！」

「解呪された筈です。私も衛宮殿が何をしているのか……」

彼女たちの声など気にしない。今は色を探すことが大事だ。

他の二枚を放り、水で湿っている手紙を、これでもかと言つほど慎重に開く。

そこには何も無かった。

救われた者などいない

赤い字でそう書いてあつた筈なのに……

「どうしたのだ！ 黙っていても解らぬ！」

「無くなった」

「何？」

「……色が無い」

私の瞳は 漆黒と真白の二色しか見ることが出来ない。

色の区別は文字通り二色。濃い黒と何も無い白。

人の表情一つすらまともに判断できない。顔にある陰や光が当たって出来る。明るさも無い。

陰は深い黒に。光はただの白に。

「白と黒しか判別出来ないのだ……」

「ッ!？」

「……診せて頂いても宜しいですか？」

セイバーの隣に居る娘が言う。

そういえば、目の熱を祓ったのもこの娘か……もしかしたら治るかもしれない。

早くこの世界から出して欲しい。

「ああ……頼む」

モノクロの世界は心に悪い、気を病みそうだ。

「映姫はオルクスだからな、きっと大丈夫だ！」

「出来れば閻魔と言って欲しいのですが……」

オルクスは……ローマ神話の死の魔神だったか。

閻魔ならば、むしろデイスかプルートの方が近いだろう……

しかしこの娘が閻魔だと？ 正直信じられん。だが、不死者に尾裂にワ・白沢。そんな連中が居るのなら、閻魔が小娘でも有りなのだろう。

「四季映姫・ヤマザナドゥと申します。ヤマは閻魔を、ザナドゥは楽園を意味し、実際の名前は映姫までです」

『楽園の閻魔』か、魑魅魍魎が跋扈する場所を楽園と例えるか……悪くない冗談だな。

「私は……衛宮士郎だ」

アーチャーではなく衛宮士郎。

今の私は英雄とは呼べず、守護者ですら無い。

故にただ一人の人間。サーヴァントでもなく、だれに使役されることもなく、何かを願うことすら無い。

色を失った私は何かに縋りたかった。しかし色だけでなく、他に無くなった気がする。

その曖昧な思いは捨てられた子供の様だ。柱を無くした家のようにでもあり、とても心元なかった。

そんな存在を英雄とは呼べない。

私は……救う側から救われる側に成ってしまった。

「先程調べられる事は調べたつもりです。現在貴方には、禁を破らない限り、問題のない呪縛が二つ掛かっています」

開戦時に亡護に掛けられたものだ。

私は先日まで忘れていたのに、外部からの検査で解るとは……腕はそれなりに在るらしい。

「その二つは貴方と完全に一体化しており、解呪も強制発動も不可能です。他に術を掛けられたことは在りませんか？ どんな些細な術でも構いません」

それは凄いです。

しかし、私にも思い当たるものは無い。

掛けられていた術といえば……狐憑きの能力が掛かりやすく成るものだけ。

「違和感を無くす能力を、効きやすくする術なら掛けられたが……それは解いたぞ」

その術式は、私が破戒すルブレイカーべき全ての符で破壊した。欠片すら残っていないはずだ。

「もしかして……狐鈴さんの能力ですか？」

「ああ、私は四ヶ月間その狐憑きに騙されていた」

ものの見事に気付かなかった。

何度か気づきかけたが、その度に

「目だ……狐憑きの目を見る度に効力が強まった」

「その術を掛けた術者は知っていますか？」

「ああ、な」

声が止まる。

男の名を発しようとした時、令呪の力が働いた。

私は会話の内容を言うつもりはない。しかし開戦時の会話というだけで、他者へ伝えるのは無理らしい。

「アーチャー？ そなた、令呪を掛けられているのか」

「……」

私は答えられない。

それすらも話すことは許されないようだ。

「……令呪という事は、主催者陣営の者ですね」

「知っているのか？」

「君主は皆、一定の期間ごとに主催者陣営に領内の事を報告すると、

功績に応じて報奨金を渡されるので、何かしらの繋がりが有るので
す」

全く知らない話だな……旅をしていた私達には関係の持てなかつ
た事だ。

「そうですね……先程の手紙に在った呪いは、亡護裁我という人物
のものが掛けたものです」

私が出たのはそいつだ。

しかし私は動けなくなっていた。反応を示そうとしても、体が言
うことを聞かない。

「呪いの内容ですが……自身の血に火性の式を宿らせ、元々存在し
ていた他の術を再現。それを媒介に変質させるものです」

術の再現。

つまり、無くなっても関係ないのか？

酷い術だ。呪いは感情によって効力が増す。奴は余程私を憎んで
いるのだろう。

「変質した術は呪いに成り、媒介にした術が作用する場所を起点に、
精神を蝕みます。もう一つは、呪術が発動したことを自身が知るこ
とができるものですね」

あと少し長く続いていれば、私は気が狂っていたか脳の神経が焼
き切れて廃人に成っていた。

蝕むなんて生やさしいものではない。

術者に発動が分かってても、手を出されなければ意味はないが……

「それで……色が無くなったのは？」
「そちらは呪いとは関係有りません」

では何だというのか。

過度の精神負荷で、色覚異常に成った。とかではないのか？

「色は戻る可能性も在ります……でも、運が悪ければ二度と戻ることは有りません」

「早く言ってくれ」

「先程名前の出た、亡護という男の能力です」

固有の能力という奴か。

色覚を奪う……辛くはあるが、あまり多様性は無いように感じる。

「彼の能力 『森羅万象を別つ程度の能力』。恐らく此れによつて色覚と貴方の存在を分けられました」

……森羅万象。それは宇宙に存在する全てのもの。

それを分かつたど？ そんな者にどう対抗しろと言つのか……
しかし、私は落ち込む前に疑った。

そもそも嘘の可能性も考えたい。閻魔といえど命を狙われては従わざるを得ないだろう。

私はあからさまに疑心を表情にした。それに対して映姫がどのような反応をするか確かめるために。

「嘘では有りません。この能力も万能ではありません。力が凄くとも使うのは人間です。血を流せば死にますし、力を使えば疲れます。何よりこの能力は、分けることしか出来ません。能力を解いてしまえば自然に戻る事は有りません」

私はあまり変わっていない気もしたが、最後の一言に希望を持たた。

能力を解けば終わり……ならば、私を脅すため、もしくは反抗させない為に、力の行使を続けていけば、色は戻るかもしれない。無理やりなのは分かっている。

それでも継りたい。今の私は、心に深い穴が開いている様な気持ちだ。

ただ寒く。虚しく。悲しい。

人の声を聞くと少し落ち着く。しかし踏み入られるのは嫌だ。

……嫌ではなく、恐いのかも知れない。私は何かを失った。それは間違いない。それが解らないことが恐ろしい。

昔　まだ未熟で、自分の正義と現実の狭間を迷っていた頃。

私はとても不安だった。今の気持ちはその時に似ている。

「なら……もう一度、亡護と話せばはつきりするな」

精一杯の虚勢を張る。

今の精神では固有結界を使うことすら難しいだろう。

そうなれば、私は宝具と呼べるものも失うことに成る。

「そうですが……あ！　まだ動いては」

「セイバー……手を貸して欲しい」

「ああ！　もちろん良いぞ」

セイバーに肩を貸してもらい、寝台へ戻った。
私に英雄と呼べる大偉業は無い。
せいぜい、生涯自分の意地を張り続けたくらいだ。

「セイバー……君は今、何をしている？」

「いきなりどうしたのだ……余は征服王の元で、属国の君主として
侵攻に協力している」

「君が？」

セイバーは私が唐突に切り出した話題に戸惑っている。

彼女はとても自尊心が強い。たとえ征服王に勧誘されようとも、
受け入れるとは思えない。

「願いだ。余は統一に手を貸す代わりに、願いを叶える権利を貰っ
ている」

「願いととは？」

「忘れたか？ 我らのマスターは不治の病に冒されている。余はこ
の戦いに勝利し、我が奏者^{マスター}の病を治す」

成程……矢張り彼女は、暴君ではなく英雄として召喚されていた
ようだ。

主であり、友である者の為に他を犠牲にする。それでも彼女は迷
わない。

白い半円が姿を消し、彼女の顔は黒に染まっている。そのせいで
表情は解らないが、さぞ真剣な顔をしているのだろう。
迷い始めた私とは大違いだ。

「私にも手伝わせてくれ」

「元よりそのつもりで探していたのだが……」

彼女は言いよどむ。

病み上がりの私を心配してくれるのか？

私には願いが無い……無いと言っより見つからない。

今は……明確な目的が欲しい。

「しかし良いのか？ 余は手段を選ばない。そなたの流儀に反するのではないか？」

「私だけ除け者にするきか？ キャスターはどうだ」

「あやつは当の昔に見つけておる。今は別の所に居るが、余の見方であることに代わりはない」

「なら私も良いだろう。手伝わせてくれ」

キャスターは忠誠心の塊だ。その真名は、たまものまえ玉藻前。

平安時代末期に鳥羽天皇とりはてのうみに仕えた、九尾の狐だ。

天下一の美女と呼ばれ、同時に国一番の賢女とも謳われた。

そんな彼女も力があるのは怨霊としてで、聖杯戦争においては英雄として呼ばれた事により、力を大きく制限された。元々九尾であるのに尾は一尾しか無い。

そかし彼女もまた、英雄として召喚された。生前果たせなかった願いだである

主に忠誠を尽くすということをお願いしていた。

結果として、マスターに対して異常な忠誠心を持った。

途中まで非協力的だった私とは違う。

「アーチャー、そなた少しおかしいぞ」

「変わったのだろう。箱庭の力で」

私は皮肉を込めて言った。

実際思考が大分変わった気がする。

私は皮肉屋と言われても、暗い考えを持つことは無かった。

常にただ一つ事柄を胸に、不屈にして不敗を貫いていたはずだ。

「アーチャー、よく聞け。貴様の変わる向きは間違っている」

そんな事を言われても、変わる瞬間に自覚はない。

「余には暴君と呼ばれた過去がある。故に、ここでは善政を心掛けている。実践出来ているかどうかは別として、余は少しでも良い方に変わろうとしている」

セイバーは胸を張って自信たっぷりと言う。

それに対し、私は勢いに押されて聞き役に徹するだけだ。

「迷いがあるなら……余がそなたを導こう。そして、その芯の抜けたような性根を叩き直してやる！」

セイバーは、寝台で上半身だけを起こしていた私を担ぎ上げた。

「離せ！」

「抵抗してみよ。それが出来ぬのなら余に従え！」

こちらの意見は関係ない。

彼女は、私の魔力が少ないこと知っている。そもそも、剣の英雄に弓使いが取っ組み合いで勝てるわけがない。

腕力。技術。体力。全快時であろうとも、どれ一つ勝るものは無い。

「映姫！ 世話になった。内政は頼むぞ」

「ええ、衛宮殿を導いて上げてください」

「任せよ！」

セイバーは部屋を出て駆け出す。
映姫は閻魔のくせに、こんな横暴を許していいのか……

「これより約三百五十キロを駆け抜ける」

セイバーは散歩に行くのと同じ事のように、簡単に言った。
その距離をずっと担がれたまま!?

「私は病み上がりだぞ!」

「違う! 未だ病床に居るべき身だ」

余計に悪い。

暴君は病人であろうと鞭打つのを躊躇わない。

長い廊下を走り過度を曲がったとき、開いた大きな窓が見えた。
セイバーは更に足を速める………まさか!

「飛ばぞ! 人を担いでどこまで飛べるか試してやろう」

「下ろせ!」

私は弱々しく抵抗するが

「暴れるならたたき落とす」

その一言で一蹴された。

速度は既に五十キロを越えただろう。

人間が出せる速さではない。サーヴァントの筋力故に成せる技だ。
もちろん受身も取れず落とされれば、私は死亡するだろう。

「よし! それでいい。子犬ように縮こまっておれ」

酷い言い草だ。

しかし私の命は、セイバーが握っている。反抗すれば即死刑だ。

「うむ。今はそれで良い、しかし……変わってもらっぞぞ！」

暴君は窓の縁に足を掛け、力を殺さず踏み出した。

「そなたが不抜けたままでは、あやつに合わせる顔が無い！」

私は少女に担がれたまま、白黒の世界に連れ出された。

第五話、そして男は歩き出す（後書き）

序章完結です。

私は fate のキャラクターで、アーチャーがとても好きです。
衛宮士郎の箱庭での戦いは、ここから始まります。

今回は弐章を始める前に、閑話と裏話を一本ずつ。

裏話は八雲紫。閑話はセイバー『ネロ・クラウディウス』が主人公です。

裏話、黒幕は考えた

今日で開戦から五ヶ月経つ。

私達はこの五ヶ月間、箱庭に生まれた異常を調べていた。

しかし調査を初めてわずか数日、英霊の監視も始めたことにより人手が足りなく成る。対応策を練りに練ったが、結局三人では不可能という結論にたどり着き、渋々藍と橙狐鈴を招いた。

三人を招いたことも含め、私は当初の計画からかなりの方針変更を余儀なくされた。

それもこれも……ファントムが英霊なんて言う規格外の存在と、幻想郷の者たちを喚び出した所為だ。

今日は五ヶ月間の調査報告のため、箱庭に降りていた皆が帰ってくる。

基本的に『監視空間』には私とファントムしか居ない。

主催者陣営に加わっているのは『身内』と呼べる四人だけ。しかし身内言っても……それは何時でも拘束できる者たち、という意味だが。

最初にファントムが連れてきた亡護裁我は、名前を私が所有している。

名前とは存在そのもの。それを他人に所有されるということは、絶対的命権を握られる事に等しい。

それに奴は三つの名前がある。生まれて直ぐ付けられた名前。私たちと接触してから付けられた第二の名前。今の亡護裁我という第三の名前。私は第一と第二、第三の名前の半分。つまり奴二人分と半分の存在を掌握している。名を行使して命令すれば、決して逆らうことは出来ない。反抗など不可能だ。

八雲藍は私が使役する式神で、橙は藍が使役する式。狐鈴は藍に永久の忠誠を契約している一族の末裔。後ろの二人は藍が傘下に居る限り反抗はしない。

狐鈴の契約とは、昔　鎌倉時代の災害時に、狐鈴の祖先が藍に救われた事への礼だ。

永添の祖先が住む村は国中を襲う凶作により、大飢饉に見舞われていた。更に追い打ちの如き地震による土砂崩れで、村は壊滅の危機を迎える。

そのとき藍は現れた。山より迫り来る濁流を払いのけ、村に豊作を約束し、その年は近年稀に見る大豊作に成った。

それに対し恩と畏敬の念を覚えた村の人々は、神社を建てて藍を九尾の狐を祀り始めた。

代表者として村長の家族が神使に成り、この時『末代までの忠誠』という契約を結び、永添の姓を藍から与えられる。

そして各代の長子の内、力ある者は狐憑きとして生まれる様に成る。異常な信仰心が、人間を祀る存在に近づけたのだ。

しかし藍は、ここまで感謝された事に困惑する。

濁流を払いのけたのは、偶然居合わせた自分が泥水を被る事を嫌った為。豊作を約束したのも、それで肥えた人間と収穫された作物を自分が食べるため。

真実とは悲しいものだ。それを知ってなお忠誠を失わない永添の者は、真の忠義ものか……狂信者のどちらかだ。

また狐鈴の力は歴代の狐憑きでも並ぶ者がいない程の潜在能力を備えていた。そして不老を会得し、本物の妖獣ではないのに尾を増やす境地に至った。

先の四人にファントム……体と意思を得た願望機と私を加えた六

人で、箱庭は管理されている。しかしファントムは奔放過ぎて、事
実上五人……更に狐鈴が弓の騎士に挫かれて四人……裁我は弓の騎
士の治療と復讐をして自滅、瀕死に成り残るは三人。

私は全体の管理と移動の手助けもあつて箱庭には入れない。

橙はまだ未熟で一人で行動させられない。単独行動はお使いか届
けもの程度だろう。

つまりはこの一ヶ月間、実質藍一人で箱庭内部を担当してもらっ
ている。

まさか節目と決めていた開戦五ヶ月のひと月前に成つて、六人の
内二人が行動不能に成るとは……まあどちらにしても、調査の成果
は今日報告される。

たとえば死に体であろうと、憂鬱であつても報告はしてもらおう。
そうでなければ一人酷使されている藍に、申し訳が立たない。

紫様、準備は万全です。

丁度藍からの念話が来た。こちらにも連絡が来るのを待っていた。

行くわよ？

どうぞ。

監視空間と箱庭の境界を操り、人一人通れるくらいの道を創る。

二つの世界を往復するには、私の力が必要だ。

箱庭は世界の境界に浮かんでおり、監視空間はその近くに在ると
いうだけで、世界どうしは接地していない。

箱庭から一步出てしまえば、人も妖怪も消滅する。故に行き来に
は、私の力で移動させる必要がある。

一時的に二つの世界を繋ぐスキマを通り、藍が顔を出す。

心無しか少し瘦せた気がするが、倒れて居ないことを賞賛すべきだ。

「お帰り、箱庭はどうかしら？」

「それはもう素晴らしい所です。東西三千キロ、南北二千キロ。それらを私一人……と橙で管理するのは、もの凄くやり甲斐がありますね」

……かつて、これ程冷たい表情を見たことがあるだろうか。

声は弾むように紡ぎ出されているというのに、それに反比例するように能面の如き無表情だ。

生地普通に怒りを示されるよりずっと恐ろしい。

藍の背後に少し遅れて橙が現れた。橙はこの状況を予想していたのか、緊張した面持ちで口を真一文字に結んでいる。怒れる藍と一ヶ月を共にしていた、彼女の心労も相当のものだろう。

何故なら藍は、狐鈴が倒れたと聞いたとき、調査を放り出して仇討に向かった。

橙もそれに賛同して最初は共に向かおうとした。

しかし私の静止を無視した挙句、仕事の放棄をしたため捕縛した。『仇討禁止』の式を打ち込み開放。橙にも同じ物を打ち込ませ、こちらはこれで懲りてくれた。

もう勝手はしなくなると思ったが……藍は諦めていなかった。

自身の調査範囲を広げ、無理やり仇に接触しようとしたから再捕縛する。そして『私の許可なく衛宮士郎との接触を禁止する』と書き加え、再び箱庭に戻した。

藍は不承不承ながらも務めに戻ってくれたが……無言で底なしの不満を訴えていた。

既にこの時点で、藍は暴れだしそうであり、橙は非常に居心地が

悪そうだった。

あれから一ヶ月。とてつもなく辛い時間だっただろう。

「二人ともご苦勞様。報告を終えたら数日は休んで良いわ」

「はい……ご配慮あり難う御座います」

境界を閉じ、ここに裁我と狐鈴が来るのを待つ。

……しかし心配だ。ここ『監視空間』は『箱庭』と概念的に繋がっている。

故にここにおいても『噂』の影響を受けてしまう。

この場合の噂とは、そのままの意味ではない。実際は人々の感情のことを指す。

箱庭とは願望機の中。願望機とは願いを叶える機関。その中に意思を持つ者が入れば、その心は願望に成り実現される。

同じ願いならより強いものが、そして一人の願いより大勢の願いが。

笑う者には更なる笑顔が。苦しむものには一層の苦痛が。

這い上がろうとすれば力が湧き……諦めればどこまでも落ちていく。

狐鈴の怪我が治りにくく、鬱から抜け出せないのも此れの所為だろう。

しかし私が今気にしている事は、藍の性格だ。

藍はこの一ヶ月、復讐心を募らせていた。このままこの状態が続けば、間違いなく復讐鬼と化す。それだけは避けなければ。

何やら衛宮士郎に対して、裁我が手を出していたから、それで少しは落ち着いてくれれば良いのだが……。

「紫さまー。ここってどう成ってるんですか？」

橙が藍の後ろから聞いてきた。沈黙が気まづかったのだろう。

「後で教えてあげる」

「はい」

今は軽い話を出来る雰囲気ではない……無駄話をすると、藍の視線が突き刺さる。

不機嫌なのは分かるが、周りにまで当たらないで欲しい。

橙には後で教えると言ったが、ここはそこまで広くない。本当は今でも構わないのだが。

ここは 『監視室』 『私室兼寝室』 『食料庫』 『浴室』 『厠』に『五部屋』を増設し、それらを数歩程度の廊下で繋いだ世界だ。実に小さいが、ここを消滅から守っているのは私の能力で、広くなればそれだけ消費する力も大きくなる。長く使うためにも節約は大事だ。

『監視室』は、箱庭に対して空間を繋ぎ易くしてある。人の出入りもここから行い、玄関のような役割だ。

『私室兼寝室』は私の部屋。寝台と布団一式、机しか無い。大外監視室で寝起きする為、殆ど創つてそのままだ。物悲しい。

『食料庫』は五年分の保存食が貯めてあったが、人が増えたため外部からの調達も始めた。結果として普通の食事も取るように成った。

『浴室』と『厠』はそのままの意味。そこまで広くない。ただし箱庭の構造を、一部持つてきている為、掃除なしで常に清潔。素晴らしい。

増設した『五部屋』は各一人ずつ創ったが、あまり居ることが無いため物置と化している。勿体無い。

その内、狐鈴の部屋には包帯や止血剤等の医療道具が集められている。

彼女の傷は、まだ癒えていない。

橙の一言以降だれも口を開かず、監視室内を張り詰めた空気が支配する。

久しぶりの再開であるというのに、あまりに冷たい藍から疎外感を覚え始めた頃、部屋の出入口の引き戸がゆっくりと開かれる。

そこから限りなく透明に近い霧と、幽鬼の如き足取りの狐鈴が入って来た。

「む？ 紫か」

「私じゃ不満？」

「藍殿に吉報があるのでな」

「その格好で言っても可笑しいだけよ」

霧は入り口付近に居た私に話しかけてくる。

その正体は 瀕死の状態で能力を行使し、消滅寸前まで靈力を絞りつくした愚か者だ。

「お勤めご苦労様でした……お帰りなさいませ、藍様。 橙もお帰り」
「狐鈴！」

藍は狐鈴に飛びついた。

狐鈴は苦しそうだが、慟哭の如き抱擁を受け入れている。

彼女は本当に変わった。つい一ヶ月前まではよく笑い、よく喋り、よく働く神使の鏡のような娘だった。

しかし彼女は、衛宮士郎に戦いを挑んで以来自信を無くしてしまっ

このままでは本当に弱体化しかねない。彼女の結界術は他とは比べ物にならない代物だ。あれが衰えるのは勿体無い。

狐鈴は結界術のみを四百年鍛え抜き、無詠唱で刹那の間に、空間破壊すら防ぐもの張る。それも面ではなく点を集めた結界であり、壊れた所は直ぐに修復可能だ。

彼女が敗北したのは、相性が悪く戦闘経験が乏しかった所為で対応を誤った為。決して力が劣っていたからではない。

彼女は守ることを第一に考えていた。それは生まれたのが戦国時代の真つ只中であり、戦火で町を焼かれて母を無くした所為でもある。

全てに耐え、あらゆるものから防ぎ、誰も傷つけず、友も傷つかない。

それを目指し 約二百年で実現した。

それが彼女の結界であると同時に作り上げた自信だった。しかし衛宮士郎は、砂城を崩すように一瞬にしてそれを壊した。

対する裁我と藍の反応は本当に凄かった。

藍は先程を思い出せば解る。裁我は力が枯渇していたが

「後一手……せめて後一つ消してやる」

と、不吉なことを呟きながらも調査に戻って行った。

しかし復讐の炎は確実に勢いを増し、調査の片手間でも何やら工作していた。そして気付けば人型が取れなくなつたとか言いながら、助けを乞うてきた。

今日こそは真相を問いただしてやろう。

部屋の中で、それそれ好きな位置に座る皆を見回すと、ファントムが居なくなっていた。そういえば藍たちが来た時点で、姿は無か

ったような気もする。彼女はよく姿を眩ませる。初日以降問題を起すことは無くなったが、その代わり箱庭に向かうことが多くなった。だからここに居なくても不思議ではない。

監視室は十六畳程の和室だ。ここで最も広く、最も使用時間の長い部屋でもある。

しかし広いと言っても、監視用の機械装置モニターや未だ数値が解らず動かしていない測定器等が壁の半分を覆い尽くしている。

これらは結構な圧迫感を出しており、息苦しさを感じさせる。

「それじゃあ、第一回報告会始めるわよ。最初は狐鈴から頼むわね」

狐鈴は小さな円卓を挟み、私の向かい側に正座している藍の後ろに控えている。

「はい……衛宮士郎は……衛宮さんは」

狐鈴は俯いて黙りこむ。

彼女に任せていたのは、東西の測量と英霊『衛宮士郎』の担当。絶対の防御力を誇り、どんな攻撃をされても対処出来ると考えて彼女を担当させたが……予想外の結果を招いてしまった。

「先に、地形の方を頼むわね」

「はい……異常無しです」

……それだけ？

狐鈴は口を噤んだままだ。藍と裁我が非難の視線を向けてくる。何よ……悪いのは私か？

測量の目的は、事前に教えておいた数値と実際に測った数値を照

らし合わせ、誤差を調べることだ。

異常がなければそれに越したことは無いのだが、それでも少しは考えとかを言つて欲しいものだ。

仕方なく私は事前に用意しておいた手記に、『東西異常なし』とだけ書き込んだ。

真っ白な紙面にその一言がやけに目立つ。

「それで衛宮については？」

「投影は危険です。藍様と橙は戦つてはいけません……亡護様も避けるべきです」

発言に元気はないが、私は内心ほっとした。

もしも狐鈴が調査の結果すら忘れるほどに追いつめられていたら、どうしようかと思つていた。

藍と橙、裁我が戦わない方が良いというのは、式神の二人は『あの短剣』で式を破壊されるから。裁我に関しては飽くまで危険を回避するという意味でだろう。

彼もまた特殊な存在だ。

異能を破壊する様に成つた、宝具を越えた宝具の前では消滅させられる恐れもある。

しかしこれでは、弓の騎士相手アーチャーに戦えるのが狐鈴一人に成つてしまふ。

彼女は未だ立ち直つていない。人員は常に足りないのだ。不憫ではあるが早く再起して貰いたい。

「ごめんなさい。私はここまでで……」

「十分よ。気が向いたら何時でも言いなさい。仕事をあげるわ」

「ありがとうございます……失礼します」

狐鈴は顔を曇らせたまま部屋を出て行く。
彼女の傷は、もう一ヶ月になるのに塞がらない。これも噂の所為
だろう。負の感情が、回復を遅らせている。
どうにかして気持ちを变えさせないと……。

「次は藍の番よ」
「私と橙の報告は纏めますよ」

藍の表情は依然冷たい。笑顔が戻ったのは狐鈴が居た間だけ。
大人しいのは、裁我からの朗報を楽しみにしているからか？
しかし後ろの橙は相変わらず緊張している。あとで木天蓼^{またたび}をあげ
て労おうか。

彼女たちに任せていたのは、南北の測量と地質、水質の調査。そ
れに魔術師^{キャスター}、狂戦士^{バースカー}、暗殺者の担当。

藍なら、相手が魔術を使おうと気配が薄かるうが、どんな状況に
も対応出来ると考えた。
そして見事に果たしてくれた。宝具を複製する衛宮士郎が異常な
のだ。

「狐鈴と同じく地形に変化はありません。水質地質共に正常でした」
そうになると……箱庭の自然自体には影響は無いのかもしれない。
英霊や妖怪が現れたとしても……いや、むしろ妖精が居ることで
良くなるのか？

兎も角これで懸念が一つ消えた。やっと人物のみに集中できる。

「それなら『あの計画』を始められそうね」

「はい。とつとと仇を仕留めましょう」

藍は半眼で裁我に視線を向けた。

……あの計画とは、使い魔^{サヴァント}への対抗策の事だ。生きていても死んだ後も扱いに困る連中を、箱庭の為に『使う』計画。

しかし計画の中心人物は、体を保てず霧に成っている始末だ。

「そんな目を向けなくてくれ」

「自業自得ね。藍、続けて」

「英霊たちの動きは、まだ少ないですね」

確か……最後に報告を受けたときは、担当の三人全員が主を持つた。ということまでだったか。

あれから進展はあったのだろうか。私は人間たちと幻想郷の全員の管理だけで手一杯だ。

「先日……狂戦士の戦う所を見たのですが、意思のある狂戦士は恐ろしい限りです」

狂戦士……ギリシヤの英雄ヘラクレスは、狂戦士で在りながら狂化が解けて意思を持っている。

能力の増幅は無くなったが、冷静に成った結果『射殺す百頭』^{ナインライブス}と呼ばれる宝具が開放されたらしい。

この宝具はある種の流派であり、ヘラクレスが生前にヒドラを殲滅した際に使用した、弓の能力を模した攻撃方法。高速の九連撃を放つ対人用。竜型^{ホミングレーザー}の追尾光線を、九発同時照射する対幻想種用等の型がある。

唯一の救いは……彼を象徴するヒドラの弓を初め、武器を持って目覚めなかった事。

極力こいつは相手にしない、敵に回さないように気をつけたい。

「それで、最初は何奴にする？」
「狂戦士……といきたいけれど」
「世情的には騎乗兵ライダーだろう」

騎乗兵こと征服王アレクサンドロスは、現在最も覇者に近い。

彼は綿密な計画を練り、開始四ヶ月を味方作りに割いた。未だ各地で小規模な戦を繰り返していた諸侯を纏め、丁度狐鈴が事を起こす一週間ほど前に旗揚げをした。現在は全土の三分の一、箱庭西部は殆どが彼に掌握されている。

彼の後ろには数多の将兵が付き従い、異国の王としての威光を遺憾なく発揮している。

「決まりか？」

「決まりね。最初の標的は征服王アレクサンドロスよ」

「己は大分弱っているからな、年を越えないと仕留められないぞ」

「全然構わないわ。英霊達には、自分が消費した力の分だけは働いてもらうから」

彼等のせいで相当苦勞させられた。

早すぎる統一されては困るが、国づくりや集団の基板くらいは作ってもらおう。

「私達はこのくらいですね。橙はいい？」

「良いよ」

「なら次。裁我、朗報期待してるわ」

「任せてくれ」

裁我は部屋の壁に接して座っている……のか？

藍の今後は彼の言う朗報に掛かっている。下手に冴えない内容だ

「だったら、怒りを爆発させるかもしれない。しかし能力を使ったようだが……実際何をしたのだろうか。」

彼の役目は剣の騎士、セイバー 槍の騎士、ランサー 騎乗兵、ライダー 事前調査で特に危険と思われた者たちの担当。及び非常時の工作員だ。

「剣の騎士は空間を書き換える大魔術を。槍の騎士は一撃必殺の宝具を。騎乗兵は固有結界を。いずれも使われれば面倒なものばかりだ。」

「剣の騎士は予想以上の者だ。己の隠蔽術も見破られたしな」

「どの程度のもの？」

「三等級の視認障害だ」

「それ、そこまで驚かないわよ」

彼の言う三等級の視認障害とは、大体集団に紛れて人にぶつかっても気づかれない程度の術。

要は姿消して、存在を木の葉程度まで薄める術だ。

「凄いように聞こえるが、見えない木の葉の様に成るだけで動く気配は有る。注意力や警戒心の強い者なら気付く。」

「二流や三流ならば通用するが、一流を越える英霊に聞くとは思えない。」

「剣の騎士の評価は余程低かったのか？ それだけで驚かれるとは。」

「それから、剣を一本手に入れた」

「ああ、衛宮士郎に複製させた奴ね」

「暴君の愛剣。有効に使わせてもらおう」

「何をする気だ？」

「まあ大方予想はつく。また陰湿な手を考えているのだろうか。」

「おい……今陰湿だと思っただろう？」

「思ってない。いいから早く続けなさい」

「本当か？ ……まあいい、続ける。槍の騎士はいい奴だ」

「会ったの？」

弓の騎士を除いて、極力接触は避けるようにと言ったのに。

ネロだけでなくそいつまで……

「程良く戦闘狂で、気前のいい者だ。出来れば友好的に行きたい」
「駄目よ」

英霊たちには消えてもらう。

出来るとしても、完全に放置するくらいだ。彼等は目を離すには危険過ぎる。

特に必殺の宝具を持っている槍の騎士は、早めに始末しておきたい。生き物には心臓があるから。それを潰されては死んでしまう……死なない奴もいるが。

「次いくぞ？ 騎乗兵は危険だ。掴みどころがなく、人を惹きつける存在感がある。己もあんな長ならな……」

「何よ、不満でもある？」

「もちろん」

そんな事を言うか。そもそも人の下に入る気なんて無い癖に。

こいつは名前の拘束が無くなっても、今は私に協力するだろう。

だがもし私より目的の為に使える者が現れば、直ぐ様そちらに向かう。こいつはそう云う奴だ。昔から。

「それで征服王に仕掛ける日だが、己は今から一年後を目指そうと思っ」

「私も賛成です。それより早く朗報とやらを」

藍が待ちきれなく成り始めた。これ以上時間を掛けると危険そう
だ。

一年後なら、彼の勢力は相当強大に成っているだろう。そこで組
織の長が死没すれば……その領地の取り合いで乱世は加速する。再
び群雄割拠に成り、勝利を諦めていた者達も戦いに加わって行くだ
ろう。

「藍殿も焦れているし、待望の成果を教えよう」

「早くしなさい」

藍は半分切れている。

恐らく裁我はその姿を楽しむように観ているが、あまり続けると
霧の体が消されてしまう。

「先ず狐鈴を助けに行った時点で、衛宮士郎の傷を治療しただろ？」

そこは知っている。

問題はそこで何をして、その後何をしたかだ。

「そこで己は、直前の記憶と奴の『正義』を存在から切り離れた」

記憶は解る。元よりそのつもりは在っただろう。

しかし正義の味方から正義を取っては、何も残らないだろう。酷
い事をする。

彼は真の正義を、生涯貫き続けた。その陰には常人とは比べ物に
ならない『孤独』と『孤立』、隣人すら手にかかる悲しみがあつた
はずだ。

それを正義という思いで押さえ込んでいたのに、それを奪われては彼の歪さが表面化して壊れてしまうのでは？

「記憶はそのまま破棄したが、正義は分けただけだ。何時でも戻せる」

「消してしましましょう」

「落ち着きなさい」

藍は依然無表情のままだ。

本当に心配だ。このまま彼女が変わってしまったら、私の仕事を代行出来る者が居なくなってしまう。

先程から橙の怯え方が一層ひどく成っている。藍の式である彼女は主の感情が伝わりやすいのだろう。

しかし正義を残しておいたのは正解だ。それは強い交渉材料になる。冷静さを欠いても、打つ手は成果を出してくれる。これで自滅さえしなれば……。

「そうだぞ藍殿。もう二つある」

「それでこそ亡護さんです。ですが前置きを長くしないで下さい」

藍が恐い。

何時もの冗談ではなく、纏っている威圧感から九尾の狐という事を再確認させられる。

「次の手は呪術を込めた手紙だ」

「いきなりちやちく成りましたね」

「内容は中々だぞ。呪いは対象の精神的余裕を食らうものだ」

心の支えを奪い、あまつさえ心から余裕を奪う。

しかしもう一手打たれているという。英霊であつても衛宮士郎は人間だ。

人に対してここまでするとは、裁我もここに来て少し変わり始めたらしい。

「更に余裕を無くして、取り乱している内に色覚を奪った。落ち着いて目を空けた時、色の無くなった世界は、支えを失った奴の孤独を増強する」

確かに気が動転している状態で世界から色が失われれば、それは不安になる。

本当に容赦がない。いつそひと思いに命を奪えば良い物を、いつか復讐の代償が帰って来なければ良いが……

それにしても矢張り陰湿な事をしていた。前に書いていた手紙が呪いの元だろう。

「それでそんな姿に？」

「それでは何だ」

「だって……そこで仕留めてくれれば一人減ったのに」

情けは掛けても良いが、怨みで生き残らせるのは危険だ。

「そこは考えている。奴を残しておけば、属した勢力の兵士たちに、出来の良い武器を多数を渡してくれるだろう」

それは戦いをより良い物にするが、奴は固有結界を使える。

生かして武器を作らせるよりは、仕留めて害を無くした方が安全だ。

私達が固有結界を危険視するのは、世界の侵食を恐れているから

だ。

箱庭は小さな世界。固有結界は術者の心象風景を具現化して、界そのものを作り替える最大の禁忌。この世界でそんな物を使われれば構造そのものが侵食され、術者の意識が直接願望機に届いてしまう。

そうさせない為に、弓の騎士と騎乗兵には気を付けなければならぬ。

「矢張り危険性を考えれば」

「奴は時が経てば経つほど、弱くなっていく。既に害は殆ど無い」

「……どういう事？」

「お嬢ちゃんに聞くといい」

そう言われても、ファントムは何処へ行ったのか解らない。

呼べば何処にいてもすぐに来るが。

「今回はこれで良いだろ」

「ええ……衛宮士郎には長生きして貰いましょう」

藍の憂さは少しだけ晴れたようだ。

橙は既に思考を放棄したのか、遠い目をしている。よく頑張ってくれた。

「これでお開きにしましょうか」

「もともと定期的に報告してるのだから、必要なかったのではないか？」

「節目は大事。何事にも境界はあるもの」

「ならお前が操れ」

そうさせてもらおう。

藍は腰を上げ、黙って部屋を出て行く。橙もそれに続き、私に頭を下げてから出て行った。

「それでは……己も休むとしようか」

裁我はそのまま見えなくなる。

視認出来ないくらいまで、体の構成を薄くしたのだ。恐らくもこの部屋には居ない。

「……私はもう少しだけ、ね」

実際今回の会合は、殆ど意味が無い。

定期報告は週一回あり、二日後にはまたその日が来る。

ただ、こうやって全員集まることは滅多にない。

箱庭は争いが絶えないが、孤独だけは無いだろう。皆同じ境遇で、中には生前生き別れた者もいるだろう。それらと再開出来ればまた違った歩みをする事が出来る。

たとえ明日には消え失せる友であろうとも、彼等は手を組み、夢をみる。

……私はその陰で、世界の崩壊を遅らせているだけだ。

ここは狭く広く寂しい世界。ただ争いを管理する為に創られた監視空間。

偶には賑わってみたい。会合なんて口実だ。それに私一人では狐鈴を癒せない。

ファントム。

「はい！ どしたの？」

ファントムが現れる。

箱庭は彼女自身だ。そしてここも箱庭と繋がっている。彼女は全ての声を聞き、全てを平等に叶える。

「衛宮士郎が弱っていくらしいけど」

「それはね？ 彼が正義を 異常を無くしたからだよ」

彼女は全てを知っている。

しかし聞くたびに答えが変わることもある。全てを知っているから、それを他人に教えることで未来は変わる。聞かれれば答えるが、自分からは決して教えない。

事実、当初狐鈴は無事に務めを果たす筈だった。

後にファントムに聞けば

（紫が聞いて、余計なことを言ったから世界は変わったんだ）

そう答えた。

私がファントムの話を聞いてから、狐鈴にかけた言葉は

（安心しなさい。きっと上手く行くわ）

私は自信を持ってそういった。

未来を知る者に答えを聞いたのだ。失敗は無い。問題もないと思っていた。

しかしその言葉が彼女に変化をもたらした。結果として彼女の心を砕き、衛宮士郎にも買う必要の無かった怨みを押し付けた。

諸悪の根源はわたしだ。

「衛宮士郎の投影は、彼の心そのもの。それは無限の剣製と呼ばれ、正義というとても冷たい心」

未来を知ることが役にたたない。

知ること別の可能性を殺し、知ってしまった未来も少なからず変えてしまふ。

「だからね……それを失った彼は暖かくなっていくの。氷が水に成るように、彼は変わっていく」

私はどうするべきだろう。

……まだ始まったばかりだ。不安になってどうする。常に前向きでなければ、気を沈めると更なる深みに嵌る。

「彼は人に近づいていく。それは英雄から遠ざかる事と同じ」

本当に扱いにくい世界だ。

幻想郷が可愛らしく思えてくる。落ち込む事すら許されない。

「だから放っておいても大丈夫だよ。戻したく成ったら亡護さんに言えばいいし」

その大丈夫は当てにならない。

しかし少しずつ投影が弱くなっていく事が分かった。

衛宮士郎には悪いことをした……障害に成るまでは、生かしておいてもいいだろう。

「じゃあね紫。私は戻るよ………まだ始まったばかりだからね」

「ファントムは姿を消した。」

まだ五ヶ月。早くも問題は山積みだが、どうにかするしかない。
そうでなければ 幻想は現に消えてしまうのだから。

裏話、黒幕は考えた（後書き）

裏話です。八雲紫は考えました。

九頭龍閃！ バーサーカーは狂ってません。まともに戦える相手は居るのか？

次回は閑話です。セイバー！

閑話、忠節は命運を喰らう(上)(前書き)

閑話の主人公はセイバーだと言っていました。が、狐鈴視点の吉章に変更しました。

閑話、忠節は命運を喰らう(上)

窓のない私の部屋は明かりを付けておらず、とても暗かった。

つい最近まで使うことの無かったこの部屋は、布団と姿鏡、小さな神棚以外は何も無い。しかし今は包帯や消毒液が散乱していた。

護りという事において、私は絶対の自信を持っていた。数日前、自身の力を過信して一人の英雄に挑むまでは。

私の役目は衛宮士郎の排除でなく……監視と報告だけだった。それなのに欲を出し、自分の領分を超えてしまった。

失敗するのも当然だろう。私はまともに戦った事が無い。常に耐え凌ぎ、負ける事も勝つこともなく戦いを避け続けてきた。そんな私が、いきなり一流の戦士に挑んだ所で勝てるわけが無かったのだ。如何に能力的には優っていても、経験が圧倒的に違う。それでも……私は勝ちたかった。

一筋の光も差し込まない竹の林。竹に寄りかかるような姿で、私は目を覚す。

それから直ぐに聞えて来たのは 争い合い覇者を目指せという言葉。

声の主は八雲紫。

並ぶ者の居ない大妖怪であると同時に、私が仕えている方の主で

もある。

そのような方が、意味もなく嘘を付くとは思えないが……事実であって欲しくないという思いが強い。

普通の人間であれば歩くことすらままならない、軟らか過ぎる地面を踏みしめ、私は暗い林を抜けようとしている。

林の暗闇は疑心を深くし、一步踏み出すたびに足を取られる地面は不安を掻き立てる。

私は居心地が悪くなって走りだす。

足場が悪い所為で何度も躓くが、足を止めれば動けなくなる気がした。

訳が解らない　八雲様は何故戦えと言いつのか。現と『幻想郷』を分ける大結界がどうなったのか。藍様はどこに居るのか………私は何をすればいいのか。

思考が纏まらず、がむしゃらに駆けていると　立ち並ぶ竹の間隙に一条の光を見つける。

そこに向かつて一直線に突き進む。障害は結界で薙ぎ倒しながら。

真つ暗な竹林を抜けだすと　そこは崖だった。

急に明るくなった事により、一瞬目が眩む。勢い良く駆けていた私はそのまま落下していく。

浮遊感を感じ、咄嗟に空中で静止した。

危なかった………今更だけど、結界で身を守りながら飛べば、容易く竹林を脱出出来たのではないか……私は、どれだけ平静を失っていたの。

一先ず落ちたばかりの崖に戻り、腰を下ろす。すると途端に息が切れた。

どれくらい走っていたのだろうか？ 普通なら走ったくらいで息は切れないのに。私の体は人間だが、八尾の狐憑きであるから体力と筋力は異常なほど在る。

不注意で命の危険を感じて頭は冷えたが、不安や疑問は残っていない。

こつという時は落ち着かないと……焦れば自分の首を締めるだけ。つい今しがた危機に瀕したばかりなのだから。

先ず藍様に連絡を取ろう。私は集中し、念話を使うが 繫がらない？

もう一度試してみよう 駄目だった。

この辺りには、五月蠅い電波塔や術式障害の装置は見当たらない。私に憑いている狐は、元を正せば藍様の力の一部。常に最低限意思の疎通は出来るはず。しかし通じない。

……異常事態だ。生まれて四百年、一度もこんな事は無かった。大結界の向こう 『幻想郷』に主が居るときでも会話はできる。それなのに……。

博麗の大結界で『幻想郷』が隔離されて百五十年。その時から私が妖怪と接触することは少なくなつた。その刻を堺に人との関わりも希薄に成っていった。

私は現にて幻想を守護するため、結界の起点と成っている誰も住んでいない神社を守り続けている。

人気のない荒れた神社が残され続けている違和感と。その付近で百年以上変わらない姿で住み続ける私への違和感を消してきた。

私から人と関わりを持たなければ自分の負担を増やすことに成る。だから

ら出来る限り接触しないようにしていた。

根本が人間である私は孤独だった。でも、それが主の願いであり永添の役目でもある。

……しかしここには何も無い。守るべき結界は感じられず、仕えるべき主が居るかも解らない。

私はこの二日後に、紫様から声がかかるまでその場を動かなかった……。

無事に藍様と合流できた。念話を通じなかった事を問うてみると『箱庭』では幻想郷の者は弱体化しているらしい。詳しく聞く時間は無かったが『箱庭』は人間を戦わせる場所であり、人を超える力は制限されるとの事。

しかし英霊たちは例外で、各々が願望機によって存在を確定されている為、弱体化は無い。故に一对一なら妖怪よりも強いらしい。

藍様はおvariなくご健勝でした。しかし橙ちえんがまだ見つかっていないようで、とても心配されている。早く見つかるいいですが、私が見届ける事は有りません。

それは、紫様から弓の騎士アーチャーの監視と、東西の測量を申し付けられたから。

主催者陣営は人員不足だそうで、橙を探す傍ら『箱庭』の調査も進めなければならぬ。私は藍様に合流して、その日の内に役目を貰った。目的が出来たのはとても嬉しいのですが……先に加わっていらしい亡護様は、一度も見かけなかった。休む暇なく全土を飛び回っているらしい。私もそうなるのだろうか……。

少女の姿に化けて準備も終わる。正義の味方を騙すなら、見た目はひ弱なそうな方が楽だろう。

そして　　紫様に『箱庭』へ移動させてもらう際、私の背中を押ししてくれた言葉を掛けられる。

「安心なさい。きつとうまく行くわ」

紫様は何時も正しい。厄介ごとを押し付けたり、自分の勝手に境界を緩めたりもするが、概ね正しい。

だから衛宮士郎に敗北したのは私が弱かったから。実際容赦なく連撃を喰らわせていれば、大して時間もかからず仕留めていた筈。

自身の浅はかさが招いた事態なのだから、主たちは気に病まないで欲しい。

『箱庭』に戻った私は、衛宮士郎に接触する。

自然に見つかるように動き、適当な言い訳で誤魔化しつつ違和感を能力で無くす。

成功させる自信は在ったが……内心発覚するのではないか、と不安だった。

言い訳に使った村には何事も無く着き、適当なお礼を言って別れた翌日、本題を切り出した。

私の任務は監視と測量。

言い訳に使った迷子を理由にして、地図作りの護衛を頼んだ。

衛宮士郎は本物の正義の味方だという。ならば、少女が一人で全土を横断するといえ、必ず付いてくるだろうと私は考えた。

この目論見は当たり、うまい具合に標的の監視を始めることが出来た。

最東端に着くまで一日も掛からなかった。

道中の森で「跳躍して探してくれ」と冗談めかしに言ってみたら…… 本当に跳んだ。これには少し驚いた。私は東端の位置を知っていたし、方向感覚にも自信が在った。東端には早く行きたかったから、そろそろ止めようと思ったとき…… 衛宮士郎は岬を見つける。

私は僅かに警戒を強めた。探索能力は中々高い。

後に早く見つけた方法を聞くと、森を解析して最も東側を割り出したらしい。

東端に着き、手元の情報と実際の光景を照らし合わせ、誤差がない事を確認し終えた。

その後、衛宮士郎に西端を目指す事を「西の果て」という言い方で切り出したら

「インドまで行くのは勘弁してほしい」

「天竺ではありません。箱庭の果てを目指します」

思わず返事で訂正してしまった。そして自分の失敗に気付く。急ぎ振り返ると、弓の騎士アーチャーは疑問に満ちた表情をしている。

墓穴を掘ったことで、能力の効果が弱まった事に焦り、衛宮士郎の顔を両手で掴む。

「アーチャーの騎士」

完全に解ける前に、全力を以て私への違和感を無くした。

人は目から大量の情報を取り込む。術をかけたりの目を通すと掛かりやすい。私の能力は精神と思考に直接割り込むため、目を合わせた方が効力は強まる。

衛宮士郎は無理やり疑問を押しつぶされて、感情の均衡を崩した為気を失ってしまった。私が手を話すと同時に倒れこむ……いきなり大失敗するところだった。

しかし大丈夫だろうか？ 私の力は全力で使えば脳の機能を破壊する。後に支障がでなければいいが。相手は英霊。きっと問題な

「狐鈴」

藍様の声だ。紫様の力を使い、声だけ聞こえる様にしているのだろう……でも、驚くからいきなり名前を呼ぶのはやめて欲しい。

それにしても……さっそく躓いたことが、ばれてしまったのだろうか。先に謝ってしまおう。

「申し訳ありません！」

「どうしたの？ 何を謝ったのかは知らないけど、忙しいから要件だけ伝えるよ」

……良かった。

どうやら私のぼかには気付いていないようだ。

「貴女が担当の衛宮士郎だけど、亡護さんが気を回して能力を効きやすくする術を掛けたらしいの」

……………。

「だから全力で力を使うのは止しなさい。運が悪いと脳が誤認をして、定期的に倒れるように成るから」

もう遅い。その話を聞く僅か数秒前に、使ってしまったのですが。

「それだけ。紫様は結構いい加減だから信じ過ぎないようにね」

それじゃあ　　と言い、藍様は口を閉ざしてしまった。

………恐る恐る足元で伸びている、男の顔を覗き込むと　　泡を吹いていた。

「……………どうしよう」

思わず声が漏れる。

殆ど反射に近かったのだ、私は事の発覚を恐れて違和感を消した。しかし倒れたとしても泡吹くのは異常だ。間違いない………やり過ぎた。

私は間に合わなかった主からの言葉を噛み締めつつ、冷たくなってきた海風を避ける為、衛宮士郎を引きずり森に身を隠した。

定期的に衛宮士郎が倒れるように成り、二ヶ月ほど過ぎた。

あれから能力が効きすぎているのか、『箱庭』の真ん中当たりまで、一切疑いの目を向けられることはなかった。

自業自得だが四六時中倒れる恐れがある為、目が離せない。

元々監視なのだから目を離してはいけないのだが、対象が自滅したり野盗に殺されたりしては、監視は出来なくなる。

もちろんその程度で命を落とすのなら、問題にすらならないのだが……まだ死なせるには早い。英霊たちはそれぞれの能力を見極め、役に立ちそうなら残しておく。緊急性の高い能力を持っていたり、普通の人間に負けるような者なら即刻仕留める。今の予定はそんな所。

しかし衛宮士郎は、生存させる事に成っている。初日に亡護様が接触したのもその為だ。彼の投影は、強力な武器を作ると同時に戦を早く終わらせる。

「なあ九咲^{くしゅう}。今日は山には登らないほうがいいと思うが？」

「今日は降りません」

九咲とは私の偽名。九咲は『くさき』で九裂^{くたれ}き。尾が多数在る妖獣は尾裂^{おひき}と呼ばれる。

九は藍様から頂いた。しかし名を問われて数秒で思いついた名前だから、最初の内は呼ばれても気づかなかった。でも違和感は覚えられなかった。彼の頭の中が心配です。

「早く引き返さないと、降られるぞ」

「今日は登山日和です」

確かに空は曇っている。それでも今日は降らない。天気を占つてもいいが、それより確実なものがある。

それはファントム。彼女はふらっと現れて、私に数日分の天気を教えていく。

運勢を教えたり誰と会うかは全く言わず、私と話そうともしない

で言うだけ言って姿を消す。

何を考えているのか……しかし助かっているのは事実。今は甘えておこう。

ファントムも主催者陣営の一員なんだ。悪いことは考えて無いと思う。

「もうちょっと登ったら、少し休みましょう」

「分かった。なら休むのに良さそうな場所を」

「どうかしました？」

衛宮士郎が立ち止まる。先程まで天気について不満を訴えていたとは思えない程、その表情は真剣そのものだ。

「見られている」

「……知り合いですか？」

「分らない……行こう」

私は頷いて弓の騎士に付いていく。

こういう所は流石と言わざるを得ない。私は索敵や探査が苦手だ。視線だけでは相手を知覚できない。四百年も生きているのに、戦いを避けて防衛結界だけを鍛え続けた報いだ。

今は任せよう。戦いになるのなら、彼の方がずっと上手だ。

頂上に近づくと、大きな……とても大きな男が、太陽を背負っていた。

私は、これ程まで風格の在る人間を見たことがない。きっと織田信長はこんな感じなのだろう。残念ながら、私が直接見た

のは猿と称される豊臣秀吉と、狸と呼ばれる徳川家康だけだ。どちらも常人では無かったが、人の域を超えてはいない。

しかし目の前の男は何者なのか……神々しい訳でも禍々しい事もなく、人でありながら一瞬で解る圧倒的な存在感。

真の王とは、目の前の人物を指すのだろう。

「貴様はサーヴァントだな」

「うむ！ サーヴァント・ライダー。余の名はイスカンドルだ」

衛宮士郎が口を開き、王がそれに返答する。

ライダー
騎乗兵　イスカンドル。私は日本史なら見てきたから相当強い。

しかし海一つ越えた、中国の事すらよく知らない。

でも……きっと途轍とてつもない偉人なのだろう。

「何を黙っておる。貴様も名乗らぬか」

「そうですね……イスカンドルさん、私は九咲と申します」

「娘、大儀である！ さあ娘も名乗ったぞ。それとも貴様には名乗る名すら無いのか？」

挨拶だけはしておく。

兎も角、決して敵には回さない。それを最優先にしよう。

二人は会話初め、情報収集に勤しんでいる。

その内容は　私が紫様から聞いた話の一部。私は全て知っている情報だった。

「誰が居たのか教えてもらえれば助かる」

「愚か者！ 勞せずことを知ろうとは……対価をよこさぬか」

その為聞き流していたが、イスカンドルさんから思わぬ一言が発

せられる

「余の臣下に成れ」

「は？」

あまりに唐突な勧誘に、思わず声が漏れてしまった。

「だからな、余に仕えれば情報でも何でもくれてやる」

「断る」

「お断りです」

私には仕えるべき主が居る。

如何に人外の如き風格の、偉丈夫からの誘いであっても否。断じて肯定はしない。

「少しは考えよ」

「拒否する」

「私もです」

……………あ。

これは私に対してではなく、衛宮士郎への言葉だ。

思わず臣下という一言に釣られて答えてしまったが、今の私は、少女の姿をしている。

勧誘される筈がない。もし在っても……………それは違う意味だ。

私が失敗を後悔していると、王の瞳が私を射ぬいた。

「娘も心変わりはないか？」

……その目には少女ではなく、私の 八尾の姿が映っている。
この男は完璧に化けている私の正体を見抜いている。驚愕と共に、
足の先から冷たくなるような恐怖を覚えた。
それでも私は変わらない……変われない。

「はい」

「……良く仕えよ」

私に主が居ることも理解しているのか？

その上、私は断つたのに怒るところか労いまで掛けるとは 危

険だ

「……………はい」

「何の事だ？」

孤独な正義の味方には、解らないだろう。

私は仕える者で王は従える者。

決して一人では居られない者同士、僅かながら理解し合える。

「神には縊れるが、助けてはくれぬぞ」

「あの方は神ではありません」

藍様は九尾の狐。

明らかに東方系ではないイスカンドルさんには、神に匹敵する存在だと感じたのだろう。

主はそれだけの力を持っている。

「そうだったか！ いや、余計なことを言ってしまったか？」

「ええ」

本当に余計なお世話だ。

私の忠誠は揺るがない。私を変えたければ、全身に流れる永添の血を抜ききるしか方法は無い。何故なら永久の契約は血筋そのものに宿っているから。

「余はまだ動かぬ。乱世が始まるまでは、つかの間の平穩を楽しむとしよう」

王は 危険は去った。

あれは別格。まとも当たれば、並の妖怪では太刀打ち出来ない。担当の亡護様が心配になってきた。でも彼人ならば上手く立ちまわるだろう。

異国の王と別れ、ひと月程度経った頃 紫様から連絡が入った。

「久しぶり。いきなりだけど、道筋を外れてもらっわ」

それだと計測が上手く出来ないけれど、良いのだろうか。

「そこから北に約四キロ進むと背の高い森が在るの、そこに白沢と不老不死が居るから、会っておきなさい」

理由が解らない。

私とその二人に会うことで、何かいい事でもあるのだろうか。

「手引きは裁我がしたものだ。今日中に行かないと、会えないから

急ぐ事」

じゃあね、と一方的に話を押し付けられてしまった。

仕方がない……亡護様の手引きなら、悪いことはないだろう。

衛宮士郎に森を目指す旨を伝え、熱くなってきた季節に不快感を覚えながら、私達は歩き出した。

最近は何も倒れることが少なくなった。術式で強化されていたとしても、効きすぎて怖かった。

森に入っただけで、二人の女性が現れる。

この二人が白沢と不老不死……久しぶりに見る妖怪は、昔よりも穏やかそうだった。幻想郷を隔離したのは間違っていないかった。一人きりの百五十年は、彼女たちの助けになっている。

「お前、名前は？」

「サーヴァント・アーチャー」

「衛宮士郎さんです。衛宮さん、名前を聞かれたらきちんと答えないと」

嬉しい……もっと話をしたいが、私はただの少女を装っている。

下手に口を開けば怪しまれてしまう。

でも、現代の人外たちと話してみたい。

「少女と共にふらふらと森に入ってくる男性は、怪しくありませんか？」

「確かに。だが！ オレはこの娘の手伝いをしているだけだ」

偽名なら……教えても問題ないはず。

「申し遅れました。私は九咲と申します」

話の途中で割り込んだ為、衛宮士郎に嫌な顔をされるがそんな事は気にならない。

ただ、彼女たちが返事をくれるのを心待ちにしていた。

「礼儀正しいなあ……焼き鳥いるか？」

「妹紅」

「ごめんごめん。もう茶々は入れないよ」

不老不死の方と思われる、白髪の少女が答えてくれた。

この一言だけでも私は救われた……無駄では無かったのだ。一人で外の結界を守るのは彼女の笑顔を守っている。

そう考えれば、後何百年でも続けられる。

……今、初めて『箱庭』に感謝した。

私が彼女の笑顔を知ることがあり得なかった。結界の向こうに居て、決して会うことの無かった者に出会い、自分が無心にしてきたことの成果を知ることが出来た。

私が表情を変えず、喜びを噛み締めている間も 衛宮士郎と銀

髪の女性の会話は進んで居た。

「それで、貴方たちは何をしに？」

「この娘が」

私の事を詮索されるのは不味い。浮かれた気分が沈ませて、強引に割り込む。

「気まぐれです」

この場全体に能力を展開しつつ、私への興味をそらす。

衛宮士郎は話を急ぎ、女性もそれに呼応したお陰で事無きを得た。

感動が薄れて少し落ち込んだ　すると、向こうで木に背を預けて胡座をかいている白髪の子が、手招きしてきた。

「衛宮さん。焼き鳥食べてきて良いですか？」

「……好きにしてくれ」

一応確認を取り、不老不死の元へ小走りで向かう。

「いるか？」

どこから取り出したのか、少女は熱々の焼き鳥を揺らして、私の反応を伺っている。

……私は狐憑き。もちろん野菜も食べるが、生の肉でも食べられる。焼き鳥や唐揚げは大好物……決して釣られた訳ではない。

「下さい」

あいよ、と言いながらも、手に持っているのは自分で食べてしまった。

食べ終わった串を地面に刺し、悪戯が成功したような悦に浸った表情を見せる。

「質問に答えたら、幾らでもやるよ」

質問？

今回は、何も失敗してないつもりだが……気付かない所で何かやらかしていたのか。

「あんだ、普通の人間じゃないだろ」

「そのような事を言われても……人間です。としか言えませんよ」

迷いなく答える。

それに嘘は言っていない。私は人間だ。ただ少し体が丈夫で、異能を操れるだけの。

「正直に答えないとあつちの男と一緒に……燃やしちまうぞ。こっちは知ってるんだ。お前があいつと繋がってるって事を」

何処で露見した？

二人と会ってからの行動を思い出す……矢張り今回は浮かれていただけで、余計なことはしていない。

「ほら、早く言いな」

……どうする。

答えなければ、弓の騎士にも事が伝わかねない。そうなれば間違いなく監視は失敗。

この二人は亡護様の知り合い。ならば教えても被害は少ないだろう。

失敗するよりはずっといい。

「私は八雲藍様に仕えている、狐憑きです」

「そうか ほら」

想像よりも返事は軽く、何時の間に取り出したのかその手には、焼き鳥が握られていた。

「何処から出しているのですか？」

「この袋から肉を出して、横の竹筒にたれが入ってて、串に刺して後は焼く」

言いながらもう一本取り出した　早い。

一本作るのに一秒掛かっていない。

それを貰い食べてみると……………味も良い。一瞬で作ったとは思えない。

売ったら凄く繁盛するだろうな。

それから黙々と食べる、手渡されるを繰り返す。

六本目に差し掛かった所で、気になって落ち着けないことを聞いてみた。

「あの…………聞かないのですか？」

「何を？」

何って、私が言ったのは誰に仕える何かだけ。

もっと深く追求してこないのか？

「だって、私がここに居る理由も知ってるいるのでしょうか？」

「…………もしかして、さっきのか？　あれ嘘」

「嘘？」

……………まさか。

「騙したのですか!？」

「うん」

少女は表情ひとつ変えず、悪びれた様子もない。

「騙される方が悪い。今はどこでもこんな事は在る。私だって簡単に口を割るなんて思って無かったんだから」

浅はかな。

……私は何時もこうだ。焦ったり慌てたりすると、思考が固まって一つの事しか考えられなく成る。

ちよつと考えれば分かった筈。

私は『箱庭』において存在を偽って生きてきた。私を知る者は本の数名で、それらも口は堅い。

故にこの少女が私の事を知っている可能性は低かった。

「そつちの事情は知らないけど……もう少し軽く考えなよ」

「何をですか？」

「あんたも長生きしてるんだろ。でもその見聞は狭い。簡単に言葉を信じたのがその証だ」

凶星。

私は結界の鍛錬と藍様を信仰する以外に、殆ど興味が無かった。

「だからな？ 一度放り出してみな。それが無理ならより良い方法を考えるとか……兎に角、言われたまま行動するだけなら、子供だって出来る」

そこまで言うのか……。

「でも、どうするかはあなたの勝手だよ。この世界は人が変わるらしいし、変わりたければ頑張ってみれば」

……突き落とされたと思ったら、変われと言われる。

しかし、私が変わることなんて出来るのか？

私の性格は親譲りどころか、ずっと昔の先祖から変わらないらしい。

それに変えてはならない。契約は絶対……の筈。

「私たちは、そろそろ行きますね。縁があれば、また会いましょう」
「九咲、私たちも行くぞ」

気付けば白沢と衛宮士郎の話は終わっていた。

「はい。遅れを取り戻します」

私は自分について考え込んでいた。

……この百五十年。私は全く進歩していないのでは？

結界にしても二百年程前にはば極めてしまって、他の術に手を出すこともない。

毎日を神社の清掃と結界の管理、実力の維持に務め、新たな事を始めようとはしなかった。

一世紀以上の時間が、たった一言で済んでしまった。

このままでは主に顔向けが出来ない。こんなにつまらない人では、

藍様の威光を損なってしまう
く行く。

変わる。それはきつとつま

閑話、忠節は命運を喰らう(上)(後書き)

申し訳ありません！

一言目が謝罪……でも、セイバーを楽しみにして下さった方々、本当に申し訳ない。

変更には理由が有ります。実際セイバーの話も途中まで書いてあるので、チャンスが在ったら投稿したいです。

次回は下を、その次は巻章です。

閑話、忠節は命運を喰らう(下)

白髪の少女に会って以来、ずっと変わる方法を考えていた。

幾つもの案を思いついたが、初めに浮かんだ戦う事が一番早く変化をもたらすだろう。

戦いは、今まで決して正面から向き合わなかったこと。

しかし生半可なことでは変革は訪れない。私が求めている変化とは自分一人だけでなく先祖達が受け継できた心そのものを変えようとしているのだから。

たとえ自信がなくなるとも、今を逃せばきつと過去の自分に戻ってしまふ。

やっと気持ちが変わり始めた 絶対に成功させる。相手のことは四ヶ月も監視していたから、性格や能力もある程度分かっている。能力だけならこちらが上 倒せる筈だ。

最西端に着いた日、衛宮士郎に半刻程1時間離れて貰い、先に測量結果を纏めた。

今夜は新月 霊力と妖力の二つを使う私は、妖力が低下して力が不安定になる。その代わり、低下した部分を霊力で補う形に成り、結界は使いやすく成る。

私の結界術は霊力を主軸として組み、妖力は補強と安定に使っているだけ。新月の日は結界の強度が僅かに下がるだけで、展開と再生の速度は上がる。身体能力もやや落ちるが、それでも奴よりは高い。

………覚悟を決める。今更迷ってどうする。

一撃だ。

能力で違和感をなくしている間に仕留める。初撃で終わらせれば彼も苦しまない。腕力には自信が在る………上手く当てれば重機に穴を空けるくらいは。

そろそろ半刻経つ　此方から行こう。その生命を奪うために。

衛宮士郎の気配を辿って海から続いている川に沿い進むと、彼は川を覗き込み俯いていた。

彼は私に気づいていない。今背後から仕掛ければ………でもこれは、私にとって特別な戦いだ。不意打ちで勝利を収めても、誇れるものではない。この戦いは私を変える為のもの。これから乱世に向かっていく『箱庭』の管理を手伝う中で………人殺しに慣れるための。

「見つけました　探しましたよ」

やっと見つけたような素振りをして、自然に近づいてく。

「半刻過ぎましたよ………何か在りましたか？」

彼の様子がおかしい。呼びかけているのに私の方を向こうとせず、川を覗き込んだまま動かない………能力が解けた訳では無さそうだが。

「地図はいい具合に纏めましたよ。これも偏ひんに衛宮さんのおかげで

す

嘘は言っていない。

実際一人でイスカンドルさんに会っていたら、逃げ出していたかもしれない。

それに……………人間と共に暮らしたのは久しぶりだった。

「時に衛宮さん？　東西は解りましたけど、南北は測っていないですよね？」

俯いていた弓の騎士は、虚ろな目を此方に向けた　彼は何を考えている？

……………行動を起こされる前に、早く倒したほうが良さそうだ。

「でもそちらは、手伝わなくていいですよ……………既に、別の方が調べましたから」

私はゆっくりと進みつつ、右腕を後ろに引く。

衛宮士郎の目前まであと少し　敵に動きはない。

「お手伝い　御苦労さまでした」

引いた腕に力を込め、微動だにしない敵の鳩尾に　鉄塊さえ貫通出来る貫手を放った。

衛宮士郎は吹っ飛び、川の対岸まで飛んでいく。

……………今の一撃は本気だった。迷いも無かったし、貫くことに特化させた力は奴の体から心臓を消し去る筈だった。

しかし直ぐに衛宮士郎は立ち上がり、私を睨みつけてくる。

私は防衛結界と筋力だけなら主さえ凌ぐ……それでも倒せなかったのは……私がまだ迷っていたか、奴が何かしらの対抗策を用意していた、という事か。

「仕留めそこないましたか……次は動かないでくださいね。長引けば苦しむのは貴方です」

今度こそ止めを刺す。

衛宮士郎が飛ばされた先　　対岸へ跳ぶため足を曲げる。

「さあ、今度こそです」

私が跳び出そうとしたとき、敵は身を翻して逃げ出した。

逃げる背中の中へ視線を向けると、低木林が広がっている。見失えば面倒だ。でもあれくらいの木々なら結界を張ってぶつかれば突破できるだろう。

私は川を飛び越え　　小さくなっていく男を追いかけ始めた。

追いつくだけなら直ぐに出来る。

衛宮士郎の足は、先程の一撃が効いているのか人より少し早い程度だ。

対してこちらは矢のような速度。人が走って矢から逃げられないように、彼に追いつくのも時間の問題だ。

「トレス 投影、オン 開始」

投影だ。

しかし後僅かで追いつく。何をしてこようと無駄だ。

「逃がしません！」

「ルールブレイカー破戒すべき全ての符」

衛宮士郎は突然叫び、何時の間にか持っていた短剣を自分の腕に突き刺した。

「何を！？……………術式の破棄？」

「そんな所だ」

敵の奇行と同時に、彼に掛けていた能力の大半が消滅した。それでも完全に消えさった訳ではない。

しかしそれは、今までの余韻でしかない。数分もすれば完全に解けてしまうだろう。

衛宮士郎は足を止めて此方に振り返った。その表情には僅かな希望が見える。

もう一度かけ直そうか……………でも、同じ手で解かれれば意味はない。恐らくあの短剣は、式や術そのものを破壊する道具なのだろう。

……………あれが、危険視されている彼の投影。見た目だけでなく本質さえも複製する力。厄介な。

「どうした？ 誤魔化しはもう聞かないぞ」

気付けば私も足を止めていた。

深く考えるな 経験に差がありすぎる。

一瞬の機転と判断では勝てない。なら単純に考えよう。

あの短剣は危険だから避ける。能力は当てに成らない。衛宮士郎は負傷している。時間を掛けれ絶対倒せる。

距離を一定に保ち、攻撃を防ぎつつ刻を稼げば奴は弱体化してい

く……これだ。

「仕掛けて来ないなら、此方から行くぞ」

術式破壊の短剣が投擲される。これは避ける……出来るだけ自然に。

短剣は予想通り、刃に触れている部分の障害を貫いて飛び続ける。もしも結界を一つ概念で造っていたら、全て破壊されていたと予想される。

それを体を引いて躲し、双剣を構えて突進してくる敵に向き直る。既に奴は、刃が届く距離まで迫っている。投擲と同時に走り始めていたのか。

「はっ！」

駆ける勢いのまま黒い剣で斬り上げてくる。衝突点から鈍い金属音が響くが、私には届かない。

僅か数センチの所で結界に弾かれた。

続けて白い剣も大振りに一閃してくるが 剣を振り切る前、結界に刃が接触すると、ほぼ同時に飛び退いてしまった。

たった二振り。敵の反撃は結界を二度斬りつけただけで終わった。あまりにも呆気無い……しかし彼の氣勢が削がれた様子もない。

「……それが君の力か？」

「はい。厳密に言えば、固有な能力とは別ですが」

私の結界を解析するつもり？

しかしそれは無駄だ。この結界は四百年の歴史を持ち、細かな結

界は原子と同等の大きさ。細菌や核であろうと防いで見せる。でも……あまり密集させると酸素まで通過出来なくなって息が苦しくなる。

……よし。無駄なことと思うくらい余裕が出てきた。

「話しをしませんか？ 改めて自己紹介もしたいですし」「時間を稼げば、そちらが有利に成る」

その通り。倒すのに一番安全なのは時間を掛けること。どうせ命を奪うのだから、能力くらい明かした所で害は無いだろう。

「私の能力も教えますよ」

……返事がない。

衛宮士郎に敗色は見えない。未だ勝利を諦めていないらしい。

決して屈しないその精神には敬意を持てるけど……どれだけ足掻いても結果は変わらない。

彼の攻撃は私に届かないし、それは大多数の者がそうだ。むしろ短剣一本でも結界を越えたことは、凄い事だ。

「何をやる気が知りませんが、どれだけ火力を高めようと無意味です」

「君は全て受け止めるのか？」

「構いませんよ」

結界を破りたかったら、術式破壊の短剣を全方位から撃つしか無い。しかし衛宮士郎が同じ武器を複製している所は見たことがない。商人に売りつける時も何時も違う剣。愛剣の干将莫邪は戦いの終

了と同時に消している。

もし出来たとしても抵抗して喰らう数を減らせる。所詮一本一本は見た目どおりの威力しかない。数本刺さろうと支障はない。

勝てる……変わる。それに受け止めるか聞いたからにはそれなりの攻撃はしてくるだろう。その全てを受けければ、彼も諦めてくれると思う。

「トレース 投影、オン 開始」

安心してきた所で、敵の詠唱により思考を冷ました。

「ロールアウト 工程完了、バレット 全投影、クリア 待機」

「凄いですね……強力な力がこんなに沢山」

空中には、地獄に在るといふ針山の如き刃の群れが浮かんでいる。それらは例外なく私に矛先を向けており、ただの剣も在れば、霊的な力を感じるものも混じっている。

しかしこの程度では一本足りとも突破できない。力押しは自身を消耗させて追い詰めるだけ。

「受け止めてみる！
フリースアウト 停止解凍、ソードパレルフルオープン 全投影連続層写！」

私を包圍している武器の壁が、急激に威圧感を増大させ射出される。

「我が骨子 I am the bone of my sword(狂う)」

それらの後ろに位置していたものが一斉に爆発し、壁はさらに速度を増して迫ってくる。最前列の切っ先が結界に衝突して砕け散った。

次々と押し寄せ粉々に成って行く無数の刃。しかし私に届いたものは一欠片も無い。外で響いているであろう轟音すらも結界は通さない。

急激に移り変わる光景は思考を高速化し、視覚情報は微細な変化すら逐一知覚させる。

鉄の流れに遮られた世界の中で、闇雲に突っ込んでくる多数の武器とは違い、寸分違わず私の心臓を指す一本を見つけた。

それは意図的に配置されていたようだ。周りからの影響を受けず、一直線に向かってくる。先程の短剣と同じものだ。その刃が体に触れば、結界が消える恐れも在る。

避けたり弾いたりしたら全て受け止めるという事には成らない……それでも放置すれば確実に致命傷。背に腹は変えられない。

短剣の切っ先が結界に触れる、その箇所だけ破壊され貫かれる。しかし外の音が聞こえるより早くその穴は修復された。

結界を小さな球体状にしたのは失策だった。それも場に張ったのではなく、私を中心に張ったせいで動くと付いてきてしまう。いまから作り直す時間はない。一瞬でも解いてしまえば数本は突破して直撃する。

悩んでいる間も短剣は進んでくる。力を制限したままでは打開できない……衛宮士郎に正体を知られるのは不味いが、そうでもしなければ対抗できない。

瞬時に変化している少女の姿を霧散させて本来の自分に戻る。童子の身長に合わせて張っていた結界が狭く感じる。体が大きくなつた分短剣との距離も詰まってしまったが、既に問題ではない。

展開中で今なお続く、凶刃の雨を防いでいる結界を変形させ、上部のみ解いて蓋の開いた細長い筒のような形に変える。その瞬間遮断していた轟音が溢れてきた。私は結界をその場に固定しながら内部から外部への干渉を不可に変える。迫る術式破壊の刃を体を反転させて躲し、結界に尾を押し付けて力を加える。紙一重まで肉薄する剣の群れを知覚し、宙を蹴る。同時に結界の下部を解いて地面が消滅して空間が出来ている下方向へ飛び出した。筒状結界から離脱した瞬間に気配を消し、衛宮士郎の居る側の反対方向へ跳躍した。

そのまま樹の幹に隠れ、吹き抜けの筒になった結界を少しずつ小さくしていく。大きさが大人の胴回りくらいに成った時点で完全に消し去り、私は木々に隠れながら敵の背後へ回りこむ。轟音が鳴り止まない内に衛宮士郎の背に近づき隠れた。猛襲が終わるのを待つ。不意打ちはしない。

ここからは確認し難いが、轟音が止んだ。背の向こうに視線を向けると、もの凄い煙霧が立ち込めていた。

「何のつもりだ？」

よそ見をしていら気づかれました。

「あら？ 気づかれましたか……せめて勝利の喜びを胸に、終わらせようとしたのですが」

本当は、私に気づいた瞬間に仕留めるつもりだった。

「避けたのか？」

「そんな事しませんよ」

避けてはいない。実際結果は破られなかった。ただ中に私は居なかっただけで。

今更ながら……幾ら結果を極めたといっても、よくあんな芸当が出来たと思う……もう一度挑戦しても出来る気がしない。

思考能力が高速化した所為で時間の感覚が狂っている。

私としては一分以上経っている気がするが、本当は三十秒も経っていないだろう。

でもこれで、敵はかなり消耗した筈。先程より顔色も悪くなっているが。

「時間は今出来た。自己紹介を頼む」

「ふふふ……はい」

声に諦めは見えない。

最後まで徹底抗戦の構えか……でもこちらは、時間を稼ぐ必要も殆ど無くなった。

私は衛宮士郎の背後か前に回り込み、彼の表情を見ようと顔を覗き込む。

すると、予想通り私の姿を見て愕然としていた。

このまま攻撃すれば勝てるが、元々やると言ったのは自分だ。面白いものも見れた事だし、あと少しは付き合おう。

「改めまして、初めまして衛宮さん。白面金毛九尾の狐、八雲藍やくもらん様に仕え、現にて幻想の守護を任せられています……」

八尾の狐憑き、永添狐鈴ながそでしこすずと申します。貴方を可笑しくしていたのは、私の『違和感を無くす程度の能力』です。注意力や対象への興味を、無理やり無くしていたからですよ」

私の話を聞いているのか怪しいが、少しは時間をあげよう。

「貴方の攻撃を防いだのは、純粹に強力な結界術ですよ」

彼も英雄だったのだから、遺言の一つでも考えているのだろう。
遺す相手が居るのかは怪しいが……。

「何故能力や術のことを教えるのかと言いますと　箱庭では噂が
現実に干渉しますので、強力な力の存在を広めれば、更にその力は
増強します」

話を伸ばせば私に有利に成って行く、しかし嘘を付く気はない。
どうせもうすぐ決着が付くのだから、何を教えても問題ない。

「噂は口伝だけでなく、風に乗って人々に伝わります。同時に弱点
も広まりますが、強ければ強い程、強化される力も大きくなります
から……私には実績も有りますし」

何せ四ヶ月。開始から今日まで騙し続けていたのだから、その効
力は絶大と言っても良いだろう。

でも……何故今日は解けかけていたのだろうか？
いくら新月でも能力には霊力を使っている。妖力とは関係ないの
だけれど……。

「まあその実績は、亡護様なきもりの手助けが在ったからですけど……」

……亡護様の事まで喋ってしまった。

「……その顔は忘れていますね？　開戦の日に男の人と会ったでし

「よう？」

まあいいか、亡護様ならどうにかなるでしょう。

いっそ開き直って話しまおう。隠し事は苦手ですし。

でも……衛宮士郎は疑問を浮かべている。まさか本当に忘れているのか？

「矢張り、やり過ぎたのでしょうか……禍々しさを備えた不幸そうな人です。亡護様は投影制限のついでに、私の術が掛かり易く成る式も混ぜてくれたのです」

「それで、何故私を今になって狙うのかね？」

「やっと喋ってくれましたね！ でも、その答えは秘密です」

やっと口を開いてくれた。

一人で延々と喋って居ると、いろいろ口走りそうに危なかった。

でも衛宮士郎を狙う理由が 自分の独断で、自身を変えるためなんて事を教えたら、付け入る隙を与えてしまう。何より子供みたくで恥ずかしい。だって私は、少なくとも彼の四倍以上は生きているのだから。

「そろそろいいですね……遺言はありますか？」

これ以上喋るとぼろを出しかねない。

そろそろ終わらせよう。

「ああ、遺言なら有る」

てつきり最後の特攻でも仕掛けてくると思っていたが、遺言あるのか。

でも誰にだろう？ ……彼の知り合いも来ているらしいし、その

人達かな？

「誰に伝えれば？」

「赤い少女と、愚かな少年に頼む」

「出来れば名前で……」

「それくらい探せ」

「……はい」

紫様がファントムに聞けば直ぐ解るからいいか。

「では言つぞ？ 一度しか言わないからな」

「はい、然と聞き届けます」

決して聞き逃さないよう、耳を澄まして言葉を待つ。

……… まだかな？

まあ彼なりに思うところでも有るのだろう。

。

「トレース 投影、オン 開始！」

「ッ！？」

彼の右手に短剣が現れ、至近距離に居る私を斬りつけてきた。それを後ろへ飛び退き、紙一重で躲す。

「卑怯です！」

「相手を洗脳して殺す君はどうなのだ？」

「それはそれ！ これはこれです」

呆れた表情をされるが、こちらは何代も前からの宿命。それを恥じることは無い。

しかし不意打ちしたとしても、短剣一本でどうする気だろうか？

速さは此方が上。一定の距離を保ち逃げ続けることは容易だ。

それなのに……敵はその事を分かっている筈なのに、勝利を確信したような、決定的な一手を手に入れたように見える。

「この宝具の能力を教えよう」

衛宮士郎は無表情に、軽く右手を掲げた。

すると私を囲むように全く同じ短剣が出現していく。

同時に何本も複製出来たのか……しかし、それはあらゆる術式を壊すだけの短剣だろうか？ 見た目以上の殺傷力は無いし、結界を気にしなければ簡単に弾く事も可能だ。

「名を『ルールブレイカー破戒すべき全ての符』と言って、真名開放と同時に切っ先に触れている、あらゆる異能や異形を消滅させる」

………術式ではなく、異能や異形？

そうだとしたら……私に憑いている狐はどうなるの？

まだ一度足りとも刃には触れていない。もしあの時、回避ではなく弾いていたら、万が一ついさっきの不意打ちが掠っていたら。

その時点で終わっていたのか？ 私の四百年が………でも、たった一言で表せる人生だとしても、私はこれから変わって見せる。これだってその為の戦いだ。

「嘘です！ 貴方も使い魔サーヴァントですから、自分に刺せば貴方も消えるはず！」

「対象の選択は可能だ。例えば君の結界を通りぬけ……憑いている狐だけを殺すとか」

「……」

返された言葉に迷いはなく、彼も瞳にも一切揺らぎは見えない。
……それでも私は！！

衛宮士郎が空中に静止する凶刃全てに力を通す。

しかし、一向にそれらが射出される様子はない。

「……情けの、つもりですか」

返事は無い。

ただ乞食でも見るような目を向けてくるだけだ。哀れんでいるのか？

……何も知らない癖に。ずっと騙されていた愚か者が私を？
それに……ここで背を向けては変わることなんてずっと出来ない。
い。

私は敵を殺し一線を越える　　これから先も共に在る為に。

「良いのだな？」

「元より藍様の為、この身は永久に消尽する覚悟です」

そう……上辺ではなく、契約でもなく、自らの意思で。

「人間が怪物と生き抜く事など不可能だ」
「我が全霊は」

自分のために、そして。

「ルールブレイカー破壊すべき全ての符！」

「主の為に！」

全てを壊す短剣を、無我夢中で防ぎ続けた。

最後の一本を躲したとき　　私は折れた。

最後に覚えているのは短剣が突き刺さり、何かが壊れた音。
私は負けた。

ごめんね狐鈴。

貴女の能力を鈍らせたのは私なんだ。

紫の一言で貴女が変わって、私も動かざるを得なくなったの。
まだ彼を殺すには早い。

でも、その刻が来るまでに立ち直っておいてね。

永久の忠臣は顔をしかめて眠っている。

彼女の側には、つい今し方まで一人の少女が佇んでいた。

閑話、忠節は命運を喰らう（下）（後書き）

これにて序章完！

の筈です。

もう少し入れたい話もありましたが、流石に本編五話に対して裏話一話に閑話三だと量のバランスが微妙になるので、ここらで止めます。

次回こそ巻章です。

巻章は少しずつですが、集団戦も入れてきます。

序章の登場人物（前書き）

この項では序章の登場人物を紹介します。

序章終了時点での状態、能力の変化などをまとめてあります。

能力は Fate のステータスに、コーエー三国志の武将情報を混ぜた感じです。

それぞれ E ～ EX で表し、武力、耐久、敏捷、統率、戦術、政治、幸運、野望の 8 つがあります。E は常人・一般的。C は人体の限界・十分。A は怪物級・圧倒的。EX は相手にしてはいけない・異常なくらいです。

章内で明らかに成っていない情報は書きません。序章読了後なら、ネタバレはありません。

最後に、能力はかなりの私見が入っているので、飽くまで目安だと思ってください。

序章の登場人物

見本

@名前（原作名）

種族（元・他）

能力

所属『所属備考』

・章内での状態

『所持宝具・固有能力・体調・特筆』

@衛宮士郎（えみやしろうfate/staynight・EXTRA）

サーヴァント・アーチャー（人間）

武力B D 耐久C D 敏捷D 統率D 戦術B 政治C 幸

運D 野望E

無所属『九咲（狐鈴）と行動を共にしていた』

・九咲を手伝いつつ、目的を見つげるために放浪。

・精神操作に気付いて反抗。退ける事に成功するが、色覚と精神構造の一部を失う。

・主催者陣営と敵対。セイバーに助けられる。

『アンリミテッド・ブレイドワークス無限の剣製・色覚消失・中度の精神崩壊』

@八雲紫（やくもゆかり東方project）

スキマ妖怪

武力EX 耐久EX 敏捷EX 統率A 戦術B 政治A 幸運

B 野望B

主催者陣営『数名の部下と共に箱庭を管理している』

- ・紫自身は箱庭の維持に務めているため、争いに介入する余裕が無い。
- ・ファントムの独断により起きた、予定外の事態に頭を悩ませている。

- ・当初の計画との誤差を把握、新計画考案中。
- 『境界を操る程度の力・軽度の精神汚染』

@シユレー・ディンガー（オリジナル）

イレギュラー・サーヴァント・ファントム（願望機）

武力E 耐久EX 敏捷E 統率E 戦術EX 政治EX 幸運EX 野望EX

主催者陣営『紫に根拠の在る信頼を持っている』

- ・独断で、参加者を予定以上に増やす。
- ・箱庭にしばしば出没する。

『願望機』

@亡護裁我（オリジナル）
なきものさいが

思念体（人間）

武力C E 耐久C E 敏捷B D 統率D 戦術C 政治C
幸運A 野望B

主催者陣営『紫に手を貸している』

- ・ファントムに喚び出され、紫の手伝いをする。
- ・九咲（狐鈴）を負傷させた衛宮士郎を恨み、呪いをかけた（色覚の破棄。士郎の正義を精神内で解離）

『森羅万象を分かつ程度の能力・赤い剣・霊力一割以下』

@永添狐鈴（オリジナル）
ながそいこすず

八尾の狐憑き（半妖半人）

武力C 耐久EX 敏捷C 統率E 戦術E 政治E 幸運B

野望C

主催者陣営『士郎の監視の為、偽名を使って行動を共にした』

・紫の指示で士郎の監視を初める。

・監視の合間に自問自答を繰り返し、自身の意義について疑問を持つ。

・妹紅との接触により、変化を目指す事を決心する。

・士郎に戦いを挑み、敗北する。

『違和感を失くす程度の能力・結界『極』・重度の精神崩壊・軽度の精神汚染』

@イスカンダル（fate/zero）

サーヴァント・ライダー（半神半人）

武力A 耐久A 敏捷D 統率A 戦術A 政治A 幸運A 野

望A

所属不明『単身放浪中』

・士郎と九咲（狐鈴）を勧誘。

『大型の黒馬』

@藤原妹紅（東方project）
ふじわらのまこと

不老不死（人間）

望C
武力B 耐久C 敏捷B 統率E 戦術E 政治E 幸運E 野

所属不明『慧音と共に行動する』

- ・ 九咲に助言する。
- ・ 誰かと会う約束をしていた。
- 『老いることも死ぬこともない程度の能力』

@上白沢慧音かみしろさきわけいね（東方project）

ワー白沢（半獣半人）

武力D 耐久D 敏捷D 統率C 戦術C 政治C 幸運D 野
望E

所属不明『妹紅と共に行動する』

- ・ 士郎と情報交換をした。
- ・ 誰かと会う約束をしていた。
- 『無し』

@八雲藍やくもらん（東方project）

八雲紫の式神（九尾の狐）

武力A 耐久B 敏捷B 統率C 戦術C 政治C 幸運B 野
望E

主催者陣営『紫の指示に従っている』

- ・ 狐鈴を負傷させた士郎を恨み、命令を無視して仇を取ろうとする。
- （紫が阻止）

・ ひと先ずは裁我が手を打ったので、怒りを抑えている。
『無し』

@橙^{ちえん}(東方project)

八雲藍の式神

武力C 耐久D 敏捷D 統率E 戦術E 政治E 幸運C 野

望E

主催者陣営『藍を手伝っている』

・狐鈴が負傷した事で藍が怒ったので、士郎に腹を立てている。

『無し』

@ネロ・クラウディウス(FATE/EXTRA)

サーヴァント・セイバー(人間)

武力A 耐久A 敏捷C 統率B 戦術C 政治A 幸運C 野

望B

征服王傘下の王『ライダーに願いを叶えてもらう代わりに統一を手伝う』

・倒れている士郎を発見して保護する。

・士郎を勧誘し、拉致する。

『無し』

@四季映姫・ヤマザナドウ(東方project)

閻魔

武力B 耐久D 敏捷C 統率B 戦術C 政治A 幸運B 野

望E

征服王傘下の王『箱庭南西部を統治している』

- ・セイバーが連れてきた士郎を休める。
 - ・士郎に掛けられた呪術を解呪する。
- 『無し』

能力説明

武力・耐久・敏捷は常に行使出来るものに限る。

(宝具や大魔術などは含まない。身体能力や術の類)

武力 個人的瞬間火力。攻撃技術。

E、1〜9人力 D、10〜49人力 C、50〜99人力 B、100〜499人力 A、500〜999人力 EX、1000人以上

(1×10・5・2・5・2)

単純な腕力を火力として例えると、1対1で戦ったときに、一人分の力で斬りつけるか、千人分の力で斬りつけるかの差。

耐久 スタミナ。防御技術。回避技術。

E、対1〜49人 D、対50〜99人 C、対100〜499人 B、対500〜999人 A、対1000〜4999人 EX、対5000人以上

(1×50・2・5・2・5)

対軍戦闘で例えると、敵と接触して1人の攻撃しか捌けないか、1000人と戦って無傷で居られるかの差。

ただし、いくら耐久技術が優れていても、認識外からの攻撃、睡眠中の不意打ち、体力の低下で死亡する。

敏捷 平均機動力。

E、普通で偶に良い事がある。 D、根拠のない勘が時々当た
る。 C、ここ一番で運が味方する。 B、目に見えて強運。
A、常日頃から強運を発揮する。 EX、あらゆる幸運が味方す
る。

野望 願いへの思い。 目的を達成しようとする意欲。

E、そんな考えはない。 D、生き残るために臣下に成る。 C、
願いは在る。 B、明確な願いを持って行動する。 A、意欲的に
覇者を目指す。 EX、願いへの渴望で狂っている。

なお東方勢は、箱庭ではイレギュラーな存在なので、能力が低下
しています。

八雲紫は箱庭の外にいますので、能力低下はありません。

序章の登場人物（後書き）

お久しぶりです。

なんやかんやと、二ヶ月近くも放置してしまい申し訳ありません。やっと投稿したのが人物紹介ですが、次章からは登場人物が増えるので、毎回章終了時点で載せていきます。

次回は二週間以内には投稿出来るかと。

第一話、再会

知らない部屋で目を覚ました。

最初の日は、自分が起きているのかすらはつきりしないほど、思考が纏まらなかった。

体は気怠く、手足を動かすことすら困難で、あつと言う間に迫り来る眠気に負けた。

次の日は、セイバーに何処かへ運ばれていたことを思い出した。彼女が何処に居るのか気になったが、奇妙な既視感を覚えて気持ちが悪く、意識は直ぐになくなった。

3度目は、この妙な状態に慣れてきたのか、少しだけ思考が纏まった。

しかし記憶には霞が掛かったままで、未だにここが何処なのかは解らない。

恐らくセイバーか、彼女の仲間の拠点だと推測出来る。間違っていないければ、一先ず安心して良いだろう。

4度目は誰かが来ていた。

体も前よりは軽くなっていて、起き上がり気配の方を向くが……何も見えなかった。

それに付いて考えると、頭痛がしてきた。

思っていたより体力は戻っていなかった様で、体は疲労を訴えた。この日はそのまま眠った。

5度目は……今日だ。

思考もはつきりとし、体も動く。

それに、気づいた事も在る。

これまでの4回と今、一度も光らしい明るさを感じて居ない。

夜だからでは？とも思ったが、考えながら手を目の周りに持っていたとき、肌とは違う布らしき物に触れた。

指を布に沿って動かしていくと、目を隠すように頭の後ろで結ばれている。

そのまま指の感触だけで調べて居ると、結び目の後ろにも布は続いていて、目を覆っている部分は3重に成っている様だ。暗くて色は解らず、はつきりさせようと暗視を強化したら……夜闇よりも黒い色が現れた。

黒いだけで模様や術式の類は目視出来ないが、あまりに深い色で長く見ていると気分が悪くなってきそうだ。

目隠しを外そうと手に力を入れるが、何故か不安が掻き立てられ、取り払う事に躊躇を覚えた。

そのまま数分ほど悩み、外すことを決心する。

このまま何もしなければ、また寝こんでしまうかも知れない。

現状が理解しきれていない今、行動を起こすことは重要だろう。

その為にも、視界を埋め尽くす黒色を取り除かないと……

いざ外そうとした瞬間、数メートル離れた辺りに気配を感じた。

視覚から入る情報が極僅かである為、周りへの注意力が高まり、

意識は外部の存在へ向いた。

目隠しを外すか、見つけた者に話しを聞くか、どちらを優先するべきだろう？

自分の立場が解らないから何とも言えない。

セイバーの客人としてここに居るのなら、話しかけて現状を教えてもらった方が良い。

しかし意識を失っている間に何処かへ連れて行かれ、目隠しを付けて牢に入れられているのなら、無闇にこちらから接触せず、様子を見たほうが良い。

……………様子を見よう。

向こうの対応に合わせ、味方なら聞き、敵なら耳を貸す。接触して来なければやり過ぎ、その後を外す。

これなら相手が何であれ、関係無い。
受動的に成るのは危険だが、現状なら危険減リスクらしたい。

気配は颯爽とした足音に変わり、こちらへ近づいて来る。
足音はしだいに大きくなり、急に止まる。

僅かの間が空き、軽く壁を叩いたような音が三回続き、視線を感じた。

「今日は起きてるみたいだな。私の運も捨てたもんじゃないらしい」
……………何処かで聞き覚えのある、高い声が聞こえてきた。

記憶に在る声に少しだけ安堵しつつ、敵でないと仮定して現状を聞く事にした。

だがその前に

「すまない……………誰だ？」

矢張り相手が解らない状態で話すのは不味い。
言うことが支離滅裂に成るかも知れないし、通じない恐れもある。
何より、誰か忘れてしまったままにしておく訳には行かない。

「忘れてるのかよ……………ほら、森で在ったろ？」

森？

記憶は未だに戻りきっていない。
大体思い出せたが、忘れたままの事も在るようだな。

「記憶がまだ曖昧でな」

困ったようなため息が聞こえた。

「まあ、仕方ないか。でも記憶喪失って訳じゃないんだろ？」

心配してくれてるのか。

こちらは誰かも覚えていないのに、ありがたい事だ。

「大半は思い出している………筈だ」

「当てにならないな。私は藤原妹紅。不老不死の人間だ」

不老不死。

この言葉は最近、聞いた覚えがある。

最近と言っても、一ヶ月近く前だった気がするが……

「出来るだけ自分で思い出してくれよ。私だって何があったのか知らないんだから」

森の他に、忘れている所は無いと思う。

箱庭で目を覚まし、妖怪主催の妙な争いに巻き込まれる。

次に、後々私に災いをもたらす自称村娘と地図作りを始めた。

道中、征服王に接触し、勧誘されたな……結局、遠まわしでは在るが、ライダーの傘下の臣下に成ってしまった。

一度断った席に、収まるのは複雑な気分だ。

森は確か、征服王の1ヶ月以上後だった。ワ・白沢の上白沢慧音と、不老不死の藤原妹紅が居て、妹紅はまだ九咲だった八尾と仲が良さそうにしてたっけ。

で、更に一ヶ月ほど後に、正体を表した八尾と相討ちで倒れた。そこにセイバーが何処からか情報を得て助けに来て、私は偶然通り掛かった善良な人とやりに助けてられたらしい。

その後は、四季映姫の城で目を覚まし、そこで呪いを受けて色覚を失い、セイバーに運ばれて彼女の城に連れていかれた。

しかし疲労により途中で気を失い、彼女はそれに気づかず飛ばし続け、城に着いた時点で私は瀕死といった所か。

「ん？ 思い出したか？」

俺が考え込んでしまったから、妹紅は暇を持て余していたようだ。

「よし！ やつと本題に入れる」

まあ用もなく訪ねてくる事なんて、親しい仲でも無ければ無いだろう。

彼女の言葉が、記憶をはっきりさせる切掛に成ったのは間違いない。

出来る限りの事はしよう。

「私はお前の知り合いつて事で、剣帝の代わりに現状を説明してやれって言われてるんだが」

剣帝なんていう知り合いは居ない。

異名か何かなら、思い当たるふしが無い事もないが……

「剣帝とは、セイバーの事か？」

「そうだ。征服王傘下としてのネロ・クラウディウスは、そう呼ばれている」

あのセイバーが好みそうな大層な名前だな。
剣の騎士の皇帝で剣帝か？

「普通にセイバーとは呼ばないのか？」

「せいばー。ねろ・くらうでいうす。武士達は外来語が苦手らしい」

……正念場で、舌足らずに名前を叫ばれても、気が抜けてしまうからな。

私は日本人で良かった。

妙な名前を付けられずに済む。

「それで、当の剣帝殿は何処に居るんだ？」

「戦場で指揮を取ってるよ」

私が連れて来られたのはそんなに前では無いはず。

まさか戦時中抜けだしてきたなんて事は……

「俺を連れてきた時点で、戦は始まっていたのか？」

「お前を拾いに行った時点で、出発まで一週間。そんな緊迫した時期に城を抜けだした上、將軍を見つけてきた！ とか言いながら気絶した男を抱えて戻ってきた日には……」

彼女の声には呆れが混じっている。

それは俺に向けられたものなのか、王に向けられたものなのか。

どちらにしても、剣帝の臣下達にはずいぶん迷惑が掛かっていた
ようだ。

「俺はどう思われている？」

「言わなきゃ解らない？」

言われなくても解る。

連れてこられたというより、運び込まれたといったほうが正しい
状態で来た者が、いきなり上司になっても従いたいとは思わない。

俺だつて願ひ下げだ。

仕事だから仕方がないでは、士気も下がる。

「しかし、明日出発するって時になって、ようやくお前が目を覚ま
すなんてな」

呆れた声は、物思いに耽るような声に変わる。

「これは吉兆だ。戦は快勝かな」

そんな軽い考えでいいのか？

まあ、やる気が出たのは良い事か。

「おい。お前笑ってるけどな」

何だ？

「お前も回復したら加わるんだぞ」

そうか。

俺も肩書きは將軍なのか……単独行動が多く成るのだろうか、目

がこの状態で、弓が仕えるかどうか。

それでも断ることは出来ない。せめて新たな目的が見つかるまでは、手伝わせてもらおう。

「分かっている。それまでには、出来るだけ勘を取り戻しておくよ」「ならいい。頑張れよ」

用は済んだと言わんばかりに、妹紅は足早に去って行った。

元から部屋の入口までしか来ていなかったから、出ていくのはあつと言っ間だった。

第一話、再会（後書き）

短い！

今週は時間が在ると思っていたら、何時の間にか金曜日。

雑な部分も多々視えるかもしれませんが、最後まで読んでくれた方々、ありがとうございます！

次は再来週になると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3208s/>

東方戦国演義

2011年11月16日20時34分発行